

人間ぢやないんだ……」

「イヤ君、僕は君が悪いとは言はない。」と、シトリツは親し氣に、柔しく續けた。「僕は君の手紙も讀んだ。實際、僕が一番悪<sup>わる</sup>かったんだ。次がオリガさんで、其の次が君だ。君が一番罪が軽いんだよ。」

「ぢや、オリガさんは今、何うしてゐるね？」と、オプロモフは慄々<sup>おそおそ</sup>と訊いた。  
「何うしてゐるつて？ 悲しんでゐるさ。慰めやうのない涙を流して泣いてばかりゐる。そして君を恨んでゐる……」

オプロモフの顔には、驚愕と、同情と、恐怖と、悔恨とがシトリツの言葉を聞くに従つて現はれて來た。

「アンドレイ君、君の言ふことは本當かね？」と、オプロモフは席を起つて言つた。「今、直ぐに二人で行かう。僕はオリガさんの足下<sup>あしもと</sup>に突つ伏して謝罪しなけりや……」

「まあ靜かに掛けてゐ給へ！」と、シトリツは笑ひながら遮つた。「オリガさんは元氣がいゝよ、幸福でゐる。君に宜しくと言つてゐた。手紙を書きたがつてゐたが、僕が止めたのだ。手紙など書いて君を波立たせては不可<sup>いけ</sup>ないと言つてね。」

「さうか、それでは安心した！」と、オプロモフは殆んど泣くやうに言つた。「アンドレイ君、僕は實に嬉しい。何うか君を接吻させて呉れ給へ。そしてオリガさんの健康の爲めに飲まう。」

二人は大きな盃でシャンペンを干した。

「今、オリガさんは何處にゐるね？」

「今、スウキツルにゐる。秋になると叔母さんと一緒に自分の村へ行くことになつてゐる。僕は其の用事で今、此處に來たのだ。まだ司法省に少し用事がある。男爵が仕事をすつかり片附けて呉れないものだからね。男爵はオリガさんに結婚を申し込んだよ……」

「まさか？ 本當かね。」と、オプロモフは訊いた。「で、オリガさんは何と言つたらう？」

「謝絶したらしいねえ。男爵、大に落膽<sup>おちつき</sup>して歸つたものだから、僕が今、後始末に來た譯さ！ 今週中に全部片附けて了ふつもりだ。が、君は何うしたんだ？ 君は何うして斯んな田舎へ入り込んだのだ？」

「アンドレイ君、此處は平和で、靜かで、誰も邪魔をする者がいないでね……」

「何の？」

「勉強のさ……」

「冗談ぢやない。此處はオプロモフカより汚<sup>きた</sup>ないぢやないか。」と、シトリツは周圍を見廻しながら言つた。「イヤ君、村へ行かう。」

「村へ……よし、行かう。村では最<sup>も</sup>う近々に建築を始めるはずだ。アンドレイ君、急でなくともいゝが少し智慧を貸して呉れないかね……」

「再<sup>ま</sup>考へるんだね！ 僕は君の考へを知つてゐる。二年前に外國に行かうと考へたやうな考へ方をするのだらう。今週中に行かう。」



『今週と言へばあまり急ぢやないか?』と、オプローモフは反対した。『君は旅行中だからいゝだらうが僕は仕度をしなけりやならない……僕は此處で世帯を持てるんだ。それを捨て、しまふのは惜しいからね。僕には何にも無くなつて了ふ。』

『何にも要りやしないよ。君は何が欲しいんだ?』

オプローモフは黙つてゐた。

『アンドレイ君、僕は健康を害ねてゐるのだ。』と、オプローモフは言つた。『息切れがするし、再た眼丹が両方の眼に出来たし、兩足が腫れて来るし、それに何うかすると、夜眠つてゐると、急に誰かに頭や脊中などを敵かされるやうな氣持がして飛び起ることがあるんだ……』

『ねえ、君、イリヤ君。僕は眞面目に言ふんだが、君は生活状態を換へる必要があるね。でないと、君は水腫症か、大病に罹る怖れがある。それに將來に對する希望を持つてゐなければならぬことは無論だ。オリガさんでさへ、あの天使でさへ君を君の沼から救つて自分の羽子の下に入れることが出来なかつたくらゐだから、僕が何も出来ないのは當然だが、然し小さい範圍の活動を選び、村を整理し、百姓共と交際し、彼等の仕事に手を出して家を建てたり、木を植ゑたりすることは、皆な君の爲すべきことだし又、出来る事なのだ……僕は君から放れないよ。之は、僕がたゞ自分一個の希望を述べるのぢやない、之がオリガさんの意志なんだ。オリガさんは君が僕の言葉に従ふようにと願つてゐる。何うだね? 僕はオリガさんに君が全然死んで了はないやうに、生きたまゝ埋められないやうに、そして君を墓から掘

り出すやうに約束したんだ……』

『オリガさんはまだ僕を忘れないんだね! 濟まない!』と、オプローモフは感激して言つた。

『忘れるものか。決して忘れやしないと。オリガさんは普通の女ぢやないからねえ。それから、君はオリガさんの村へ客に行かなけりやならない。』

『アンドレイ君、今はいけない、今はいけないよ! も少し忘れなけりや、あゝ、まだ此處に……』

オプローモフは心臓を指差した。

『其處に何があるんだね? 愛ぢやないかね?』と、シトリーツは訊いた。

『いや、慚愧と悲哀だ!』と、オプローモフは溜息を吐きながら答へた。

『でも、いゝぢやないか! 君の村へ行くんだもの。君の村は、整理しなけりやならない。今は夏だ。貴重な時期が過ぎて了ふ……』

『いや、僕には委任者があるんだ。其の男は今、村へ行つてゐるから、僕は後でよく仕度をして、考へが纏まつてから行つて差支ないんだ。』

オプローモフはシトリーツの前で、自分が少しも動かずに仕事が出来たか、委任者が逃走した百姓共の整理をして、穀物も有利に賣り捌いたとか、自分に千五百留も送つて呉れたから、多分此年の中に年貢を集めて送つて呉れるだらうなど、自慢らしく言つた。

シトリーツは此の話の聞いてゐるうちに兩手を拍つた。



『君は周囲の者に横領されてゐるんだ!』と、シトリーツは言った。『三百人の百姓から千五百留と云ふことがあるものか! 委任者と云ふのは誰だね! 何う云ふ人物なんだね?』

『千五百留以上だよ。』と、オプローモフは言ひ直した。『だから、其の男には穀物の賣り上げの中から慰勞金を遣つたんだ……』

『幾干?』

『さア、幾干だつたか記憶しないが、何處かに計算書があるはずだ。それを君に見せるよ。』

『イリヤ君! 君は實際、死んだのだよ、滅びたのだよ!』と、シトリーツは言葉を結んだ。『衣服を着換へ給へ。僕の許へ行かう!』

オプローモフは反對したかつたが、シトリーツは無理に彼を自分の許へ連れて行き、自分の名前で委任状を書き、オプローモフに署名をさせ、オプローモフ自身が村へ行つて經營に慣れるまで自分がオプローモフカを借りて置くと言つた。

『君の収入を二倍にしてやるよ。』と、シトリーツは言つた。『だが、僕はいつまでも君の借地人になつてゐる譯には行かない——僕にも自分の仕事があるんだから。今、直ぐに村へ行くから、君も後から來給へ。僕はオリガさんの村へ行かなければならないんだ。其處までは三百露里ばかりある。それから君の村へ行き、委任者を追つ拂つて、僕が整理して遣らう。そのうちに君も來るだらう。僕は君から離れたいからね。』

オプローモフは溜息を吐いた。

『あゝ、それが生活か!』と、オプローモフは言つた。

『ぢや、何が生活だ?』

『忙がしくつて、落着があるまい! 轉つとして眠つてゐた方がよほどいゝ……永久にね……』

『竟り、火を消して、眞暗な處にあようと云ふのだらう! そんな生活もいゝさ! けれども、イリヤ君! 君も幾らか哲學したことだらうが、生活は瞬間のやうに閃めき去るものだよ。けれども君は轉がつて眠つてゐたのだ! 生活は不斷の燃焼でなければならぬ! あゝ、若しも二百年とか、若くは三百年とか生きてゐることが出來たら何んなに面白いだらう!』と、シトリーツは結んだ。『何のくらの仕事を完成するか知れない!』

『アンドレイ君、君はまた別問題だよ。』と、オプローモフは反對した。『君には翼があるのだ。君は生きてゐるのぢやない。飛んでゐるのだ。君には才能がある。自愛心がある。君は酷どく太つてもゐない。眼丹にも罹らなければ、後頭部の痒いのも知らない。君の身體の構造は少し違ふのだよ……』

『オイ、もう澤山だ! 人間は自分で自分を作るものだ。自分の天性を變化させることさへ出來る。ところが人間は腹ばかり大きくして、自然が此の重荷を自分に呉れたのだと思つて御座るし君にも翼はあるが、君は其れを縛り付けてゐるんだ。』

『何處に翼があるね?』と、オプローモフは悲しきうに言つた。『僕は何にもし得ないんだ……』



「つま、君は爲る事を望まないのだ。」と、シトリーツは遮つた。「何にもし得ない人間はない。實際無いよ！」

「でも、僕は何にも出来ない！」と、オプローモフは言つた。

「成程、君は書物も書けなければ、家主に手紙も書けない。が、オリガさんには手紙を書いたぢやないか？其の手紙の中には「存じ候」と「有之候」とが五月蠅く出てゐないぢやないか？紙は縞子製の紙で、インキは英國製で、筆蹟も立派ぢやないか、何うしたんだ？」

オプローモフは眞赤になつた。

「必要さへあれば。小説にしてもいゝ程思想と言葉とが出て来るが、必要がないと、全然駄目だ。眼も見る力を失ふし、手も弱つて了ふ！君は自分の才能をまだ子供のうちから、オプローモフカにゐて叔母さんや、乳母や、叔父さんの間にゐる時から失なつたのだ。最初は靴下を穿くことが出来ないくらいであつたが、終には生きることが出来なくなつてゐる。」

「アンドレイ君、全く君の言ふ通りだ。が、何うも仕方がない。取り返しはつかない！」と、イリヤは決心したやうに溜息を吐きながら言つた。

「何うして取り返しが出来ないのだ！」と、シトリーツは腹立たしきやうに反対した。「詰らないことを言はず、僕の言ふことを聞いて實行し給へ。さうすれば取り返しがつく！」

が、シトリーツは一人で村へ行つた。オプローモフは秋になつて行く約束をして留つた。

七二八

「オリガさんには何と言はうか？」と、シトリーツは發つ前にオプローモフに訊いた。

オプローモフは首垂れて、悲しさうに黙つてゐた。が、やがて溜息を吐いた。

「僕のことをオリガさんに言はないで呉れ給へ！」と、遂々彼は心配さうに言つた。「そして僕には會ひもしなければ、僕のことを聞きもしないと言つて呉れ給へ……」

「オリガさんが信じないよ。」と、シトリーツは反対した。

「ちや、僕は死んで了つたと言つて呉れ給へ……」

「オリガさんは泣くよ。慰めるに困る。また、彼女を悲しませるには及ばないぢやないか？」

オプローモフは凝つと考へ込んでゐたが、彼の眼は濡れてゐた。

「ちや、よし。僕はオリガさんを騙して、君が彼女を記憶することと生きてゐると言はう。」と、シトリーツは言葉を結んだ。「嚴密で眞面目な目的を捜してゐると言はう。君も、生活其者と勞苦とが生活の目的で、女ではないと云ふことを認め給へ。此處に君達二人の誤があつたのだ。オリガさんが何んなに喜ぶか知れない！」

彼等二人は別れた。

三

タランチェフとイワン・マトウエイチとはイリヤの記念日の翌る日の晩に、再た事務室で落ち合つた。



『お茶を持つて来い!』と、イワン・マトウエイチは陰鬱に言ひ附けた。掃除人が茶とラム酒とを持つて来ると、彼は不満さうに蟻を掃除人に突き返し、『之はラム酒ぢやない。石竹酒だ!』と言つて、外套の衣匣から自分の蟻を取り出し、栓を抜いて掃除人に匂を嗅がせた。『今後、斯んな酒を持つて来ぢやならないぞ』と、イワンは言つた。『何うだ、君、困つたことになつたぢやないか!』と、掃除人が出て行つた時に彼は言つた。

『さうだ、飛んだ奴が来たもんだ!』と、タランチェフは憎々しさに答へた。『あの獨逸人の野郎、非常な悪漢だからね!委任状を無効にした上に、自分であの土地を借り入れて了つたと云ふぢやないか?露西亞で斯んな事を聞いた事がない。彼奴は羊まで奪ひ取つて了ふつもりなんだな。』

『若しあの奴がねえ、君、事情を嗅ぎつけると、飛んだ事になるかも知れない。彼奴が、年貢を集めて其れを俺達の手に入れたことを知ると、事が面倒になるね……』

『最う爲て了つた事ぢやないか!君は臆病になつたね!ザチョールツイだつて始めて地主の金に手を附けたのぢやあるまいし、臀を隠す位のお手のものだよ。先生、百姓共に受領證を渡してゐるだらうか?どしどし取り立てゝゐるかも知れない。獨逸人が眞赤になつて、怒鳴ることだらうよ。でないと面白くないからねえ!』

『あゝ!』と、ムホヤールフは急に元氣附いて言つた。『さア、うんと飲まう。』

彼は自分とタランチェフとにラム酒を注いだ。

『今に、此の世の中に生活することが出来なくなるかも知れない。が、飲んでゐる間は生活だ!』と、彼は自分を慰めるやうに言つた。

『でも、君、さうなつた日にや爲ようがない』と、タランチェフは續けた。『君、何か勝手に勘定書を作り給へ。薪代とか、キャベツとか、まア何でもいゝ、勘定書を作るんだ。今、幸ひオプロモフは教母に經濟を任せてゐるから、之丈けの出費だと見せればいゝ。そしてザチョールツイが歸つて來たら、彼は年貢の金を持つて來たが、丁度出費が其れだけかゝつてゐるから此方で受け取つて置いたと言ふさ。』  
『でも奴さん、勘定書を要來して、後で獨逸人に見せるだらうし、獨逸人が勘定したら、さア、さうなると……』

『ナニニ!オプロモフは勘定書を何處かへ押し込んで了つて、後で捜さうともしまい。獨逸人が來る頃までには立派に忘れて了ふに違ひない……』

『さうかなア? ぢや君、飲まう。』と、イワン・マトウエイチは盃に酒を注ぎながら言つた。『お茶くらゐに金を使ふのは惜しい事だ。君、匂ひを嗅いで見給へ。七十五哥だよ。肉菜羹を注文しないかね?』

『注文しよう。』

『オイ!』

『ねえ君、何と言ふ惡漢だら!』(僕が借り受けて了ふよ。)だつて言ひやがる。』と、タランチェフは再た憎々しさに言ひ始めた。『我々露西亞人にはあんな考へは浮びやしない! 此の事務室も獨逸臭い。』



彼處には農家も借地の出来る處もあるんだ。奴、まだ何んな企謀をするか知れない。」

「何んな企謀なんだ。僕はまだよく調べて見ないがね。」と、イワン・マトウェーイチは訊いた。

「獨逸人の考案さ！」と、タランチエフは憎々しきうに言った。「例へば、或る山師者が焼けない家を立てようと思ひ、街を作らうとする。が、金が無い、で、奴さん、一枚五百留宛の證券を發賣するとすると、愚か者の群は其れを買つて、お互に賣買する。だから計畫が巧く行くと、證券が騰貴するし、巧く行かないと、暴落する。斯う云ふことはよく聞くことだ。君には證券はあるが、現金がない。街は何處にある？と聞いて見給へ、焼けて了つたので街を作ることは出来なかつた。そして株主が君の金を持つて逃げて了つたと世間の人は言ふ。之れが債券さ！獨逸人は最うオプローモフを購して了つた！今迄購さなかつたのは、僕が始終邪魔をしてオプローモフを助けてゐたからだよ！」

「之れで其の議論も終りかね。事は決着して記録に書き込まれ、僕達はオプローモフカから年貢を受けることになつたんだね。」と、ムホヤーロフは少し酔拂つて言った。

「君は何を言つてゐるんだ！君は何うして金を鋤で掘らないんだ！」と、タランチエフも矢張り幾分蕩然として反對した。「確實な泉があるんだもの、たゞ汲みさへすればいゝんだ。疲れちやいけないよ。飲まう！」

「何んな泉だね？二十五哥や三留づゝ一生集めたつて……」

「最う二十年経つたんだよ！」と、イワン・マトウェーイチは舌絡しながら言つた。「君は、僕が十年も祕

書官をしてゐたことを忘れたのだね。だが、以前など、十錢銀貨や二十錢銀貨が衣匣にガチャ／＼してゐただけよ。恥を言ふやうなものだが、何うかすると、公金でも胡麻化したらと云ふやうな氣になつたこともあつた。何と云ふ生活だらう！ねえ、君！世間には幸福な人間もあるものだ。たゞ一言他人の耳に届いたり、たつた一行の文字を書き取つたり、たゞ自分の名前を書き附けたりするだけで——衣匣の中には俄かに、枕にして寝ることが出来る程の癪が出来て了ふのだ。素晴らしい金儲けぢやないか。」と彼は益々酔拂ひながら空想した。「懇願者はお顔も拜めない。傍を通ることも出来ない。先生は馬車に乗つて、(俱樂部へ行け！)と叫ぶ。俱樂部に着くと、勳章を附けた連中が握手に来る。骨牌をしても五錢白銅を賭けやしない。晝餐だつて——あゝ！肉菜羹など口に出すも恥かしいと思つてゐる。顔を擧めて唾を吐く。冬になると、雛鶏の晝餐だ。四月には苺だ！家には奥様が絹レースを着ていらつしやる。子供達には家庭教師が附いてゐる。子供でもちやんと頭髮を梳して贅澤な衣服を着てゐる。何うだ、君！極樂ぢやないか。其處には罪なんかありやしないよ。さア、飲まう！今、肉菜羹も持つて来るだらう！」

「そんな不平を言ひ給ふな。罪だよ。立派な資本があるぢやないか……」と、散々に酔つ拂つたタランチエフは充血した眼を見張りながら言つた。「三萬五千留の財産だ——冗談ぢやないよ！」

「オイ、君、も少し靜かに言ひ給へ！」と、イワン・マトウェーイチは遮つた。「皆なで三萬五千留か！何時五萬留になるのだ！たとへ五萬留になつても天國に行けやしない。結婚すると、悸々した生活をし、



なけりやならない。一留の金でも算へなけりやならない。料理屋のことなど、考へることも出来ない——  
何と云ふ惨な生活だ！」

『其の代り、君、安心し給へ。あれが一留、あれが二留——見給へ、一日に七留は隠して置けるんだ。関係もなければ、言ひ掛りもなく、汚點もなければ、煙もない。が、大事業の下には今後署名してはいけないよ。後で一生を削つて了ふからね。いや、君、心配するな！』

イワン・マトウェーイチは聞いてゐなかつた。そして疾くから別なことを考へてゐた。

『ねえ君、』と、彼は眼を瞬き、何かに喜びながら俄かに言ひ始めた。最う酩酊が醒めて了つたやうであつた。『いや、危ない、言ふまい。頭から斯んな小鳥を放すのは良くない。あゝ、實は飛んで行つて了つた……飲まう、君、速く飲まう！』

『言はなけりや、飲まない』と、タランチェフは盃を引き込ませながら言つた。

『でも、君、重大事件だよ。』と、ムホヤーロフは扉口の方を見ながら言つた。

『何だ？……』と、タランチェフはもどかしさうに訊いた。

『いや、之れは冗談だがね。でも君、大事業に署名したつて何にも差支へはないよ、本當だ！』

『君は何を言つてるんだ？』

『飛んだ賄賂があるんだ、飛んだ賄賂がさ。』

『何だ？』と、タランチェフは急いで訊いた。

『まア、待ち給へ、一寸考へるから。さうだ。何にも隠すこたアない。其處には法則がある。ちや、君、言はう。君にも知つて貰ふ必要があることだ。君がゐなくちや巧く行かないだらう。が、言ふまい。他人が知るべきことぢやないから。』

『僕は君に取つて他人かね？一度ならず君に盡したことがある筈だ。證人にもなつたことがある。そして、槍が……憶えてゐるかね？君は恩知らずだよ！』

『君、君！さうがみく言つたものぢやない。何うしたんだ。宛然大砲のやうに爆發してゐるぢやないか！』

『いや、悪るかつた。僕は夢中になつて言つたんだ。』と、タランチェフは悲しさうに言つた。『何うして君は僕を苦しめるんだ？さア言ひ給へ。』

『ちや、言ふがね。イリヤ・イリイチは輕卒な男で、物の順序など少しも御存知ないのだ。契約書に頭を悩まして委任状を送つた時など、何を爲ようとしてゐるのか自分ながら知らないのだ。何のくらの年貢を受け取るかと云ふことさへ分らないんだ。そして自分では『何にも分らないから』と云つて御座る。』

『之れで？』と、タランチェフはもどかしさうに訊いた。

『そのくせ奴さん、僕の妹の許には頻りに通つて行く。此間なんか一時までも妹の許にゐて、客間で僕と出會しても知らぬ顔をしてゐたつけ。だが、之が爲めに何んな事になるか知れやしない……だから、君、傍から忠告して呉れ給へ、家で無作法をやつちや困る。妹は寡婦だからつてね。それから一つ、』



妹は最ら嫁に行かないのだと云ふことや、或る富豪が頻りに欲しがつて、毎晩妹の許へ来るが、妹は奴を厭がつてゐるくらゐだと云ふことなどを言つて呉れ給へ。」

「さうか、奴さん、吃驚して、床に就いて了ひ、殺人者のやうに煩悶したり、歎息したりするね。けれども、そいつは。」と、タランチェフは言つた。「甘い話だ！で、賄賂と云ふのは何だね？」

「何だ、君には分らないのか！其時、君は来て呉れと言ふんだ。奴を見てゐた者があつた、竟り證人があると言ふのだ……」

「それで？」

「それで、先生、酷く吃驚したら、調停の方法がある、それには少しの資本を犠牲にしなけりやならぬと言ふのさ。」

「奴さん、金を有つてゐるかね？」と、タランチェフは訊いた。「ひよつとしたら、吃驚して一萬留くらゐ約束するかも知れないね……」

「其の時、君は僕に一寸胸をして呉れるのだ。さうすれば僕はちゃんと偽手紙を作つて置く……妹の名宛にしてね、《私、オプローモフ儀、寡婦某より一萬留確かに借用致し候。返済期限は何々》と書いて置くのさ。」

「君、何を言つてゐるんだ。僕には分らない。金は君の妹と、彼女の子供達の所有になつて了ふぢやないか。何が賄賂だ？」

「だが、妹はそんな金額の偽手紙だから僕に呉れる。で、妹には署名料を遣りさへすりやいふんだ。」

「でも、若し君の妹が署名しなかつたら何うする？強情を張つたらさ？」

「妹が？」

イワン・マトウエイチは細い笑ひ聲を漏した。

「するとも。彼女は自分の死刑宣告書に署名しても、それが何だと訊きもせず、たゞ笑つてゐるだけだ。(アガフィヤ・ブシエニーツイナ)と一行書いて頸を傾けてゐても、何に署名したか決して知りやしない。僕等は二人で其の傍にゐるのだ。妹は學士會秘書官オプローモフに對して債權を有つことが出来るが、僕は議員秘書官夫人ブシエニーツイナに債權を有つことが出来る。獨逸人の奴、眞赤になつて怒るだらう——が、此方は當然の權利を得たのだから仕方があるまい！」と、彼は慄へる手を上に揚げながら言つた。「さア、君、飲まう！」

「當然の權利か！」と、タランチェフは歡ばしさに言つた。「飲まう。」

「巧く行つたら、二年も経つと、再た繰り返へせるぞ。當然の權利だ！」

「當然の權利だとも！」と、タランチェフは首肯いて同意を表した。「繰返へすさ！」

「繰り返へさう！」

二人は飲んだ。

「だが、オプローモフが強情を張りはしないだらうか？前に獨逸人に手紙を出しはしないだらうか？」



と、ムホヤーロフは危なさうに言つた。『さうなると、君、まづい事になるぞ！何にも出来るものか。彼女が寡婦で、娘ぢやないのだから！』

『手紙を出すよ！無論手紙を出すよ！けれども二年くらゐ経つてから出すだらう。』と、タランチェフは言つた。『が、その時は良い加減に——嘘を吐けばいい……』

『いや、いや、いけない。皆な破壊されて了ふ！君、無理に署名させられたことも言ふだらう。さうなると刑事問題だ。いけない。うまく行かないよ！それよりか之の方がいい。先づ奴と一緒に飲むんだ。先生、スグリ製の火酒が好きだからね。頭がぐらく／＼して来た時、君が僕に胸せするのだ。僕は證書を持つて入つて行く。先生、金額も見ずに署名する。それで契約書が一枚出来ると云ふものだ。後で公證人のところに證明に行つても、種々な事た聞かれて見給へ、あゝした且那は、あんな醜體で署名したことを恥かしく思ふよ！當然の権利だ！』

『當然の権利だ！』と、タランチェフは繰り返した。

『其の時、オプローモフカは相續者達の所有になる。』

『無論だ！飲まう、君。』

『愚者の健康の爲めに！』と、イワン・マトウエイイチは言つた。

二人は飲んだ。

四

話は少し前に戻つて、シトリーツがオプローモフの聖名祭に来る前、ウイボルグスカヤ・ストロナカら遙か遠い外國に居つた時の事を言はなければならぬ。シトリーツは外國で、讀者諸君が既に知つてゐる彼の人達に會つたのだ。シトリーツは彼等のことを詳しくオプローモフに話さないから、諸君は或る特殊な想像によつて知つてゐるだらう。オプローモフも彼等のことを詳しく訊かずに、特殊な想像で覺つたらしい。

或る日、シトリーツは巴里の小公園を歩いてゐた。彼は茫然として往復の人を見たり、店頭の看板を見たりしてゐた。が、眼は何物にも止らなかつた。彼は最う、長い間、露西亞から、竟り、キエフからも、オデッサからも、ベテルブルグからも手紙を受け取らなかつたので、淋しさのあまり、三本の手紙を郵便函へ入れて家に歸りかけた。

と、彼の眼は俄かに何物かに留つた。そして一時驚きの色を帯びたが、再た平常の表情に歸つた。二人の夫人が小公園から出て、商店に入つたのであつた。

『いや、そんな筈はない。』と、彼は考へた。『妙なことを考へたのだ！俺は知つてる筈だ！彼の人達ぢやない。』

けれども彼はその商店の窓に近づき、硝子を透して二人の婦人を見た。『少しも見廻さずに、何時まで



も向うを向いて立つてゐる。』

シトリーツは商店に入つて何か買ひ始めた。と、やうやく一人の婦人は明の方へ顔を向けた。シトリーツはその婦人がイリンスキイ家のオリガであることを知つた——いや、知らなかつた。で、彼は彼女に抱き着かうとしたが、思ひ止つて、凝つと彼女を見た。

あゝ何と云ふ變りやうだらう！ オリガのやうだが、オリガではない。顔形はオリガによく似てゐるがあまり眞蒼だ。眼は少し落ち込んでゐる。唇にも子供らしい微笑がない。無邪氣と鷹揚氣とがない。眉の上には意味あり氣な、そして悲しさうな考へが表はれてゐる。眼にも、以前には知りもしなければ言ひもしなかつたやうなことが澤山に表はれてゐる。彼女は以前の通り、眼をパツチリと開けて、輝かしく落着いて見てゐるが、顔全體には雲か、悲哀か、霧のやうなものが漂つてゐる。

シトリーツは彼女に近寄つた。彼女の眉は幾らか動いた。そして彼女は暫く不思議さうにシトリーツを見てゐたが、やがて氣が附いたと見え、彼女の眉はビク／＼と動いて平行して了つた。眼は靜かて、鋭くつて、そして深い喜の光に輝やいた。誰でも自分の最愛の妹がこれ程喜んで呉れたら幸福を感じるに相違ない。

『あら！あなた、シトリーツさんなの？』と、オリガは精神の底まで徹るやうな、そして嬉しさうな優しい聲で言つた。

叔母は急に振り返つた。三人は一度に話し出した。シトリーツは彼女等が手紙をよこさなかつたこと

を責めた。彼女等は辯解した。二人の女は三日も乗り廻つたけれども、彼を捜し出すことが出来なかつたのだ。或る宿ではシトリーツがリオンに行つたと聞いたので、二人は何うしたらいゝだらうと當惑してゐたのであつた。

『でも、何うしてあなた方は此處へいらつしやつたのです？私に一言も知らせずに！』と、シトリーツは責めた。

『餘り急に思ひ立つたものですから、あなたにお知らせする暇がなかつたのです。』と、叔母は言つた。『オリガはあなたを吃驚させるのだと申しましてね。』

シトリーツはオリガを見た。彼女の顔は叔母の言葉を承認しないらしかつた。シトリーツは猶ほ更ら彼女に眼を止めた。が、彼の觀察は彼女を觀抜くことが出来なかつた。

『オリガさんは何うしたのだらう？』と、シトリーツは考へた。『以前、俺は直ぐに此の女の心を洞察することが出来たのだが、今は……何と云ふ變り様だらう！』

『オリガ・セルゲーウナさん、あなたは大層大人になりましたね、成熟なさいましたね。』と、シトリーツは言つた。『私にはあなたが分らなくなりましたよ！何も彼も何かの下に蔽はれてゐるやうです。あなたは何をなすつたのです。何うなすつたのです？ 聞かして下さい！』

『でも……別段何にも、』と、オリガは品物を見ながら言つた。

『何うです、歌をお唄ひになりますか？』と、シトリーツは自分にとつて新しいオリガの研究を続け、



彼女の顔に現はれる見覚えのない表情を讀まうとしながら言つた。が、其の表情は電光のやうにチラリとすると直ぐ消えて了ふのであつた。

『暫らく唄ひませんわ。二ヶ月も。』と、オリガは無雜作に言つた。

『オプローモフ君は何うしてゐます？』と、彼は突然に問ひかけた。『健康ですか？手紙を讀みはしなかつたですか？』

此の時、若し叔母の助けがなければ、オリガは自分の秘密を打ち開けて了つたかも知れない。

『斯うなのよ。』と、叔母は商店から出た時に言つた。『オプローモフさんは毎日私共にいらしたのよ。ですがね、急に入らつしやらなくなつたのでせう。そのうちに私共は外國へ来る仕度をし始めたものですよ。オプローモフさんの許へ使者を遣りますと、——御病氣で使者にも會へないんですつて。それつきり會ひませんわ。』

『あなたも御存じないのですね？』と、シトリーツは心配らしくオリガに訊いた。

オリガは駈けて行く四輪車を眼鏡で凝つと見てゐた。

『オプローモフさんは本當に病氣をしていらつしやるのよ。』と、オリガは故意とらしく駈けて行く馬車に注意を向けながら言つた。『叔母さん、御覽なさいよ。あれは私共と一緒に來た方ぢやなくつて。』

『いや、イリヤ君の消息を聞かせて下さい。』と、シトリーツは執拗く言つた。『あなた方と、彼との關係が何うなつたのですか？何うして一緒に連れていらつしやらなかつたのです？』

『Mais ma tante vient de dire (でも私の叔母様がさう仰言つたのですわ。』と、オリガは言つた。

『あの方は酷く元氣がなくなつてね。』と、叔母は言つた。『それに開けない方でねえ。私共に三四人のお客様が集まると、直ぐに歸つてお了ひなさるんですもの。斯んな事もあつたんですよ。オペラの觀覽券を買つてね、番附の半ばまでも聞いていらつしやらないのです。』

『合奏もお聞きにならないのよ。』と、オリガは附け加へた。

シトリーツは頸を振つて、溜息を吐いた。

『何うしてあなた方は、此處へ來ることにお決めたのです？ずつと以前ですか？あなた方は何か突然にお考へなかつたのですか？』と、シトリーツは訊いた。

『姪の爲めに、お醫者の勧めで來ることにしたのです。』と、叔母はオリガを指差しながら言つた。『ペテルブルグにゐますと、姪の身體に悪いことがよく分りますので、冬を日掛けて逃げて來たのです。でもまだ何處に姪をつれて行くか決つてゐません。ニツツアがいゝか、スウキツルがいゝかと思ひ迷つてゐるのです。』

『でも、あなた方はひどくお變りになりましたね。』と、シトリーツは沈んで言つた。彼はオリガを見て彼女の血管の一つくを研究しようとするやうに彼女に眼を向けてゐた。

半年ばかりイリインスキ家の二人は巴里で暮してゐた。シトリーツは彼女達の所へ毎日出かけて行つて、話し相手になつたり、道案内をしたりする唯一の人であつた。



オリガは著しく元氣附いて来た。彼女は憂鬱から平靜と冷淡とに變つた、少なくとも外面だけでは。彼女の内心に何んた事が行はれたかは分らなかつたが、彼女は段々とシトリーツに取つて以前の友になつて来た。でも、以前のやうに最う子供らしい銀のやうな大聲で笑はず、シトリーツに笑はされた時は笑を壓へて、たゞ莞爾とするだけであつた。何うかすると、オリガは笑はずにゐられないのを苦痛に思ふことがあつた。

シトリーツは、オリガを笑はせることが出来ないのを直ぐに見て取つた。オリガは多くの場合眼と平均してゐない二つの眉と、額の皺とで、滑稽を聞いてゐた。が、莞爾ともせず黙つてシトリーツを見續けてゐた。それが丁度輕卒を詰責やうでもあれば、もどかしがつてゐるやうでもあつた。そして冗談には答へないで、突然に意味の深い問を出したり、シトリーツが自分の無作法で、空虚な話を恥かし

く思ふ程執拗く彼を見詰めた。した。

何うかするとオリガは毎日人々が取り交す空虚な活動談や話の爲めに内心の疲勞を現はすことがあつた。さうした時には、シトリーツは女と話してゐる場合に滅多に入つたことのない他の雰圍氣に突然移らなければならなかつた。さうした時には、シトリーツの思想と、練れた智慧とは、たゞ、オリガの深い不審さうな眼附を晴やかにし、平和にし、其の眼附が其れ以上シトリーツの身邊に何物も渴望せず、要求しないやうになる事にばかり費された。

シトリーツの不眞面目な説明の爲めにオリガの眼附が怖ろしく冷酷になり、眉が皺になり、顔中に、黙

つてはゐるが、深い不満の蔭が漂ふやうな時に、シトリーツは非常に驚いた。さうした時に、シトリーツは二晝夜も三晝夜も智慧や策略を搾り、女と交際する祕術を悉く應用しなければならなかつた。さうして辛つとのことで次第にオリガの心から其の顔に夕映のやうな晴々しさを引き出し、眼附や微笑にも溫柔しい平和を呼び起さなければならなかつた。

シトリーツは夕方、此の戦に散々苦しめられて家へ歸ることがあつた。そして其の時、自分が勝利者となつて居れば幸福を感じるのであつた。

「非常にオリガさんは老熟した。あゝ、あの娘は馬鹿に發達したものだ！ 誰が彼女の教師であつたらう？ オリガさんは何處で生活の實學課を修めたのだらう？ 男爵から習つたのかしら？ あんな薄つべらな、あんな飾つた言葉の中に何が汲み取れるものか！」と言つて、無論イリヤから習つたのではない！……」

シトリーツはオリガを理解することが出来なかつた。で、彼は再た翌る日オリガの許へ駈けて行つた。其の時は最う彼は十分注意して、怗々と彼女の顔を讀んだ。そして度々非常な困難を感じながらも、自分の智慧と、實生活の知識とで、オリガの顔に燃えてゐる疑念や、疑惑や、要求などを満足させることが出来た。

シトリーツは手に經驗の燈火を持つてオリガの智慧と、性格との迷宮に索り入り、毎日種々な新らしい點や事實などを發見したり、研究したりしたが、それでもまだ其の奥へは届かなかつた。で、シトリーツは驚きの眼を見張りながら、何んなにオリガの智慧が其の日／＼の糧を要求してゐるか、何んなに



彼女の精神が小止みなく、實驗と生活とを求めてゐるかに注意を向けてゐた。

ストーリーリツの有ゆる活動と、有ゆる生活には、毎日更に他の活動と生活とが加はつた。ストーリーリツはオリガに花を持つて行つたり、書物や、樂譜や、繪畫帖を持つて行つたりして、長い間にオリガの退屈を癒すことが出来ると思ひ、頻りに彼女を慰さめた。それから彼は仕事に行つたり、或は何處かの礦坑や、誰かの模範的な領地を視察に行つたり、大勢の人の中に行つて新しい人物や、有名な人物と交際をしたりして類然と疲れてオリガの許へ歸り、オリガのピアノの傍に腰掛けて、オリガの歌に疲勞を休めた。と、オリガの顔には最う疑問が起つた。彼女の眼には頑固な説明の要求が現はれた。彼は何時の間にか知らず識らず段々とオリガの前に自分が見たことを話した。

何うかすると、オリガはストーリーリツが見たり、聞いたりした事を自分で見たり、聞いたりしたいと云ふ希望を現はすことがあつたので、ストーリーリツは自分の仕事を繰り返へした。彼はオリガを伴れて建物や、地所や、機械などを見に行つたり、古い出來事に就いて壁や、石碑に刻んであるのを讀みに行つたりした。斯うしてゐるうちに氣が附かないうちに段々とストーリーリツはオリガのゐる傍で自分の考へたことや、感じたことを口に出し慣れた。或る時など自分に對する固い信念から自分は最う一人ではなく、二人で生活し始めたことや、斯んな生活はオリガが來てから始まつたことなどを意識した程であつた。ストーリーリツは殆んど無意識に、自分自身に言ふやうにオリガの前で、自分が得た寶の批評をして、自分とオリガとを驚ろかした。それから、彼はオリガの眼に問題が残つてゐないかとか、彼女の顔に満足

した思想が曙光のやうに漂つてゐるだらうかとか、オリガの眼が勝利者としての自分を見送つてゐるだらうかなど、心配さうにオリガを見た。

若し之が確かめられると、ストーリーリツは傲然と昂奮に慄へながら家へ歸り、夜も長い間、竊に明日の準備をした。最も退屈な、是非しなければならぬ仕事も彼には無味乾燥なものと思はれなくなつたばかりか、寧ろ必然的な仕事になつた。其の仕事は益々深く根を張つて彼の生活を織り出した。思想も、觀察も、現象も、沈黙勝な、粗末な古い記念物の記録の中に疊み込まれずに、毎日の生活に鮮やかな色彩を附けた。

ストーリーリツが不審の色と、渴望的な視線とを待たずに、火のやうに燃えてゐる精力に充ちた新しい蓄積と、新しい材料とをオリガの前に投げ出すと、オリガの蒼白めた顔は、空映のやうに燃えた。

ストーリーリツ自身も、オリガの智慧が注意深く、愛らしい従順を現はして、彼の眼の中と、彼の一語の中とに何物かを捉へようとした時、そして二人が鋭く見合つた時、竟り、ストーリーリツがオリガの眼にまだ疑問が残つてゐないかと思つて彼女を見たり、彼女がストーリーリツからまだ悉皆聞いて了はないのではないかとか、彼がまだ忘れてゐるのではないかとか、或は更に、彼が何か茫然としたことで、自分に理解出來ない境地を見せ、自分の思想を極度まで發表することを遠慮してゐるのではあるまいかなどと思つてストーリーリツを見た時、非常に充實した幸福を感じた。

問題が大きくなり、複雑になり、オリガが益々ストーリーリツの解釋に注意深くなるに従つて、オリガの



意味あり氣な眼附は、益々長く、益々執拗くシトーリツに留まり、なほ其の眼附は益々暖く、益々深く益々誠實になつた。

「オリガさんは子供だつたが」と、シトーリツは吃驚して考へた。「最う俺より老熟て了つた！」

シトーリツはそれ迄、オリガのことを考へる程、物事を考へたことはなかつた。春になると、彼等は皆なスウキツルへ行つた。シトーリツはまだ巴里にゐる時分から、今後はオリガと一緒にゐなければ生きて行けないと決めてゐた。此の問題を決めると同時に、彼は、オリガと一緒にゐずに生きることが出来るか何うかと云ふ問題をも決めようとした。が、此の問題は彼に取つて容易に決ることが出来なかつた。

シトーリツは周囲を見廻しながら用心して此の問題に近づいた。彼は時によると手索るやうに、又或時は大膽に進んだ。其の結果、彼は最う目的の直ぐ傍へ行き、或る的確な徴候や、眼附や、言葉や、退屈や、歡喜などを捉へるだらうと思つた。彼はなほオリガの細い眉と、其の眉の微動と、彼女の溜息とを見ようとした。明日は、彼が愛されてゐると云ふ祕密が分るだらう！

シトーリツはオリガの顔に、自分に對する子供のやうな信頼を讀んだ。オリガは何うかすると、シトーリツに對して或る特別な見方をする事があつた。彼女はシトーリツ以外、誰にもそんな眼附を向けたことがなかつた。が、若し彼女の母親が生きてゐたら、母親に丈はさう云ふ見方をしたかも知れない。オリガはシトーリツの訪問や、暇潰しや、毎日の機嫌伺ひなどを卑下だとも、媚びる愛だとも、内心

の衝動だとも思はず、たゞ單に義務だと思つてゐた。オリガに取つて、シトーリツは兄であり、父であり、夫であつた。之れで彼女は満足であつた。だから、彼女はシトーリツと話をしても、一緒に歩いて自由と誠實との態度を保つことが出来た。シトーリツはオリガに對して絶對の權威を有つてゐる者のやうであつた。

シトーリツは自分が此の權威を有つてゐることを知つてゐた。オリガは何時も彼一人に信頼してゐるので、一生涯、彼の言葉に盲目的に従ふことさへ出来たが、世界中に他に自分の信頼すべき人は無いと言つて、シトーリツの權威を承認してゐた。

シトーリツは、無論、此の權威を誇としてゐた。が、一人の伶俐な、經驗のある年寄の叔父や、若しも少し晴やかな頭と性格とを有つて居れば、あの男爵でも此の權威を誇ることが出来るかも知れない。が、これは愛の權威であつたらうか？——此處に問題がある。此の權威はオリガの魅惑的の虚偽と、女が間違ひ易く、そして其の間違を幸福とする盲目的な媚とを持つてゐることを許すものではないであらうか？……

いや、彼女のシトーリツに對する服従は、意識的のものであつた。尤も、オリガの眼は、シトーリツの説を聞いたたり、彼の内心を披瀝されたりすると燃えた。オリガは彼に視線を注いだが、之が何の爲めであるかは、何時も分つてゐた。何うかすると、彼女自身で其の原因を言ふことがあつた。が、愛から現はれる行爲は、多く盲目的で、非打算的のものだ。そして此の盲目と非打算とに幸福がある。オリガ



は慚愧を感じる時にも、何故恥かしいかと云ふことを直ぐに知つた。

シトリーツは、オリガの突然に變る顔色も、吃驚する程の喜びも、疲れた眼も、火の慄へてゐる眼附も決して見落さなかつた。若し又、これに似た場合には、オリガの顔が苦痛に歪むのを見て取つた。彼が近いうちにイタリヤへ行くと言つた時など、彼の心臓はそれ等の貴重な珍らしい瞬間の爲めに充血して其の鼓動が止んだ程であつた。彼は再た急いで紗でも被りたかつた。彼女は無邪氣に有りのまゝを附け加へた。

『私、あなたと御一緒にイタリヤへ行けないのが情ないわ。行きたくて堪らないんだけど！その代り私が自分で行つて見たくらゐに詳しくお話しして下さいませわね。』

と、魅惑は此の露骨な、誰の前にも隠し立てのない希望と、彼の話上手に對する此の粗雑な形式的な讚辭とで破壊された。彼はたゞ種々な、些細な點を集めて、たゞ細いレースを編みさへすればいゝのだ。彼は一つの編目でも造れば、それでいゝのだ——これは最う直ぐに出来る……

と、オリガは、俄に、再た落着いて、平靜になり、單純になつた。何うかすると冷淡にさへなることがあつた。彼女は腰掛けて仕事を爲る。黙つてシトリーツの言ふことを聞いてゐる。時々頭を擽げて彼に不思議さうな、そして不審さうな、直ぐに問題の眞髓に徹るやうな眼附を投げる。之が爲めにシトリーツは度々悲しさに書物を投げ出したり、何かの説明を中止したりして、飛び起きて出て行くことがある。シトリーツが後を振り向くと、オリガは吃驚したやうな眼附で彼を見送つてゐる。シトリーツは

恥かしくなつて後戻りする。そして頻りに辯解を考へる。

オリガは單純に聞いて單純に信ずる。疑惑とか狡猾な微笑など彼女にはない。

『オリガさんは愛してゐるのだらうか、それとも愛してゐないのだらうか？』と云ふ二つの疑問がシトリーツの頭の中で纏れ合つたこともある。

若し愛してゐるのなら、何うして彼女はあんなに用心深く、あんなに隠蔽的なんだらう？ が、若し愛してゐないのなら、何うしてあんなな表情をし、あんなに從順なのだらう？ シトリーツは一週間ばかり巴里から倫敦へ旅行することにして、以前には言はずに置いて、愈々發つと云ふ日に倫敦行のことをオリガに話しに行つた。

其の時、若しオリガが吃驚して急に顔色でも變へれば——無論秘密も分るし、彼は幸福を感じるのであつた！ が、オリガは、たゞ彼の手を固く握つて接吻したゞけであつた。シトリーツは落膽した。

『私、退屈で堪らなくなりますわ。』と、オリガは言つた。『なんだか泣き度いやうですわ。私、近頃はまるで孤兒のやうなものですもの。叔母さん！ アンドレイ・イワヌイチさんは旅行をなさるんですつて！』とオリガは泣くやうな聲で言つた。

オリガの言葉は彼の胸を切るやうであつた。

『また叔母さんの方へ向いた！』と、シトリーツは考へた。『これが不満だ！オリガさんが悲しんでゐることも、愛してゐることも俺には分つてゐる……が、此の愛は取引所の品物のやうに、時間と、注意と、』



機嫌取りとて買ふことが出来るのだ……もう俺は歸つて來まい。」と、シトリーツは悲しさうに考へた。  
「オリガさん、お嬢さん、お健康に！」此の女は以前から細い糸を手繰つて歩いてゐるのだ。何うしたのだらう？」

シトリーツは深い物思ひに沈んだ。

オリガは何つしたのだらう？シトリーツは事件を知らないのだ。オリガが一時戀をして、出来るだけの事情を経験し、自分を自由に支配することの出来ない時代と、突然に顔色が變つたり、竊かに心臓が痛んだりする時代、即ち、愛の熱病的特徴と、初戀の熱情とから成る處女時代を経験したことを知らないのだ。

シトリーツが若し其れを知つたら、たとへオリガが自分を愛してゐるか何うかと云ふ祕密を知らないまでも、少なくともオリガが何を感じてゐるか云ふことを巧みに洞察するやうになるだらう。

スウキツルに滞在中、彼等は旅行者が行つて見る處なら何處へでも行つて見た。が、一番よけいに行つて、一番好きになつた處は、餘り人の行かない静かな處であつた。彼等は、少なくとも、シトリーツは「自分の仕事」に忙がしかつた。で、彼等は第二の計畫にしてゐた旅行を終つた時など、非常な疲勞を感じた。

シトリーツはオリガに隨つて山に登つたり、絶壁を見たり、瀧を見たりした。それも最初からオリガの企てであつた。シトリーツはオリガの後に隨つて、或る狭い小徑を行つた。其の間、叔母は下の四輪車

に腰掛けてゐた。シトリーツは山に登る途中、オリガが立ち停つて呼吸を次いでゐる時など、竊つと鋭い眼でオリガを見た。と、彼より先に屹度オリガの眼が彼の上に留まつてゐた。で、シトリーツは最

うそれを確信するやうになつた。  
シトリーツは嬉しかつた。心に暖か味と光輝とを感じた。が、突然にオリガは自分の眼を或る一點に向けたまゝ、吸ひ付けられたやうに我を忘れて見惚れた。其の時は最うオリガの前にシトリーツはゐない者のやうであつた。

シトリーツが少しでも身動し、何か言つて自分のゐることを憶ひ出させるやうにすると、オリガは吃驚して、何うかすると、聲を發てることがあつた。之れで見てもオリガはシトリーツのゐることを忘れて、彼が何處か遠く、世界の何處かにゐるくらゐに思つてゐたことが分る。

其の代り、後で家へ歸ると、窓の傍の露臺の上で、オリガはシトリーツ一人に話をした。長い間話をした。長い間自分の心の印象を曝け出して悉皆言つて了はないうちは止めなかつた。それも熱心に、引き付けられるやうに時々言葉を切つたり、附け足したり、シトリーツの言ひ足すことを直ぐに取つたりした。やがて彼女の眼には、シトリーツの助力に對する感謝の光が閃いた。何うかすると、オリガは疲勞の爲めに蒼白で、大きな安樂椅子に腰掛けることがあつた。その時は其の貪るやうな疲勞を知らない眼だけが、シトリーツの話を聞きたいと云ふ意味を現はしてゐた。

オリガは凝つとして聞いてゐたが、一言一句でも聞き漏しはしなかつた。シトリーツが黙つても、オ



リガはまだ聞いてゐた。彼女の眼はまだ何事かを訊いてゐた。シトリーツは此の無言の要求に對して、更に新らしい力と新らしい衝動とを感じながら話を續けた。

それも結構なことだ。彼の心臓は熱して、晴々しくなつて、激しく鼓動した。オリガは其處に生活してゐた。これは彼女に取つてシトリーツ以外に何にも要らないことを意味するもので、此處に彼女の光明があり、火焰があり、智慧があるのだ。が、オリガは類然して急に立ち上り、例の不審らしい眼附でシトリーツに歸つて貰ひたいと願ふことがあつた。又、彼女は何かを食べたがることもあつた。食べるときなど、非常な食慾を感じながら食べた……。

之も矢張り美しい事だ。シトリーツは空想家ではない。彼は突發的の情熱を嫌つてゐた。オプローモフも矢張り其れを嫌つてゐたが、それはシトリーツが嫌ふ原因とは違つてゐた。シトリーツは、感情が平坦な軌道の流れて行くことを望んでゐた。が、其の感情も最初、泉の傍でぐたくと沸騰してゐなければならなかつた。そして其の泉を汲むことも出来なければならなかつた。次には此の幸福の泉、何處から波打つて來るのであるかと云ふことを、つまり全生活を知らなければならなかつた。『オリガさんは俺を愛してゐるのだらうか、何うだらう？』と、シトリーツは苦しい波立を感じ、血の汗が出るやうな思ひをしたが殆んど泣き出しさうに言つた。

此の問題は、彼の中に益々火の手を揚げて、焔のやうに彼を取り圍み、彼の計畫を束縛した。之は最う愛に關する唯一の重大問題ではなくして、彼の生命に關する問題であつた。で、シトリーツの精神は全

然此の問題の占領するところとなつて、他の問題は何にも無かつた。

此の半年の間に、愛の苦痛と拷問とが彼に集まつて、彼を苦しめたことが一度あつたやうに思はれる。彼は此の愛の苦痛と拷問とを女と會ふ度に巧みに警戒してゐたのであつた。

彼は智慧と、意志と、神經との斯んな緊張が、まだ幾ヶ月も續いた日には、自分の健康な身體が一堪りもなく破壊されて了ふやうに感じた。彼は——今迄知らなかつた事を——眼に見えない靈肉の戦の中に、精力が消耗されて行くことや、心には血の出ない不治の傷があつて、其れが呻吟を生んでゐることや、生命の減退と云ふやうなことを悟つた。

シトリーツは自分の精力に對する尊大な信念を幾分失なつた。で、彼は最うオリガと話をしても馬鹿氣た考へを起さなかつた。他の者なら判斷力を失なつて、種々な原因の爲めに……殊に愛の爲めに病氣になる。

シトリーツにはそれが怖しかつた。

『いや、俺は最う斯んな事を片附けて了はう。』と、彼は言つた。『俺は以前のやうにオリガさんの心を見てゐよう。明日は——幸福になるか、彼處を去るかだ！』

『俺には最う力が無い！』と、彼は猶も鏡を見ながら言つた。『俺は何を爲てゐるのだらう……最う澤山だ！……』

シトリーツは直ぐに目的の許へ、竟り、オリガの許へ行つた。



が、オリガは何うしてゐたらう？ オリガは彼の心持を認めなかつたらうか、それとも彼に對して冷淡であつたらうか？

オリガは之を認めない譯に行かなかつた。彼女のやうな繊細な感じを持つた女は、巧みに友誼的心服と、他の感情から起つて来る優しい野心とを見分けることが出来るものだ。媚と云ふやうなものは、虚偽のない、そして誰からも吹き込まれない眞實の道徳心に對する正しい理解を有つてゐるオリガに近づることが出来なかつた。オリガはあの醜い媚を超越してゐた。

最後に注意しなければならぬ事は、シトリーツのやうな人物が、智慧と情熱との籠つた不斷の伏拜をオリガに捧げると云ふことは、たとへ其れが外部に現はれなくとも、オリガに取つて愉快であつたと云ふことである。此の伏拜が彼女の氣に入るのは、無論、此の伏拜が彼女の辱しめられた自愛心を起して段々と彼女を以前立つてゐた臺の上に立てることであるからである。竟り、彼女の自尊心を段々恢復することであるからである。

が、オリガは何と思つてゐたらう？ 彼女は此の伏拜を何う解釋しなければならぬだらう？ 此の伏拜は、シトリーツの情熱と、オリガの頑固な沈黙との永久の戦の中に、何時も現はれる譯に行かない。彼女は、少なくとも、シトリーツの此の戦が皆な無意味であることや、シトリーツがこの戦に自分の意志と性格とを打込んでゐることなどを豫感してゐたであらうか？ シトリーツは此の媚と光とを無駄に費してゐるのではなからうか？……此の光の中にオプロモフと其の愛との姿が沈んでゐるのではなからうか？……

か？……

オリガはそんな事を少しも理解してゐなかつた。彼女はそれを明瞭と意識してゐなかつた。そして之等の問題と夢中に關つてゐるので、何うして此の混沌から遁れ出たならばよいかを知らなかつた。

オリガは何うしたらいいだらう？ 自分の態度を決めないで置くことは出来ない。何時かは胸の中に積み込まれてゐる感情の此の無言の遊戯と争闘とを口に出さなければならぬ——過去の事を言はなければならぬまい！ 彼女は其の過去を何と呼び、シトリーツに對して感じてゐる現在を何と名づけるだらう？ 若しもオリガがシトリーツを愛してゐるのなら、其の愛は何ものであらう？ 媚だらうか、情熱だらうか、それとももつと下等なものだらうか？ オリガは此の事を考へると、恥かしさに顔の微熱るのを覺えた。が、オリガは其んな罪名を自分に着せはしないだらう。

若しもそれが潔白な初戀であつたなら、オリガのシトリーツに對する態度は何であらう？——之も遊戯であらうか、欺瞞であらうか、それともシトリーツを大膽にし、其の大膽で自分の情熱的行爲を蔽ひ隠さうとする細心な打算であらうか？……彼女は斯んな事を一寸でも考へると、直ぐにぶる／＼として眞着になるのであつた。

けれども、遊戯でもなく、欺瞞でもなく、打算でもなければ——そんなら……之も愛であらうか？

初戀の後、七八ヶ月経つて最う第二の愛が起つたのだ！ 斯う思ふと、彼女は氣が遠くなるのを感じた。何うしてそんな事が信じられよう？ オリガは驚きを感じずに……竟り、輕蔑を感じずに、何うして第二



の愛を口にする事が出来よう！彼女には考へる勇氣さへなかつた。彼女は考へる權利さへ有つてゐなかつた！

オリガは頻りに自分の經驗を掘り返して見た。が、其處に、第二の戀をしてゐると云ふやうな證據を少しも見出すことが出来なかつた。彼女は叔母達や、老嬢達や、多くの伶俐な女達や、作家や、(戀愛に關する思索家)達から聞いたことを想ひ出した——が、皆な(女が眞心から愛するのは、一生にたゞ一度だ)と云ふ宣告を下してゐた。オプローモフも矢張り之と同じ宣告を下した。オリガはソーニチカが第二の戀に就いて物語つた事を想ひ出したが、近く露西亞から來た人の話に聞けば、ソーニチカは第三の戀に轉つたと云ふことであつた。

いや、自分はシトリーツに對して愛を有つてゐないのだ。又、そんな筈もないと、オリガは決めた！オリガはオプローモフを愛した。そして其の愛は死んだ。生活の花は永久に凋落した！オリガはシトリーツに對して、たゞ友誼を有てゐるだけだ。其の友誼はシトリーツの立派な性格と、オリガに對する彼の友誼と、注意と、信頼との上に築かれたものであつた。

斯うしてオリガは自分の考へを斥ぞけた。自分の古い友に對する戀の可能さへも斥ぞけた。

之が、シトリーツがオリガの顔と言葉との中の何の徴候も、積極的の平靜も、閃き過ぎる電光も、又温かて親密な、然し平凡な友誼の境界線から僅か頭髮一條ほど出てゐる感情の火花さへも捉へることが出来ない原因である。

シトリーツに對する愛を一度で打ち消す爲めに、オリガが爲なければならぬ唯一の仕事は、シトリーツの愛が段々生長して來る徴候を認めても、それに糧を供給して急速な進歩をさせないやうにすることであつた。が、オリガは最久其の時期を失なつてゐた。其の時期には、ずつと以前に出會したのだ。のみならず、オリガはシトリーツが年齢をとるに従つて、彼の感情が益々熾烈になつて來ることを認めなければならなかつた。オプローモフは到底斯うなつて來ない。オプローモフはあれつきり動く人間ぢやない。

之は生理的に可能な事だが、オリガは精神的に彼から離れることが出来ない。最初、オリガはたゞ以前の友誼によつて交際してゐた。そしてシトリーツは彼女にとつて、以前の通り、滑稽で頓智のある面白い話相手であつた。又、彼は生活上の現象——彼等二人に出會したり、彼等二人の側を通り過ぎたり、彼等二人の思想を捉へたりする有ゆる現象の忠實で深刻な觀察者であつた。

が、彼等二人の會合が頻繁になるに従つて、二人は益々精神的に接近し、シトリーツの役目は益々鮮やかになつて來た。シトリーツは現象の觀察者から、何時のまにか、現象の説明者、オリガの指導者と云ふ役目に轉つてゐた。彼は知らず識らずの中に、オリガの智慧と良心とになつた。オリガの心には、新しい權威とその生活全體を混亂する新しい結び目とが出来た。竟り、オリガがシトリーツの觀察と判斷とから一生懸命に隠しおほせよとする唯一の秘密の境地以外は、皆な曝露して了つたのである。オリガは自分の智慧と心とに對するこの精神的後見を承認すると同時に自分がシトリーツに或る勢力



を有つやうになつた事をも知つた。二人は権利を交換したのだ。オリガは何う云ふ譯か、知らず識らずの中に變化を黙許して了つたのである。

何うして今になつて俄かに凡てを奪ふことが出来よう？……さうだ、そればかりではない。此處には無数の……無数の仕事がある……満足がある、複雑がある……生活がある……若し之がなかつたら、オリガは何故突然斯んなことをし出したのだ？それにオリガが遁れようと考へた時は、——最う遅かつた。彼女には遁れる力がなかつた。

ストーリーリツと一緒に暮さない日と、彼の信じない思想と、彼と一致しない思想とは、皆なオリガに取つて其の色彩と意味とを失ふものであつた。

「あゝ！若し私があの方の妹だつたら！」と、オリガは考へた。「あゝ云ふ方に、それもあの方の智慧にばかりでなく、心にも永く永く権利を有つこと、それから公然にあの方の傍にゐて、其の爲めに重苦しい犠牲や、心配や、憫れな過去の事實などを拂はないでもいゝと云ふやうなことは、何と云ふ幸福だらう。けれど、今の私は何者だらう？ あの方は旅行をなさる——私には其れを止める権利がないばかりか望んで御別れしなけりやならない。又、止めて見たところで——私はあの方に何を言へるだらう？ 私は何の権利で、あの方に絶えず會ひ、あの方のお話を絶えず聞くことを願ふのだらう？……自分が怠屈だからだわ。あの方が何か教へて下さるからだわ。あの方が私を慰めて下さるからよ。あの方の傍にゐると私の爲めになるし、それに面白いのだもの。勿論、之が別れたくない原因よ。けれど、権利ぢやない

わ。私は其の代りにあの方に何を上げたらいいかしら？何んな女でも自分を幸福な者と思つてゐるのに私を潔白に愛する権利と、二人の關係に就いて勝手な考へを持たない権利とは……」

オリガは悶えながら、何うしたなら此の状態を脱することが出来ようかと考へた。が、その考へには的もなければ際限もなかつた。そして前方にはストーリーリツの幻滅と、永久の離別との恐怖があつた。何うかすると、オリガは自分の戦と、ストーリーリツの戦とを一度で片付けて了ふ爲めに、凡てをストーリーリツに打ち明けようかと思ふこともあつた。で、彼女は十分に勇氣を出して見るが、矢張り其れはたゞ思ふだけであつた。彼女に取つて、其れは恥しくもあれば、苦痛でもあつた。

何より不思議なのは、オリガが自分の過去を尊敬しないやうになつたことであつた。殊に、ストーリーリツと別れることが出来なくなつた事と、ストーリーリツが彼女の生活を左右するやうになつた時から、自分の過去を恥ぢるやうになつた事とであつた。例へば男爵か、或は他の誰か、彼女の過去を知りてもしようものなら、彼女は、無論、心配して、好い氣持はしないに相違ない。が、その心配は今、ストーリーリツが彼女の過去を知りはしないかと思ふ時に起る心配程に強くなかつた。

オリガはストーリーリツの顔に何が現はれてゐるだらうとか、彼が、何んな眼附で自分を見たであらうとか、何んなことを言つたらうとか、それから何を考へてゐるだらうなどと怖ろしさうに想像した。オリガはストーリーリツに對して、非常に憫れな、小さい弱者になつて了つた。いや、いや、そんな事は何でも



オリガは自分を觀察するやうになつた。彼女は自分の過去のローマンスを恥ぢるばかりか、其の主人公さへ恥しいことを怖々と知つた……彼女は以前の自分の友ストーリーツに深い信服に感謝しなかつたことを悔ゆるやうになつた。

又、オリガは自分の恥辱に慣れて、其の恥辱を忍べるやうになつた。人間は何事にも慣れるものである！それにストーリーツに對するオリガの友誼は、貪慾な野心や希望を有つてゐなかつた。若しオリガが狡猾な、蠱惑的な心の有ゆる囁を壓し着けてゐたのなら、此の別種の愛の姿は、彼女の力に反抗して彼女の眼の前に現はれ、想像の輝きに益々掻き亂されなければならぬだらう。ところが華やかな空想は——それもオプロモフとてはなく、氣惰るい假睡マッロムの中でけなく、様々な生活の廣い舞臺の上に、深刻な生活と、有ゆる美と、有ゆる悲哀とで形造られる華やかな幸福——ストーリーツとの幸福の空想は、益々蠱惑的に發展して行つた。

其の時、オリガは自分の過去に涙を灑いでも、其れを洗ひ消すことが出来なかつた。彼女は空想から醒めて、猶ほ見透すことの出来ない壁、即ち沈黙と、ストーリーツを苦しめた友誼的な冷靜との壁の蔭に巧みに隠れて了つたが、やがて、その過去を忘れると、再た無邪氣にストーリーツに引き附けられ、其の權利を失つた幸福を無理に空想して、自分の爲めに未來が失はれてゐることや、薔薇のやうな空想が最早過ぎ去つて、生活の花が凋落したことを知る迄、魅力のある愛らしく信じやすい女になつてゐた。が、オリガは年齢をとるに従つて、自分の状態と妥協し、多くの老嬢達のやうに、未來に對する希望

から放れて、とう／＼冷淡に陥るか、善良な事業に就くかするだらう。けれども、彼女がストーリーツの口から迸り出る或る言葉の中に、ストーリーツが最う友ではなくつて、情熱的な崇拜家だと云ふことを見附け出すと、彼女の無法な空想は、益々怖しい姿を呈して來るだらう。友誼は愛の中に漂ふに至るだらう。オリガは斯んな事を考へた朝、眞着になつてゐた。一日ぢう何處へも出ずに動悸々々と胸騒ぎを感じながら自分と戦つて見たり、今、自分は何うしたら良いだらうとか、自分の前に何んな義務が横はつてゐるだらうなど考へたりした——そして結局、何も考へ出せなかつた。彼女は最初何故辱を忍ばなかつたらうとか、何故早くストーリーツに自分の過去を打ち開けなかつたらうとか、今では更に恐怖までも忍ばなければならぬなど考へて自分を恨むだけであつた。

オリガは突然に決心した。彼女の胸は鼓動し始めた。其處には涙も沸き返つた。オリガはストーリーツに抱き附いて、言葉でなく、獻歎と、身慄と、失神とで自分の愛を語り、そして自分の過去をストーリーツに償ひたいと思つた。

オリガは、斯うした場合に、他の女達は何う爲るか云ふことを聞いたことがあつた。例へばソーニチカだ。彼女は自分の夫を馬鹿にしたとか、彼が子供だとか、自分が馬車に乗る間、彼を寒い戸外に故意と待たせて置いたなど、自慢らしく言つた。

ソーニチカはオプロモフと冗戯ふざけするのも氣晴しの爲めでなかりやならないとか、彼が滑稽な男で、《あんな袋》に戀をすることが出来るものかとか、あんな男の言ふことには誰も耳を借しはしないなど考



へたのだが、口には出さなかつた。けれども、ソーニチカのやうな仕打は、ソーニチカの夫や、他の人達になら辯明が立つかも知れないが、ストーリーリツには辯明することが出来ない。

オリガは過去の事實を非常に美しく想像することが出来た。例へば、オプローモフを深淵から救はうと思ひ、それが爲めに、所謂友誼的蠱惑を用ひたのだとも言へるし、又、今にも消えようとする人を活かしてから其の人を遠ざからうと思つてゐたのだとも言へる。が、之は非常な附會で、多くの場合、嘘である……いや、いや、之が救だ！

『あゝ、私は怖い深淵に陥つてゐるのだわ！』と、オリガは悶えながら獨語つた。『言つて了はう！……あゝ、止す方がいゝ！』此のままにして置けばあの方は何時まで経つても此の事を知らないのだもの！けれど、打開けないのは、盗みを爲るのと同じ事だわ。虚偽だわ、媚ることだわ。あゝ、何うしたらいいだらう！……』けれども何うにもしやうがなかつた。

ストーリーリツに来て貰ふと、オリガは非常に嬉しかつたが、次第に彼に會はない方がいゝと望むやうになつた。彼女はストーリーリツの生活の中に、辛つと見えるくらゐの影を宿すに留めたかつた。そして彼の晴やかな惻かな心を無法な情慾で眩したくなかつた。

オリガは自分の戀の不成功を悲しみ、過去の爲めに泣き、精神の中に過去の記憶を葬つて了ふであらう。そして……そして多分、世の中に澤山ある『貞淑な仲間』を見附け、自分も良妻賢母になるであらう。そして過去を處女の空想とし、華やかな生活をせずに、地味な生活をするであらう。多くの女は斯う云

ふ生活をしてゐるのだ！

が、それは女一人の仕事ではない。其の時、他の者がそれを邪魔する。其の者は女に、一時的ではあるが、人生の美しい希望を置く。

『何故……私、戀なんかしたのだらう？』オリガは斯う考へて悶えた。彼女は或る朝、公園でオプローモフが逃げ出さうとしたことを想ひ出した。そして其の時、オプローモフが逃げ去れば、自分の生活の書物が永久に閉ぢられたのだと思つた。斯くオリガは大膽に易々と戀と生活との問題を解決した。斯く有ゆるものを彼女は明瞭に考へてゐた——けれども、有ゆるものは、解くことが出来ない程に纏れて行つた。

オリガは人生を單純に見、眞直ぐに歩きさへすれば人生は從順なもので、丁度敷布のやうに脚下に擴がるものだと漸く悟つた！……して見れば誰にも罪を塗り附けることは出来ない。彼女一人に罪があるのだ。

オリガはストーリーリツが來た理由を知つてゐたので、冷淡に長椅子から起き上り、書物を置いて彼を迎へた。

『お邪魔をしたのではありませんか？』と、ストーリーリツは湖水の方に面した彼女の室の窓に腰掛けながら訊いた。『あなたは書物を読んでゐたのですね？』

『いゝえ、私最う止めてゐたのよ。何だか滅入つて來るんですもの。あなたをお待ちしてみましたわ！』



と、オリガは優しい、親しみのある聲で頼るやうに言った。

『いゝ鹽梅しんばいでした。私もあなたにお話したいことがあるのです。』と、シトリーツは眞面目に言つて、オリガのも一つの安樂椅子を窓際まどぎはに引きずつて行つた。

オリガは慄然おどろくとして一緒に衝つ立つてゐたが、やがて機械のやうに安樂椅子に腰掛け、首垂れたまゝ眼も上げずに心配さうな様子をしてゐた。彼女は遠くへ逃げ出したいやうな氣持を感じてゐた。

此の瞬間、電光のやうに彼女の記憶の中に過去が閃めいた。『裁判されるのだ！人生はお雜様ごとのやうな遊戯ぢやない！』と言ふ聲が何處どこからかオリガに聞えた。『人生を戯れてはならない——泣く時があるぞ！』

二人は暫く黙つてゐた。シトリーツは何か考へてゐた。オリガは怦々おどろくとシトリーツの蒼白あざむめた顔と、皺の寄つた眉と、決心けつしんを表してゐる引き締つた唇とを眺めてゐた。

『ネメジダネメジダ（女神の名）！』と、オリガは内心慄然おどろくとしながら考へた。二人は丁度決闘でもしようとするものゝやうであつた。

『オリガ・セルゲイウナさん、あなたは無論、私が何を言はうと思つてゐるか察していらつしやるでせうね。』と、シトリーツはオリガに不審さうな眼を注ぎながら言つた。

シトリーツは衝立の内側に腰掛けてゐたので、彼の顔は衝立に蔽はれてゐたが、オリガには窓から入る光線が直射してゐたので、彼女が何を考へてゐるか云ふことはシトリーツによく讀めた。

『何うして私に分りました？』と、オリガは靜かに答へた。

オリガは此の危険な敵の前では、何時もオプロモフに現はしてゐたやうな意志と性格との力や、洞察力や、自分に對する支配力などを現はすことが出来なかつた。

オリガは自分が今迄、自分の過去をシトリーツの鋭い眼から隠しおほせることが出来たのは、オプロモフと戦ふ時のやうな自分の力の爲めではなくして、シトリーツの頑固な沈黙と、彼の控へ目な行爲とに依ることを知つてゐた。が、愈々戦端を開いた時に彼女に勝算はなかつた。だから『何うして私に分りました？』と云ふ問で、僅かに空間の一部分か、或は時間の一分間でも抵抗して、敵にもつと明瞭めいりょうと其の策略を露はさせようとしたのである。

『分りませんか？』と、シトリーツは冷靜に言つた。『よろしい。ぢや、私が言ひませう……』

『いゝえ、分つてゐます！』と、突然にオリガは口走つた。

オリガはシトリーツの手を握つて、赦を乞ふやうに彼を見た。

『それ御覽なさい。私はあなたが分つてゐることを見抜いたので！』と、シトリーツは言つた。『が、何うして《分つてゐる》のでせう？』と、やがて彼は悲しさうに附け加へた。

オリガは黙つてゐた。

『あなたは私が何時か言ふに違ひないことを見抜いていらしたのなら、無論、私に對する答へをも考へていらしたでせうね？』と、シトリーツは訊いた。



『見抜いたから、心配してました！』と、オリガは言つて、安樂椅子の脊に凭りかゝり、光線を避けるやうにしながら、心の中で、速く夕闇が助けに来て、自分の顔に現はれてゐる悶と苦痛の戦とをシトリツから讀まれないやうにして呉れるといふがと考へた。

『心配してゐました！それは實に怖ろしい言葉です——』と、シトリツは殆んど囁くやうに言つた。『永劫に希望を捨てよ、』之はダンテの言葉です。私には最う何にも言ふことはありません。其の言葉が凡てを現はしてゐます！が、たゞ感謝すべきことは、』と、彼は深い溜息を吐きながら附け加へた。『私が混沌と暗闇とから遁れ出ることが出来たことです。私は、少なくとも、何うしなければならぬかと云ふことを知つてゐます。此の際、私にとつて唯一の救は——此處を速く逃げ出すことです！』

シトリツは起つた。

『あら、何うか一寸待つて下さい！』と、オリガはシトリツに抱き付き、再た彼の手を握つて悸々と願つた。『私のことも可哀想だと思つて下さい。私、何うしたらいいでせう？』

シトリツは腰掛けた。オリガも矢張り腰掛けた。

『が、オリガ・セルゲーウナさん、私はあなたを愛してゐるのですよ！』と、シトリツは殆んど荒々しい程に言つた。『此の半年の間に私が何んな事をしたか、あなたには分つてゐるでせう！あなたは何を望んでいらつしやるのです、完全な勝利ですか？それとも私が病氣に罹つて、死んで了ふことですか？それはあまり残酷でせう！』

オリガの顔色は變つた。

『彼方へいらして下さい！』とオリガは侮辱の感じと、隠すことの出来ない深い悲哀とを現はしながら言つた。

『失禮なことを言ひました！』と、シトリツは謝罪つた。『私達は何にも見ないうちに最う喧嘩をしたのです。私はあなたが斯んな喧嘩をお望みにならないことを知つてゐます。が、あなたは私の位置に立つことが出来ないのです。だからあなたには私の逃げて行かうとする行爲が不思議なのです。人間は何うかすると無意識に利己主義者になるものですからね。』

オリガは安樂椅子に腰掛けたまゝ、腰掛けてゐられないやうに身體の向を變へた。が、何も言はなかつた。

『私が此處に居つて、何になりますか？』と、シトリツは續けた。『あなたは無論、私に親しく交際つて下さるでせう。けれどもあなたの友誼は私が此處にゐなくても私のものです。私が此處を去つて一年経つても二年経つても、あなたの友誼は私のものです。オリガ・セルゲーウナさん。友誼が若い男女間に於て愛である場合、若くは老人間に於て愛の追憶である場合——之ほど美しいものはありません。けれども其れが一方では友誼であり、他方では愛であることがあります。私はあなたが私と一緒にゐると退屈なさいらないことを知つてゐます。が、私はあなたと一緒にゐる時に何を感じてゐるでせう？』

『そんなら何處へでも勝手にいらつしやるといふわ！』と、オリガは辛つと聞えるくらゐに囁いた。



「此處に居ることは、」と言ひながらシトリーツは考へた。「ナイフの刃の上を歩くことだ——友誼の方が美しい！」

「が、私は其れを忍んでせうか？」と、オリガは突然に言つた。

「何うして忍べないのです？」と、シトリーツは力強く言つた。「あなたは……あなたは……愛していらつしやらないのに……」

「そんなことはありませんわ、本當にそんなことはありませんわ！あなたは……私の現在の生活は幾らか變つてゐるので、私は何うなるでせう？」と、オリガは悲しきうちに、そして殆んど獨語のやうに附け足した。

「其れは何のことですか？何うか判然と言つて下さい！」と、シトリーツはオリガの方へ安樂椅子を引き寄せながらオリガが言つたやうに飾りのない底力のある語調で言つた。彼はオリガの言葉によつて問題を與へられたのだ。

シトリーツはオリガの顔附を熱心に見た。オリガは黙つてゐた。彼女の胸には、シトリーツを安心させて、《心配してゐました》と云ふ言葉を取り消し、其れにシトリーツが與へたとは全く違ふ解決を與へたいと云ふ希望が燃えてゐた。が、何と解決していかと云ふことは、彼女自身にも分らなかつた。そして自分達二人は虚偽な態度の中に、不満の迫害を受ける運命を有つてゐると云ふことや、過去と現在とを明瞭にし、順序を立てることは、たゞシトリーツだけに出来ることで、自分にはシトリーツの助が

なければ出来ないと言ふことなどをたゞ茫然と感じてゐた。が、之が爲めには深淵を渡つて、彼女の過去をシトリーツに打ち開けなければならぬ。オリガはシトリーツの裁判を願つてゐたが、同時に酷く其れを怖れてゐた。

「私にも何だか分らないのですもの。私の方があなたよりもつと混沌と暗闇との中にあるのですわ！」と、オリガは言つた。

「ねえ、オリガさん。私を信じて呉れますか？」と、シトリーツはオリガの手を取つて言つた。

「母を信ずるやうに絶対に信じます——それはあなたにも分つてゐるでせう。」と、オリガは弱々しく答へた。

「ぢやね、今迄、私達が別れてゐた間にあなたがお會ひなすつた出来事を話して下さい。私は最うあなたを見抜くことが出来ないのです。以前、私はあなたの顔色であなたのお考へを讀んだものです。そして之が私達二人をお互に理解させる唯一の方法だつたのです。さうでせう？」

「あゝ、そんな方法は是非……何うかして止めにしなけりやなりません……」と、オリガは承認の避け難いことを知つて悲しきうに言つた。「ネメジダ、ネメジダ！」と、彼女は頭を胸へ落して考へた。

オリガは目を瞑つて黙つてゐた。が、シトリーツの精神には此の單純な言葉から、殊に彼女の沈黙から恐怖が漂ひ出した。

「オリガさんは煩悶してゐる！あゝ！何うしたのだらう？」と、シトリーツは冷やかに考へたが、自分



の手足の慄へるのを感じた。彼は何かしら非常に怖ろしいものを想像したのだ。オリガは矢張り黙つてゐたが、彼女が悶えてゐることは明らかに見えた。

『それで……オリガ・セルゲエウナさん……』と、シトリツは急いで言つた。

オリガは黙つてゐたが、再た神經的に身體を動かした。それは暗いので見えなかつたが、彼女の絹の衣服のサラ／＼と云ふ音が聞えた。

『私、氣を落ち着けてゐるのです。』と、遂々オリガは言つた。『あなたが知つていらつしやるのですから本當に言ひ辛いわ！』と、オリガはやがて傍を見て、自分の悶を壓へようとしながら言つた。

オリガはシトリツが自分の口を待たずに、奇蹟か何かで知つて呉れるといふがと思つた。が、幸ひ、暗くなつて來たので、オリガの顔は最う蔭に蔽はれてゐた。彼女は、聲を變へて言ふことも出来るのだが、彼女の舌からは言葉が出なかつた。彼女は何う云ふ語調で言ひ始めたものかと苦しんでゐるらしかつた。

『あゝ！私は餘程悪いことをしたんだわ、斯んなに恥かしくつて苦痛なんだもの！』と、オリガは内心で悶えた。

が、オリガは以前から斯うした信念を持つて自分と相手との運命を左右し得る程惻巧な強い女ではなかつた！で、今、處女としての彼女は慄へなければならなくなつた！過去に對する慚愧と、現在に對する自尊心の拷問と、虚偽な状態とが彼女を苦しめた……彼女は其れを忍び得なかつた！

『ぢや、私はあなたを助けて上げませう……あなたは……戀をしていらしたのでせう？……』と、シトリツは辛つと言つた。が、彼は其の言葉の爲めに反つて苦痛を覺えた。オリガは沈黙で其れを承認した。が、シトリツには再た恐怖が燃え出した。『誰をです？其れは秘密ぢやないでせう？』彼は兀氣よく言はうとして斯う訊いたが、然し自分では唇の慄へを感じた。

が、オリガはもつと苦しんでゐた。彼女は別な名前を言ひ、別な戀物語を話さうと思つた。で、暫く惑つてゐたが、とてもそれは出来なかつた。そして危機一髪の際に険しい絶壁から飛び降りたり、焔の中に飛び込んだりする人のやうに彼女は突然に言つた。

『オプローモフさんを！』

シトリツは柱のやうに衝つ立つた。二分間ばかり沈黙が続いた。

『オプローモフ君を！』と、シトリツは吃驚して繰り返した。『そんな事はないでせう！』とやがて聲を低くして確信でもあるかのやうに附け加へた。

『本當にさうなの！』と、オリガは落着いて言つた。

『オプローモフ君を！』と、シトリツは更に繰り返した。『そんな筈はない！』と、再た確信があるやうに附け足した。『其れは何かの間違です。あなた自身も、オプローモフも、愛其ものをも理解してゐなかつたのです。』



オリガは黙つてゐた。

『其れは愛ぢやありません。何か別なものだと私は思ひます!』と、シトリツは頑固に言つた。

『でも、私はあの方を蠱惑し、あの方を引き着け、あの方を不幸な人にしたのです……それから、あなたの御言葉通りあなたの代理を務めたのです!』と、オリガは聲を壓へるやうに言つた。彼女の聲には再た慚愧の涙が沸き返つてゐた。

『オリガ・セルゲーウナさん! 怒らないで下さい。そんな言ひ方をしないで下さい。其れはあなたの語調ぢやありません。あなたは私がそんなことを考へないことを御存じでせう。けれども、私の頭に入らないのです、私には分らないのです、オプローモフ君が……』

『だつてあの方もあなたの友誼を受けることの出来る人ですわ。あなたは、あの方の價値を御存じないのです。何うしてあの方は愛することの出来ない人なんですか?』と、オリガは辯解した。

『私は、愛が友誼程に疑惑的なものでないことを知つてゐます。』と、シトリツは言つた。『愛は多くの場合、盲目なことさへあります。人は價値の爲めに愛するものではありません——何時もさうです。そして愛するのは何か下らないものが動機になることがあります。そして其れが何であるか、何と名を附けていゝか分らないものです。ところが、それさへもあの珍らしい、どつしりしたイリヤにはないので、だから私は驚きますよ。ねえ、オリガさん。』と、シトリツは元氣よく續けた。『私達は何うかすると終りまで行かないことがあります。お互に理解しないことがあります。事實を恥かしいと思つてはい

けません。半時間でも自分に寛大ではいけません。すつかり私に聞かせて下さい。さうすれば私は其れが何であつたか、又何うなるべきものであつたかと云ふことをあなたに御話します……私には何うしても、其處には何か別なものがあつたのだと思へません……あゝ、若し其れが本當だとしたら』と、シトリツは昂奮して附け足した。『若しオプローモフ君で、他の人でなかつたら、若しオプローモフ君であつたら、それは、あなたが過去と、愛とに捉はれていらつしやらないで、自由なことを意味するものです……お聞かせ下さい、速く御聞かせ下さい!』と、シトリツは落着のある、愉快さうな聲で言つた。『では何うか御聞き下さい!』と、オリガは鎖の一部分が自分から落ちたのを喜びながら確信あるらしく答へた。『私、狂人になりさうなのよ。私の憫れなことが御分りでせう! 私は自分が悪いのか、悪くないのか自分が過去を恥ぢてゐるのか、過去を悲しんでゐるのか、未來に希望を有つてるのか、絶望してゐるのか分らないのです……あなたは御自分の苦痛のことをおつしやいましたが、私の苦痛をもお疑ひにならなかつたやうです。何うかすつかり御聞き下さい。けれど餘り理智的に御聞き下さると困りますわ。私はあなたの理智が怖いのですから。ですから何うか心でね。心なら、私に母が無いことも、私が林のやうな處に居つたことも分るだらうと思ひます……』と、オリガは低い聲で靜かに附け足した。『いえ、』と、やがて狼狽て言ひ直した。『私を救さないで下さい。若しも之が愛でしたら……何處かへいらして下さい。』と言つて彼女は一寸口を噤んだ。『そして友誼が再た起つて來た時において下さい。若し之が一時の蠱惑でしたら——私を罰して何處かへ逃げて下さい。私を忘れて下さい。ようございますか。』



ストーリーリツは答へる代りに彼女の両手を固く握つた。

オリガは長々と詳しく告白した。彼女は一語一語明瞭と自分の頭から他人の頭に置き換へた。此の告白した事件の爲めに彼女は長い間悶えたり、顔を赤くしたりしたのである。そして以前其れに捉はれて彼女は幸福を感じてゐたが、やがて突然に悲哀と疑惑の深淵に陥つたのである。

オリガは散歩のことや、公園のことや、自分の希望のことや、オプローモフの元氣のことや、懶惰のことや、連翹の枝のことや、又、接吻のことさへも物語つた。が、たゞ息苦しい晩の庭のことは言はなかつた——と云ふのは、彼女はまだ其の時氣絶したことを言ふ決心が出来なかつたからであらう。

彼女は最初、悸々とした囁き聲で話してゐたが、段々話して行くに連れて、彼女の聲は明らかに、そして自由になつた。斯うして彼女の聲は囁きから中音に移り、やがて胸一ぱいの語調に高まつた。彼女は話を終つた時には、他人の戀物語でもしたやうに落着いてゐた。

オリガの前には幕が開いて、今迄凝つと見るさへ怖ろしいと思はれた過去が展開された。彼女の眼は種々なものに開かれた。若し暗くさへなかつたら、彼女は自分の話相手を大膽に見たことであらう。

彼女は話を終つて宣言を待つてゐた。が、其の答へは、たゞ墓のやうな静寂であつた。ストーリーリツは何うしたのだらう。聲も、身動きも聞えない。呼吸さへ聞えない。オリガの傍には誰もゐないやうに静かであつた。

此の沈黙は再たも彼女に疑念を投げた。沈黙は續いた。此の沈黙は何を意味するものだらう？ 世界ち

うで一番鋭い眼を有つた親切な裁判官は彼女に何んな宣告を準備してゐるのだらう？ 他人の人は皆なオリガを容赦なく罰しても、たゞストーリーリツだけは彼女の辯護士となり得るのだ。オリガも彼を選ぶ筈である……彼は彼女自身よりもよく凡てを理解し、批評して、何處までも彼女の利益を計つてくれる筈である！ と、ところが、其の彼が黙つてゐる。彼女の信用する者は彼女を捨てたのであらうか？ ……

オリガは再た怖ろしくなつた。……

と、扉が開いて、女中が二本の蠟燭を持つて來た。其の蠟燭で彼等の室は照された。

オリガは食べるやうな、そして不審さうな眼附を悸々とストーリーリツに投げた。ストーリーリツは十文字に両手を組み合せて例の優しい打ち解けた彼女を見ながら彼女の煩悶を面白がつてゐた。

オリガの心臓は静かになつて温か味を覺えて來た。彼女は安心したやうに溜息を吐いた。彼女は泣き出したやうな氣分になつた。と、彼女には忽ち自分に對する寛大と、ストーリーリツに對する信頼とが歸つた。彼女は丁度赦されて、慰められて安心した子供のやうに幸福になつた。

『それで全部ですか？』と、ストーリーリツは静かに訊いた。

『全部です！』と、オリガは言つた。

『どれ、オプローモフ君の手紙は？』

オリガは紙挾から手紙を出してストーリーリツに渡した。ストーリーリツは燈火の傍に寄つて手紙を読み、其れを卓子の上に載せた。が、眼は再た特別な表情を帯びて彼女に向けられた。彼女は最う長い間、彼の



斯んな表情を見なかつた。

オリガの前には、以前の自信の強い、幾分滑稽な、そして底の知れない程人の善い、彼女を可愛がる友達が立つてゐた。彼の顔には苦痛の蔭も、疑惑もなかつた。彼はオリガの両手を握り、その両方を代る／＼接吻して、やがて深い物思ひに沈んだ。彼女も安心して、瞬きもせず彼の顔に表はれる思想の動搖を見てゐた。

俄かにシトリーツは起ち上つた。

『あゝ、若しオプロモフに關した事なら、私はあんなに心配するんぢやなかつた！』彼はオリガにあんな怖ろしい過去が無いかのやうに例の愛嬌と信頼に富んだ眼附とを彼女に注ぎながら斯う言つた。

オリガの心は楽しく快活になつた。彼女は辛つと安心した。彼女は彼一人に對して恥かしいと思つてゐたが、彼は自分を罰しもしなければ自分の傍から逃げ出しもしないことを知つた。彼女は世界ぢうの裁判官も最う怖るゝに足りないと感じた。

シトリーツも再た我に歸つて快活になつた。が、オリガはこれでは満足出来なかつた。オリガは自分に罪がないことを知つたが、被告人として其の宣告を聞いたかつた。が、シトリーツは帽子を取つた。

『あなた、何處へいらして？』と、オリガは訊いた。

『あなたは昂奮していらつしやるからお休みなさい！』とシトリーツは言つた。『明日御話ませう。』

『あなたは私を夜通し眠らせないのでですか？』と、オリガはシトリーツの手を握つて、椅子に腰掛けさ

せながら言つた。『あなたは之が何う云ふことで……あつたとか、今、私が何うすればいゝとか、私が將來……何うすればいゝかなど云ふことをおつしやらずに歸つてお了ひなさるのですか。アンドレイ・イワヌイチさん、他に誰がそんなことを私に言つて呉れるでせう？私が立つてゐても、誰が私を罰して呉れませう？誰が私の罪を赦して呉れませう？……』と、オリガは附け足して、友誼の籠つた優しい眼附で彼を見た。で、彼は帽子を投げ出し、オリガの傍へ駆け寄つて跪づかうとした。

『私の天使のオリガさん！何うか斯う言はして下さい。』と、シトリーツは言つた。『心配なすつちやいけません。あなたを罰することも、赦すこともありやしません。私にはあなたのお話に附け足すことが何にもないのです。あなたは何うして疑ぐつていらつしやるのです？あなたはあれが何であつたか、そして又、あれには何と云ふ名を附けていゝかと云ふことを知りたいとおつしやるのですね？……あなたは疾くに知つていらつしやるでせう……オプロモフ君の手紙は何處へ行きました？』

シトリーツは卓子から手紙を取り上げた。

『聞いて御覽なさい！』と言つてシトリーツは讀んだ。『あなたの現在の「愛してゐます」と云ふことは、現在の愛ではなくして未來の愛だと云ふことです。それはたゞ愛さうとする無意識な要求に過ぎません。其の要求は、本當の食物が無い爲めに、それが女ならば、時々子供に對する愛情の中や、同性に對する愛や、或は單に涙や、ヒステリックな發作の中などに現はれるのです！……あなたは間違つていらつしやるのです！（シトリーツは此處を讀む時に其の字を敲いた。）あなたの前に立つてゐる者は、あなたが



豫期し、空想して居られた者ではありません。暫時お待ち下さい——程なく其の人が來ます、其時あなたは覺醒します、其時あなたは自分の間違を悲しむでせう、そして恥ぢるでせう……」

『何うです、之は本當でせう！』と、シトーリツは言つた。『あなたは慚愧と悲哀とを感じていらしたのです……間違の爲めに。ですから之に就いて何も言ふことはありません。オプロモフ君は眞實を言つたのですが、あなたが彼の言葉を信じなかつたのです。此處にあなたの凡ての罪があります。其時あなたは別れようとなさつたのですが、オプロモフ君はあなたの美に捉はれ……あなたも亦、彼の鳩のやうな優しさに……動かされたのです！』と、シトーリツは殆んど嘲笑ふやうに附け加へた。

『私はあの方の言葉を信じないで、私の心が間違つてゐないと思つてたんです。』

『いゝえ、間違つてゐたのです、其れが時によると絶望的になつたこともあります！が、あなたの心はそれに氣が附かなかつたのです。』と、シトーリツは附け足した。『一方からは想像と自尊心とが手傳ひ、他方からは意志の薄弱が……それにあなたは、一生涯、斯んな楽しいことは最うあるまいとか、此の蒼白い光が一生を照すもので、之がなければ永久の夜が來るだらうなど、考へてびく／＼していらしたのです……』

『でも涙は？』と、オリガは言つた。『私が泣いた時の涙は、心から出た涙でないでせうか？ 私は偽りませんわ、私は誠意でしたわ……』

『あゝ！女と云ふ者は、何事があつても直ぐに泣くぢやありませんか！それにあなた御自身もおつしや

つたでせう、連翹の花束と、<sup>すま</sup>好な腰架とが可哀想だつたつて。それに偽はられた自尊心と、不成功に終つた救済者の役目と、幾らかの習慣とを加へて御覽なさい……涙の爲めには十分の原因があるぢやありませんか！』

『ぢや、私共の面會も、散歩も矢張り間違ひなの？私……あの方の許へも行つたのですよ……』と、オリガは心配さうに言ひ終つた。が、自分で自分の聲を消したいと思つてゐたやうであつた。

オリガはシトーリツが益々熱心に自分を辯解して呉れるやうに、そして自分が益々彼の眼に無罪に映ずるやうに頻りに自分の罪を算へ立てた。

『あなたのお話によると、最後の面會の時、あなたには何も話をする事が無かつたのです。あなた方の所謂《愛》には内容が足りなかつたのです。其の愛はそれ以上行くことが出来なかつたのです。あなた方は、別れる前に既に別れていらしたのです。そして愛其ものを信ぜずに、あなた方が考へ出した愛の幻影を信じていらしたのです——其處に凡ての祕密があるのです。』

『ぢや、接吻は？』と、オリガは靜かに囁いた。シトーリツは其れを聞き取れなかつたが、察した。

『あゝ、其れは重大問題です。』と、シトーリツは可笑いほど嚴然として言つた。『其れが爲めに……晝餐の時、一皿の御馳走をあなたから取り上げなければならぬ。』

シトーリツは益々愛嬌よく、益々深い愛を現はしながらオリガを見た。

『冗談はあんな《間違》の償ひになりませんわ！』オリガはシトーリツの落着きと無雜作な語調とで拍子



扱がしたので斯う厳しく言つた。『あなたが或る残酷な言葉で私を罰し、私の爲た事を本當の名前で罰して責めて下さつた方が、私に取つて何んなに樂かしくありませんわ。』

『私は此の事件がイリヤ君に關した事てなくつて、他の人に係つた事だと思つてゐる間、冗談を言はなかつたのです』と、ストーリーリツは辯解した。『さうした場合には間違が……不幸で終ることがありますからね……けれども私はオプロモフ君を知つてゐます……』

『他の人になんか、決して！』と、オリガは昂奮して遮つた。『私はあなたよりも、もつとよくオプロモフさんを知つてゐますわ……』

『それ、御覽なさい！』と、ストーリーリツは承認した。

『けれど、若しあの方が……別な人間に變つて、生々となつて、私の言ふ通りにおなりになれば……私にはあの方を愛してゐましたわ！それでも虚偽なんですか、間違なんですか？』と、オリガは有ゆる方面から事件を見て、少しの汚點も、少しの推察も残らないやうに言つた。

『竟り、オプロモフ君の代りに誰か他の男なら、』と、ストーリーリツは遮つた。『屹度あなた方の關係は愛になり、堅固になり、そして其の時……が、之は別なローマンスで、別な主人公でそんな者にあなたが眼をくれる筈はありませんからねえ。』

オリガは溜息を吐いた。彼女は最後の重荷を精神から投げ出したやうな氣がした。二人は黙つてゐた。

『あゝ、何と云ふ幸福でせう……以前の通りになつたら。』と、オリガはさも満足らしく徐かに言つて、

ストーリーリツに深い同意と、今迄見たことのないやうな熱烈な友誼とを現はした眼を向けた。此の眼の中にストーリーリツは殆んど一年間捉へようとして捉へられなかつた火花を感じた。ストーリーリツの身體には喜びの慄ひがきつと走せ通つた。

『いや、私は最う以前の通りになりました！』と、ストーリーリツは言つて考へ込んだ。『あゝ、それは私が其のローマンスの主人公がイリヤ君であつたことを知つたからです！之を知るには随分長い時間と、精力とを費しましたよ！何の爲めてせう？何故でせう？』とストーリーリツは殆んど悲しむやうに言つた。

が、彼は俄かに此の悲哀から醒めて、重苦しい憂悶から我に歸つたやうであつた。彼の額は滑らかになり、眼は輝いた。

『けれども、之は無論避け難いことです。其の代り私は今、非常に安心しました。そして……非常に幸福です！』と、ストーリーリツは希望に溢れるやうに言つた。

『夢のやうですわ。宛然何事もなかつたやうですわ！』と、オリガは考へ込んだまゝ、自分が急に生れ更つたやうになつたのに吃驚しながら、辛つと聞えるくらゐに言つた。『あなたは慚愧と悔悟とばかりでなく、悲哀も苦痛も——皆取り除けて下さつたのです……あなたにはよく斯んな事が出来ましたね？』と、オリガは靜かに訊いた。『何も彼も皆な過ぎ去つて了ひました。之も……間違でせうか？』

『私も過ぎ去つて了つたと思つてゐます！』と、ストーリーリツは言つて、始めて情熱的な眼附でオリガを見た。彼は其の情熱を隠さなかつた。『竟り、過去の事は皆なです。』



「ですが……これからことは……間違ではなくつて……眞實なんですか？……」と、オリガは訊いたが、すっかり言つて了へなかつた。

「それは此處に書いてあります。」と、シトリーツは再た手紙を取り上げて言つた。「『あなたの前には、あなたが豫期し、あなたが空想していらした其の人間が現はれてみません。其の人が来れば、あなたは氣が附いて……』だから其の時、愛してお遣りなさい、私も附け加へて置きます、一年は愚か、一生涯でも其の愛の爲めには足りない程愛して御遣りなさい。けれども其の人が誰であるかと云ふこと——それは私には分りません。」と、シトリーツはオリガを見入りながら言ひ終つた。

オリガは眼を閉ちて、唇を引き締めた。が、眼の輝きは睫毛を透して外面に現はれた、唇は笑を制へてゐたが、押へ切れなかつた。オリガはシトリーツを見て、涙が出る程、精神の底から笑つた。

「オリガ・セルゲエウナさん、私は、あなたに何うなすつたのか、又、何うなさるのかと訊きましたが、」と、シトリーツは言つて其の言葉を結んだ。「あなたは私の間に對して何ともお答へなさらずに、何時までも問題を片付けてお了ひにならなかつたのです。」

「けれど、私は何とお答へすればいいのですか？」と、オリガは怦々と言つた。「私は、あなたの望んでいらしやる事と、あなたの……尊敬していらつしやる事とを言ひさへすれば、何も心配しないでもいいのでせうか？」と、オリガは瞬くやうに言つて、恥かしさうにシトリーツを見た。

彼女の眼には再たも今迄見えなかつた友誼の火花が現はれた。シトリーツは再た幸福に慄へた。

「さう急かないで下さい、」と、シトリーツは附け加へた。「私にはあなたの心の悲哀——遠慮の悲哀を片附けたことによつて、何う云ふ償を得なけりやならないかおつしやつて下さい。此の一年は何事かを私に語りましたが、今、私が旅行するがいゝか、此處にゐるがいゝかと云ふ問題を決めて下さい。」

「あなたは私を焦していらつしやるのだわ！」と、オリガは俄かに活潑に言つた。

「いや、さうぢやありません！」と、シトリーツは勿體らしく言つた。「之は以前の問題ぢやないのです。

今、此の問題は他の意味を有つてゐます。若し私が此處にゐるとすれば……私は何う云ふ立場になるてせう？」

オリガは急にどぎまぎした。

「此の通り私は焦しやしませんよ！」とシトリーツはオリガを捉へ得たことに満足しながら笑つた。「今の話の後は、私達はお互に別な關係にならなければなりませんね。私達二人は最う昨日迄のやうな者ではないのですから。」

「私には分りませんわ……」と、オリガは益々どぎまぎしながら瞬いた。

「ぢや、私が教へて上げませう。」

「何卒……私は盲目に實行します！」と、オリガは殆んど情熱的に従順を示しながら附け足した。

「其の人が来るのを待つてゐる間、私の妻になつて下さいませんか！」

「まだ駄目ですわ……」と、オリガは瞬いて、両手で顔を隠し、胸を動悸々々させた。が、同時に幸福



をも感じた。

『何うして駄目なんです？』と、シトリッツはオリガの頭を自分の方に引き寄せながら訊いた。

『最う過ぎ去つた車でせうがねえ？』と、オリガは母親にする様に彼の胸に頭を押し付けて再た囁いた。

シトリッツは静かにオリガの手を顔から除けて、彼女の頭に接吻し、長い間悸々してゐるオリガを眺めながら出て来ては又眼で呑み込まれるオリガの涙を面白さうに見てゐた。

『あなたの連翹のやうに濁んで了ふでせう！』と、シトリッツは言つた。『あなたは學問をなすつたのです。で、今、其の學問を利用する時が來たのです。生活が始まつたのです。あなたの未來を私の手に渡して、何事も考へないやうになさい。私は凡てを保證します。叔母さんの許へも行きます。』

シトリッツは其夜、遅くなつて自分の宿へ歸つた。

『自分の幸福を見附けた。』と、シトリッツは考へた、木や、空や、湖水や、水面に騰ち上る霧などにさへ恍乎と見入つた。『待つてゐたんだ！何年間、感情の渴望と、辛抱と、精神力の經濟とをして來たことだらう！随分俺は長い間待つてゐたんだ——が、皆な報いられた。之が、人生の最後の幸福だ！』

今では、彼の眼に映ずる凡ての物は幸福に蔽はれてゐた。寫字案も、父親の馬車も、硬々した手袋も脂浸みた算盤も——皆な活動的の生活である。彼の記憶の中には、母親の良い匂のする室と、ゲルツの顔附と、公爵の繪畫室と、蒼い眼と、髮粉をかけた栗色の頭髮とが甦つた——そして皆なオリガの優しい聲で蔽はれた。彼は頭の中でオリガの歌を聞いてゐた……』

『オリガさんは——俺の妻だ！』と、シトリッツは情熱的に身慄しながら囁いた。『皆見附けて了つた。最う何も搜すものはない。これから行くべき處はない！』

斯うして彼は幸福の瓦斯中に考へ沈みながら宿へ歸つた。途中、道路や街道にも氣が附かなかつた……

オリガは長い間、彼を見送つてゐたが、やがて窓を開けて、暫く涼しい夜の空氣を呼吸した。波立は幾干か静まつて、胸の呼吸も平らになつた。

オリガは眼を湖水や、遠くの景色に向けながら、眠りでもしたかのやうに静かに、そして深く考へ込んでゐた。オリガは頻りに、自分が何を考へてゐるか、何を感じてゐるかを捉へようとしたが、出來なかつた。思想は波のやうに平らかに漂ひ血も矢張り波のやうに血管を流れた。彼女は幸福を感じた。そして其の幸福の境が何處にあるかと云ふことも、自分は何う云ふ者になつたかと云ふことも明瞭と考へることは出來なかつた。彼女は、何うして自分が斯んなに静かで、平和で、破壊することの出來ない喜びを感じてゐるのだらうとか、何うして自分が斯んなに落着いたのだらうなどと考へた。殊に……

『私、あの方の花嫁なのよ……』と、オリガは囁いた。

『私は花嫁なのよ！』と、オリガは自慢らしく慄へながら考へて、自分の全生涯を照す其の瞬間を待つてゐた。彼女は段々に脊を伸して、其の高い處から、昨日迄たつた一人で何の氣も附かずに通つて來た暗い小徑を見た。

何うしてオリガは慄へないのだらう？彼女は矢張り、たつた一人で竊そり自分の徑を歩いてゐたのだ。



そして十字街まで来ると、「其の人」に出會した。其の人は彼女に腕を貸して、眩ゆく輝いてゐる光線の下に連れて行かずに、廣く溢れてゐる河や、廣々とした野原や、親しさうに微笑み合つてゐる小丘などへ連れて行つた。彼女の眼は光線の爲めに瞬きしなかつた。心臓も鼓動を止めなかつた。想像も燃え上らなかつた。

オリガは静かな喜びを感じながら、溢れた生活や、生活の廣い野原や、緑滴るやうな小丘などに眼を休めた。彼女の肩には身慄が走せ通らなかつた。眼も自慢さうに燃えなかつた。たゞ彼女が其の眼を野と丘から、自分に腕を貸して呉れた者に轉じた時にだけ、彼女は自分の頬に徐かな涙の流れを感じた……オリガは眠つたやうに何時までも腰掛けてゐた。——彼女の幸福の眠りは斯んなに静かであつた。彼女は身動きもせず、殆ど呼吸も吐いてゐないやうであつた。彼女は恍乎として、優しく輝やいてゐる、温かい、そして匂のいゝ静かな深い夜に沈んだ眼を向けた。幸福の夢は、廣い翼を擴げて、丁度空の雲のやうに彼女の頭の上を徐かに飛んだ……

オリガは此の夢の中で、自分がたつた二時間だけ瓦斯と絹レースとに包まれ、次に一生涯汚ない平常着に包まれてゐるところを見なかつた。が、又、彼女は楽しい宴會も、燈火も、快活な叫び聲も夢みなかつた。彼女が夢みたものは幸福であつた。それも單純な飾り氣のない幸福であつた。で、彼女は再々自慢の慄へからではなく、たゞ深い感動から瞬いた。「私はあの方の花嫁なのよ！」

## 五

あゝ！シトリツツが突然に訪ねて来たオプロモフの聖名祭が済んでから一年半も経つたのに、オプロモフの室は、何と云ふ陰鬱な、そして退屈なことだらう。オプロモフ自身も頹然として、彼の眼には倦怠が宿つてゐた。彼は其處から、丁度病人か何かのやうに、周圍をきよとくと見廻してゐた。

彼は散々室の中を歩き廻ると、やがて轉りと横になつて天井を眺めた。それから本棚から書物を取つて、五六行眼を走らせると、欠伸をしながら指先で桌子をバタ／＼と敲き始めた。

ザハールは益々偏屈になり、益々不精になつた。彼の眩には補布が出来た。彼は碌に食べもしなければ、眠りもせずに、三人の爲めに働らいてゐるかのやうに、宛も貧相な饑乏した様な眼附をしてゐた。

オプロモフの着てゐる夜着も破れて来て、何んなに急しく其の穴を繕つても、其の後々と再々出来た。で、疾くに新調しなければならなかつた。蒲團も矢張り破れて、處々に補布が當つてゐた。窓掛も疾くに色が褪せてゐた。たとへ其れを洗濯しても、雑巾としか見えなかつた。

ザハールは舊い卓布を持つて来て、オプロモフの傍にある桌子の半分を掛け、やがて用心深く舌を噛みながら、火酒の燵を載せた盆を持つて来たり、麵麴を置いたりして行つた。

主婦の室へ行く方の扉は開いてゐた。アガフィヤ・マトウエーウナはデュー／＼と音を發てゝゐる卵焼の鍋を持つたまゝ、急いで入つて来た。



彼女も酷く變つた。酷く寢れた。頬も最う丸くも、白くも、赤くも、蒼くもなかつた。斑らな眉も光澤が失せて、眼も落ち込んでゐた。

彼女は古い更紗の衣服を着てゐた。彼女の手は、労働や、火や、水や、其他種々なものゝ爲めに綺麗にもならなければ醜くもなつてゐなかつた。

アクリリナは最う家にゐなかつた。で、アニシヤが料理部屋から、菜園から、鶏の始末までしたり、床を洗つたり、拭いたりしてゐた。が、彼女一人が何から何まで切り廻すのではなかつた。アガフィヤ・マトウエーウナ自身も知らず識らずの中に料理部屋で働いてゐた。彼女は搗いたり、篩つたり、何うかすると拭くこともあつた。と云ふのは、珈琲でも、肉桂でも、扁桃でも澤山に使はなかつたからである。その代り彼女はリースの方を忘れて了つた。今、頻りに葱を細かく刻んだり、山葵を拭いたり、其れに似寄つた香りのする物を拭いたりしてゐた。彼女の顔には深い憂鬱が横はつてゐた。

けれども彼女が溜息を吐くのは、自分の爲めでもなければ、自分の珈琲の爲めでもなかつた。彼女が悲しむのは、段々暇になり、世帯も小さくなり、肉桂を搗いたり、ソースに華を入れたり、濃い乳漿を沸したりする場合が少なくなつた爲めでもなくして、イリヤ・イリーチが段々とさう云ふ物を食べなくなつた爲めと、彼が上等の店から珈琲を斤で買はずに、小さい店から十錢くらゐ買ふ爲めとチエウホンの女が乳漿を持つて來ないで、例の小店からそれを買ふ爲めと、彼が汁の多いカツレッツの代りに、毎朝、店曝の古い卵で作つた卵焼を食べる爲めとであつた。

之は何を意味してゐるのであらう？ それは、去年シトリツがオプローモフから精密に取り立てて送つて呉れた金が全部、オプローモフが主婦に宛た借用證の要求を満足させる爲めに費つてしまつたことを意味するものである。

主婦の兄の《當然の権利》は豫期した以上に成功した。輕蔑すべき仕事のことをタランチェフが始めて仄かした時、イリヤ・イリーチは激昂して顔を擧めたが、やがて二人で仲直りの盃を揚げて、二三盃飲むと、オプローモフは四年間の期限で借用證に署名した。が、それから一ヶ月も経つと、アガフィヤ・マトウエーウナは兄の名宛になつた同じやうな證書に署名した。そして彼女は自分が署名したものが何であるか、又何の爲めに署名したかと云ふことを疑はなかつた。兄は、此の證書は家事に必要な書類だからと云つて妹に《某々(姓名)は此の代筆せる證書の確實なることを證明す。》と書かせたのである。

彼女は書かなければならない事が多いので大分閉口して、兄に願つてワーニユシヤに書かせるやうに言ひ、《彼なら立派に書きます》私は下手だと言つた。が、兄は頑固に要求したので、彼女は曲りくねつた大きな字で署名した。そして此の事に就いて其の後何の話も聞かなかつた。

オプローモフは此の證書に署名する時分、一つは其の金が孤兒の爲めに使はれるのだと思つて安心してゐた。が、やがて翌日頭が判然した時、其の事を想ひ出して酷く恥ぢた。そして其の事を忘れようとして、主婦の兄に會ふのを避けるやうにした。若しタランチェフが其の事でも言はうものなら、室を出るとか、村に行くとか言つて酷く彼を嚇かした。



それから、オプローモフが村から金を受け取った時、主婦の兄は彼の許へ来て、収入の中から至急拂をして貰ひたい。三年間しか待てないのだから、期限が来ると、書類は警察に渡され、村は公賣に處せられる。それはオプローモフが現金を有つてゐないし、又有ちさうにないからだと言つた。

オプローモフは、シトリツが送つて呉れた金が全部借金の償却になつて了ひ、自分の生活費には僅かしか残らなかつたことを知つた時、始めて詐偽にかゝつたことに氣が附いた。

主婦の兄は債務者との此の自由な取引を二年の間に終つて了ひたいと急いだ。それは何か自分の仕事を妨げられるといけないと思つたからである。之が爲めにオプローモフは急に逆境に陥つて了つた。

尤もオプローモフは自分の衣匣に幾千の金があるか知らない習慣を持つてゐたので、最初の間は自分の逆境も其れ程に感じなかつたが、イワン・マトウエイチが或る穀物商の娘と結婚しようとして、特別の室を借りたり、轉宅をしてから激しく逆境を感じるやうになつた。

アガフィヤ・マトウエイウナの世帯上の努力は急に止んだ。鱒魚の肉や、犢の肉や、七面鳥などは、他の料理部屋へ、竟り、ムホヤーロフの新らしい借間に現はれるやうになつた。

新らしい借間には毎晩、燈火がかん／＼と點いてゐて、イワン・マトウエイチの未來の親戚達や、同僚や、タランチエフなどが集まつてゐた。何も彼も其處へ持つて行かれた。

アガフィヤ・マトウエイウナと、アニシャとは口を開け、手をだらりと垂れたまゝ、空の燒鍋や壺などと一緒に殘された。

アガフィヤ・マトウエイウナは、自分には家や、菜園や、雞鶩などがあるが、其の菜園には肉桂も華も生えてゐないことを初めて知つた。市場では商人達が段々彼女に頭も下げなければ、笑も見せないやうになり、此のお辭儀と微笑とが兄の許に新たに雇はれたてつぷりとしたお洒落な女中に奪はれたことも知つた。

オプローモフは主婦の兄が生活費として自分に殘して行つて呉れた金を残らず主婦に渡した。主婦は三四月の間、以前の通り、何の氣もなしに珈琲を何斤も碾いたり、肉桂を搗いたり、犢の肉や七面鳥を焼いたりして、最後の七十錢を使ひ盡すまで斯うしてゐた。そして其の最後の日にオプローモフの許へ行つて金が一文も無くなつたと言つた。

オプローモフは此の報を聞くと、三度ばかり長椅子の上で寝返りを打ち、やがて自分の抽斗の中を見たが、彼の許にも一文も無かつた。金を皆な何處へ遣つて了つたのだらうと考へて見たが、少しも考へ出せなかつた。銅貨でもありはしまいかと、卓子の中を搜したが矢張り無かつた。ザハールに訊けば、金なら夢にも見たことがないと言つた。彼女は兄の許へ行つて、家に金が無くなつたことを明らかに言つた。

『でもお前達は千留の金を何處へ投げ飛ばして了つたんだ？俺はあの男に生活費として千留置いて來んだが。』と、兄は訊いた。『俺だつて何處から金を持つて來るんだ？お前も知てゐる通り、俺は正式の結婚を擧げるのだ。二世帯を支へて行くことは俺に出來やしない。お前はあの旦那と身分不相應の暮しをす



るがいよ。」

「兄さん、あなたは何うしてあの旦那のことで私を御責めになるのですか？」と、アガフィヤは言った。「あの人は何をあなたに爲ましたか？誰にも構はずに、獨立して暮らしていらつしやるのですもの。それにあの方を家へ入れたのだつて私ぢやなくつて、あなたとミヘイ・アンドレイイチさんでせう。」

兄は妹に十留だけ遣つて、最う無いと言つた。が、後でタランチエフと二人で《事務室》で考へた揚句妹とオプロモフとを捨てるのは不利だ、シトリツが此の事情を知りでもしようものなら、彼はよく見廻はり、よく集めて何でも金目の物は皆な書き換へて了ふだらう。さうすれば貸金を取る譯に行かなくなるし、《當然の権利》も無駄になることを知つた。竟り、獨逸人は狡猾な人間だと思つたのだ。

で、兄は月々五十留づゝ妹の方へ遣り、其の金は三年目のオプロモフの収入から貰ふことにした。が、此の時彼は妹に之れ以上は最うやらないと誓つたり、食物を節儉しなけりやいけないとか、出費を減らさなければいけないなどと言つたり、何時、何んな食物を作るかを指定したり。雞鶏や、キャベツなどで何のくらの金が必要かと勘定したりして、最後に、それだけの金があれば太平樂に暮らして行けると附け足した。

アガフィヤ・マトウエーウナは生れて始めて世帯以外の事を考へた。始めて、アクーリナが器物を壊した悲みや、半煮の魚を出した爲めに兄から責られた以外に泣いた。彼女は始めて自分の前に怖ろしい貧窮な見た。其れは自分の爲めに怖ろしいのではなくして、イリヤ・イリイチの爲めに怖ろしいのであつた。

《本當に此の旦那は急に》と、アガフィヤは考へ始めた。《オランダキジカクシの代りにバター揚げた燕や、樹鷄の代りに山羊の肉や、ガツチンの鱒や、琥珀色の鱒魚の代りに鹽漬にした鱒魚や、店から買った煮凝などを召し食するやうになつたわ……》

怖ろしい事だ！アガフィヤは終まで考へずに、急いで衣服を着換へ、車夫を雇つて、復活祭や降誕祭でもないのに夫の親戚に泊りがけて行き、朝早く、心配さうな妙な聲で、金が無いから何うしたらいいだらうとか、金を貸して貰へないだらうかなど、訊いた。

親戚には金は澤山あつた。で、金がイリヤ・イリイチの爲めに要るのだと云ふことが分ると、直ぐに貸して呉れた。若し之が珈琲や、茶や、子供達の衣服や、靴や、其他の必需品などを買ふ爲めに自分に入用な場合なら、アガフィヤは吃らなかつたが、其れが身を切るやうな窮乏の爲め、竟り、イリヤ・イリイチの爲めにオランダキジカクシを買つたり、ピフテキに樹鷄を入れる爲めであつたりする時は、非常に吃りながら、あの方はフランスの小豌豆がお好きなんですものと言ふのであつた。

けれども親戚の者は吃驚してアガフィヤに金を貸さず、若しイリヤ・イリイチに何か品物があるなら、たとへ金製の物でも銀製の物でも構はないし、又、毛皮でも構はないから質に入れて了へ、再た村から金が来るまで要求の三分の一で賄ふやうなお人好が何處にあるものかと言ふこともあつた。

此の實際上の學問は他の時なら腕利の主婦の上を、其の頭にも解らないやうに飛び去つて了ふし、何んな方法を持ちかけられても、オプロモフは彼女を納得させることが出来ないのだが、此の場合、彼女



は自分の心を知つてゐたし、種々な事を考へてゐたので……自分が嫁入の時に持つて来た眞珠を質に入れた。

イリヤ・イリイチは別段不思議とも思はずに翌る日にはスグリ製の火酒を飲んだり、上等の鮭を食べたり、好きな腸詰や、白くつて新らしい樹鶏などを食べたりした。アガファイヤ・マトウェーウナは子供達と一緒に粗末な吸物や粥などを食べ、たゞイリヤ・イリイチと一緒に二盃ばかりの珈琲を飲むだけであつた。

彼女は眞珠の次に程なく自分の手箱から飾釦を出し、次に銀製の品物を出し、更に外套までも持ち出した……

時期になつて村から金が来た。オプローモフはそれを皆なアガファイヤに渡した。アガファイヤは眞珠を質受し、飾釦と、銀製の品物と、毛皮との利子を拂ひ、そして再びイリヤにオランダキヂカクシヤ、樹鶏などを御馳走し、彼の前だけで珈琲も飲んで體裁を繕つた。が、眞珠は程なく再び以前の場所へ入つて了つた。

日は日に次ぎ、週間は週間に重なるに従つてアガファイヤの努力と苦痛と心配とは極度に達した。シヨールも賣れば、晴衣も賣つた。そして自分は毎日眩の出る更紗の平常着だけを着てゐた。日曜日には散散に使ひ古した三角布で頸を巻いてゐた。

彼女が驚れたのも之が爲めであつた。彼女の眼が凹んだのも之が爲めであつた。それから彼女自身が

イリヤ・イリイチの許に朝飯を持つて来るのも之が爲めであつた。

オプローモフがアガファイヤに明日私の許にタランチェフと、アレクセイと、イワン・ゲラシモウイチとが来るなど、言つた時でさへ、彼女は楽しさうな顔附をする元氣を失はなかつた。美味い淡泊した晝餐が供へられた。アガファイヤは主人に恥をかゝせなかつた。が、其の代り、彼女は何のくらの心配したり走せ廻つたり、店を訊いて歩いたりしたか知れやしない。夜も碌に眠れなかつた。斯うした働きを思ふと彼女は泣かずにゐられなかつた！

アガファイヤは突然に生活の苦痛の中に深く投げ込まれ、生活の幸福な日と不幸な日とを知ることが出来た！が、彼女は涙と苦痛と、心配との満ちてゐる此の生活を愛してゐた。彼女は、まだオプローモフを知らなかつた時分に、意り一盃に中身の入つたヂュクと鳴る焼鍋や、揚鍋や、煮壺などの間に居つてアクリリナや屋敷番などに指圖をしたり、言ひ附けたりした以前の靜かな生活の流れに、今の生活を換へたくなかつた。

アガファイヤは突然に死のことを想うた。死は彼女の乾く間もない涙と、毎日の奔走と、毎晩の不眠とに一思ひの終りを與へるものであつた。けれども彼女には身慄を覺える程怖ろしかつた。

イリヤ・イリイチは朝食を食ひ、マーシヤに佛蘭西語の稽古をしてやると、直ぐにアガファイヤ・マトウェーウナの室へ行つて腰掛けた。そして彼女が、ワーニカの表衣を十遍くらゐ彼方此方と反しながら繕つてゐるかと思ふと、直ぐに料理屋へ駈けて行つて、晝餐の山羊の肉を何んに焼いてゐるかとか、羹を煮る



時分ではないかなど、見廻はすのを見てゐた。

『何うしてあなたは始終忙がしくしていらつしやるのです？』と、オブローモフは訊いた。『少しは凝つと  
してゐたら何うです！』

『私がしなければ、誰が世話を焼いて呉れますか？』と、彼女は言つた。『補布當はしばらく止めて、羹  
を煮ませう、此のワーニヤは何と云ふ悪戯な子でせう！此の週間に新らしく表衣を繕つてやつだのに、  
——再た引き裂いて了つたのですよ！何を笑つてゐるの。』と、彼女は卓子の傍に腰掛けてズボンと襯衣  
だけを着てゐるワーニヤの方へ向いて言つた。『最う朝まで繕つて上げないよ。最う門の外へ駈け出して  
はいけません。吃度子供達に破られるのです。喧嘩をしたのでせう——さうでせう？』

『お母さん、さうぢやないんです。之は自で裂けたんです。』と、ワーニヤは言つた。

『自で裂けることがあるものですか！家にゐて、勉強してゐなさい。何しに街道へなんか駈け出すので  
す！でないと、再たイリヤ・イリイ・チさんが、お前は佛蘭西語が下手だとおつしやるよ——私が靴を  
脱がせてあげよう。さうすれば仕方なしに勉強するでせうから！』

『私は佛蘭西語を勉強するのが厭だ。』

『何うして？』と、オブローモフは訊いた。

『佛蘭西語には厭な言葉が澤山あるから……』

アガフィヤ・マトウエーウナは眞赤になつた。オブローモフはハツ、ハツ、ハツと笑つた。多分今迄（厭な

言葉』の話をしたことが無かつたらしい。

『これ、馬鹿、何を言ふの、』と、アガフィヤは言つた。『それより鼻でもお拭きなさい。自分で分りま  
せんか？』

ワーニユシヤはフンと鼻をかんだが、鼻を拭かなかつた。

『も少し、村から金が來たら、私はワーニヤさんに衣服を二組作へて上げませうね。』と、オブローモ  
フは口を入れた。『青い色の表衣と、來年の爲めに正服をね。來年は中學校へ入るのだから。』

『まだ古いのを着てゐますから。』と、アガフィヤ・マトウエーウナは言つた。『お金は世帯の方に要ります  
わ。お鹽も買はなけりやありませんし、あなたの召し上るジヤムも煮なけりや……アニシヤが酸乳皮を  
持つて來たか何うか行つて見て來ませう……』

アガフィヤは起ち上つた。

『今、何を作へていらつしやるのです？』と、オブローモフは訊いた。

『エルシ（魚）の羹と、山羊の焼肉と、蒸麩麩と。』

オブローモフは黙つた。

と、突然に馬車が來たと思ふと、誰か木戸を敲いた。犬の鎖の音と、吠聲とが聞え始めた。

オブローモフは我に歸つて、誰か主婦の許へ來たのだと思つた。肉屋か、青物屋か、或は其れ等に似  
寄つた人物が來たのだと思つた。斯んな人が來ると、吃度始まるのは、金の催促、主婦の斷り、商人の嚇



し文句、も少し待つて呉れと言ふ主婦の哀願、怒罵、扉や木戸がパタンと閉る音、犬の絶望的な吠聲、鎖の音などで――皆な不快な場面である。が、馬車が来た――何だらう？肉屋や青物屋が馬車に乗つて来る筈はない。

と、俄かに主婦が吃驚したやうな顔附をしてオプローモフの許へ駈けて来た。

『お客さんですよ！』と、彼女は言つた。

『誰ですか？タランチエフですか、それともアレクセイ君ですか？』

『いゝえ、いゝえ、あれ、あのイリヤの記念日に晝餐を食つたでせう。あの方』

『シトリツ君が？』と、オプローモフはどきまぎしながら言つて、何處か隠れる處はないかと周囲をきよとく〜と見廻した。『あゝ！彼は何と言ふだらう。何んなに吃驚するだらう……私は出て行つたと言つて下さい！』と、彼は狼狽して附け加へて、主婦の室へ逃げ込んだ。

アニシヤは直ぐに客を迎へに行つたが、アガフィヤ・マトウエーウナは彼女にオプローモフの言ひ附けを傳へた。――シトリツはアニシヤの言葉を信じたが、オプローモフが家にゐないと云ふとに驚いた。

『ちや、二時間ばかりして来て、晝餐を食べるからと言つて呉れ！』と、シトリツは言ひ置いて、近くの公園へ行つた。

『晝餐を食べるつて！』と、アニシヤは吃驚して傳へた。

『晝餐を上るんですつて！』と、アガフィヤ・マトウエーウナも怖しさうにオプローモフに繰り返した。

『何時もと違ふ晝餐を仕度して貰はなかりやなりませんね。』と、オプローモフは暫く黙つてゐた後で言つた。

アガフィヤは恐怖に満ちた眼をオプローモフに向けた。彼女は皆なで五十哥しか有つてゐなかつた。そして之れだけで一日に兄から金を貰ふまづ間に合せて行かなければならなかつたのだ。しかも一日までまだ十日もあつた。かと云つて誰も貸して呉れる者もなかつた。

『イリヤ・イリイ・チさん、とても出来ませんわ。』と、アガフィヤは慄々と言つた。『有り合せの物で上つて戴かねば……』

『アガフィヤ・マトウエーウナさん。シトリツはそんな物を食べたいのですよ。羹も我慢が出来ないでせうし、ステルヤー・ジの羹でさへ食べないのです。山羊の肉なんか口へも入れやしません。』

『腸詰屋へ行つて舌を買つて参りませう！』と、突然に思ひ附いたやうにアガフィヤは言つた。『すぐ其處にありますから。』

『それは結構です。それなら食べます。それに新しい野菜と豆とを買つて下さい……』

『豆は一升が八十哥もします！』と、アガフィヤは喉まで言ひかけたが、舌には出なかつた。

『よう御座います、買つて來ますわ……』と、彼女は言つた。キヤベツと豆とを換へようと決めたのだ。

『スウキツル製の乾酪も一斤買つて下さい！』と、オプローモフはアガフィヤ・マトウエーウナの胸の中も知らずに指圖した。『それで澤山です！突然でと、都合よく謝つて置きますから……だが、若し肉煎汁



でも買へたら。』

アガフィヤは出て行つた。

『それに、酒は？』と、オプローモフは想ひ出して言つた。

アガフィヤは再た恐怖に満ちた眼附をして答へた。

『上等の酒も買はせなけりやならない。』と、オプローモフは平氣で言つた。

六

二時間経つとシトリーツが來た。

『君、何うしたんだ？ 酷どく變つたね、少し脹れてるし、着いよ！ 健康かね？』と、シトリーツは訊いた。

『アンドレイ君、何うも身體がよくない。』と、オプローモフは彼を抱きながら言つた。『左の足が何うし

たのか何時も癱痺るんだ。』

『何うして君の室は斯んなに汚ないのだ！』と、シトリーツは周圍を見廻しながら言つた。『君は何うして此の夜着を棄てないんだ？ 見給へ、すつかり襪樓々々ぢやないか！』

『アンドレイ君、慣れて了つたんだ。別れるのが辛いのだよ。』

『蒲團も、慕も……』と、シトリーツは言つた。『矢張り慣れたのかね？ 此の雑巾のやうな物を換へるのが辛いのかね？ 冗談ぢやない、君はよく斯んな蒲團の上で眠れるねえ？ 一體君は何うしたんだ？』

シトリーツは凝つとオプローモフを見てゐたが、やがて再た窓掛と蒲團とを見た。

『別段何うも爲ないさ。』と、オプローモフはどきまぎしながら言つた。『君の知つてる通り、僕は何時も自分の室のことを餘り氣にしないからね……それよりか、さア、晝餐でも食べよう。おい、ザハール！ 速く仕度をしろ。で、君は長く滞在するのかね？ 何處から來たんだね？』

『僕が何處から來たと思ふね？』と、シトリーツは訊いた。『君の許へ生きた世界から報知が來なかつたかね？』

オプローモフは不思議さうにシトリーツを見て、彼が何を言ひ出すかと待つてゐた。

『オリガさんは何うしてゐるだらうね？』と、オプローモフは訊いた。

『忘れてゐなかつたね！ 君は最う忘れて了つたことと思つてゐたよ。』と、シトリーツは言つた。

『アンドレイ君、忘れやしないよ。何うしてオリガさんを忘れることが出來よう！ オリガさんを忘れることは、僕が嘗て樂園に生活してゐたことを忘れることなんだ……が、今は此の通りだ……』

オプローモフは溜息を吐いた。

『だが、オリガさんは何處にゐるんだね？』

『自分の村で世帯を有つてゐるよ。』

『叔母さんとかね？』と、オプローモフは訊いた。

『亭主とさ。』



「オ리가さんは結婚をしたんだね？」と、オプローモフは俄に眼を見張つて言った。

「何うして君は吃驚するんだ？ 想ひ出したんぢやないか……」とシトリツは靜かに優しく附け加へた。

「君、何を言ふんだ！」と、オプローモフは我に歸つて辯解した。「僕は吃驚しやしないが、愕いたよ。

何うしてオ리가さんの結婚が僕を刺戟したか分らないがね。疾くにかね？ 幸福に暮してゐるかね？ 何う

か聞かせて呉れ給へ。僕は君から重荷を除けられたやうな感じがする！ 君は僕にオ리가さんが謝罪つて

ゐたと言つたが、君……僕はとても安心出来なかつたんだ！ 何時も何か僕を苦しめてゐたよ……アン

ドレイ君、僕は君に何のくらの感謝してゐるか知れない！」

オプローモフは心から喜んで、自分の長椅子の上で跳ねたり、身動したりした。シトリツは其の様

子に見惚れてゐたが、酷く感動させられた。

「イリヤ君、君は實に立派な人物だ！」と、シトリツは言つた。「君の心はオ리가さんを何のくらの喜

ばせるか知れない。僕はすつかりオ리가さんに話をするよ。」

「いや、いや、言はないで呉れ給へ！」と、オプローモフは遮つた。「オ리가さんは僕が彼の女の結婚を

喜んだと聞いたたら、僕を無感覺な人間だと思ふから。」

「でも喜びは矢張り感情ぢやないか。しかも利己主義のない感情ぢやないか？ 君はオ리가さんの幸福の

ことばかり喜んでゐるのだもの。」

「さうだ、さうだ！」と、オプローモフは遮つた。「僕は實際、心配してゐる……が、誰だね、其の幸福

な人と云ふのは誰だね？ 僕はまだ訊かなかつたねえ？」

「誰だらう？」と、シトリツは繰り返した。「イリヤ君、君は察しが悪いね。」

オプローモフは俄に自分の友に凝つと眼を据ゑた。彼の顔附は一寸の間凍つたやうになつた。血色も

彼の顔から消えた。

「君、君ぢや……ないかね？」と、オプローモフは俄かに訊いた。

「再た吃驚したね！ 何うしたんだ？」と、シトリツは笑ひながら言つた。

「アンドレイ君、冗談を言はずに、眞實の事を言つて呉れ給へ！」と、オプローモフは胸をわく／＼さ

せながら言つた。

「本當に冗談ぢやない。去年僕はオリガと結婚したんだ。」

オプローモフの顔に現はれた驚愕は次第に消えて、平和な黙想に變つた。オプローモフはまだ眼を上

げなかつた。が、彼の黙想はやがて靜かな深い喜びに滿された。彼が徐かにシトリツを見た時など、

彼の眼には最う感動と涙とが輝いてゐた。

「アンドレイ君！」と、オプローモフはアンドレイを抱きながら言つた。「愛らしいオリガさん……セル

グーウナさん！」やがて彼は感激を壓へて斯う附け足した。「君達は神様に祝福されたのだ！ あゝ僕は何

と云ふ幸福な人間だらう！ オリガさんに言つて呉れ給へ……」

「オプローモフは以前の通りだと言はう！」と、シトリツは深い感激に打たれて言つた。



「いや、斯う言つて呉れ給へ。僕はオリガさんを人生の行路に引き出す爲めにオリガさんに會つたのだつてね。そして僕はその面會を祝福してゐるし、又、オリガさんの新たな行路を祝福すると言つて呉れ給へ！若し君でなくつて他の人だつたら何うだらう？」と、オプローモフは怖ろしうに附け加へた。「が今、」と、彼は快活に言つて其の言葉を結んだ。「僕は自分の役目を恥かしいとも思はなければ、悔いもしない。心の重荷が落ちたやうだ。前途が光明になつた。僕は幸福になつた。あゝ！君に感謝する！」オプローモフは長椅子の上で感激の餘りに再たも身體を躍らせながら、涙ぐんだり、笑つたりした。「ザハール、書齋にシャンペンを持つて来い！」と、オプローモフは自分には一文も無いことを忘れて叫んだ。

「すつかりオリガに言ふよ、すつかり！」と、シトリーツは言つた。「オリガが君を忘れ得ないのも無理はない。いや、君はオリガに取つて尊い者なんだ。君の心は井戸のやうに深い！」

ザハールの頭が玄關の室から現はれた。

「何うか一寸此處へ！」と、ザハールは主人に胸をしながら言つた。

「何の用事があるんだ？」と、オプローモフはもどかしうに訊いた。「彼方へ行け！」

「何うかお金を！」と、ザハールは囁いた。

オプローモフは急に黙つた。

「よし、要らない！」と、オプローモフは扉口へ行つて囁いた。「買ふのを忘れたと言へばいゝ、彼方へ

行け！……いや、此方へ来い！」と、オプローモフは大聲に言つた。「ザハール、お前は珍らしい事を知つてゐるか？お祝ひを言はなけりやいけないぞ。アンドレイ・イワヌイチ君は結婚したんだ！」

「さうですが、且那樣！何てえ喜ばしい事で御座りやすべえ！且那樣、アンドレイ・イワヌイチ様、お祝ひ申しやすだ。何時までも何時までも長命をなされて、お家が繁昌するのを祈りやす。あゝ、河てえ喜ばしい事で御座りやすべえ！」

ザハールはお辭儀をしたり、莞爾々々したり、嘆れ聲を出したりした。シトリーツは一枚の紙幣を出してザハールに遣つた。

「さ、之をお前に遣る。上衣でも買ふがいゝ。」と、シトリーツは言つた。「見ろ、お前は宛然乞食のやうだ。」

「且那樣、誰と結婚なされた？」と、ザハールはシトリーツの両手を握りながら訊いた。

「オリガ・セルゲーウナさんとだ——知つてるか？」と、オプローモフは言つた。

「あの、イリインスキイ様のお嬢様と！あゝ！何てえ立派なお嬢様でやすべえ！だからイリヤ・イリイチ様はあの時、老老犬だと言つて俺を怒鳴らつしやつたな！俺、悪う御座りやした、何時もお前様を疑つてねえ。俺、其の時分、イリインスキイ様の人達に言ひやした。が、ニキータの奴！妄言は確か其處から出たのがすよ。あゝ、あの野郎、あゝ！……」

「オリガは君に村へお客に来て呉れと言つてゐたよ。君の愛は最う消えたらうし、危険なことはない、



嫉妬はしないだらう。一緒に行かう。』

オプローモフは溜息を吐いた。

『いやだ、アンドレイ君、』と、オプローモフは言った。『僕は愛や嫉妬を怖れやしない。が、然し君等の許へは行くまい。』

『君は何を怖れてゐるんだ？』

『羨望心を怖れるんだ。君達の幸福は僕に取つて鏡だからね。それに僕の苦しい亡びた生活が映るのだが、僕は何うせ之れ以外の事を爲やしないし、又出来ないのだ。』

『イリヤ君、澤山だ！君も君の周囲に生活してゐる人間のやうに、元氣よく生活するやうになるよ。勘定をしたり、世帯の事を考へたり、書物を読んだり、音楽を聞いたりするやうになるよ。オリガの聲は今、非常に良くなつてゐる！君は *Casta Diva* を憶えてゐるだらう？』

オプローモフは其の事を言つて呉れると言ふやうに手を振つた。

『行かうよ。』と、ストーリーリツは執拗く言つた。『オリガの希望なんだ。彼女は元氣がいゝ。僕は疲れても彼女は疲れることがない。宛然火だね。彼女のやうな生活はとも一分間だつて僕に得られやしない。君の心の中に再た過去が動き出し、公園や、連翹などが憶ひ出され、君の活動が始まるのだ……』

『いや、アンドレイ君、何うかそんなことを言つて僕を動かさないで呉れ給へ！』と、オプローモフは眞面目にストーリーリツの言葉を遮つた。『其れを想ふと僕は苦痛を感じる。喜ばしくない。追憶と云ふ奴は

——其れが生々した幸福の追憶であれば、偉大な詩だ。が、其れが乾いた古傷に關するものであれば、焼くやうな苦痛だ……他の話をしよう。さうだ、僕はまだ僕の仕事、僕の村に就いての君の配慮に對して御禮を言はなかつたね。君！僕には其の御禮が出来ないのだ。其れをする力がないのだ。だから君自身心の中心に、君の幸福の中に、オリガさん……セルゲーウナさんの中にお禮を索めて呉れ給へ。僕は……僕は……出来ない！そして僕が今迄君に散々心配をかけたことを赦して呉れ給へ。けれども程なく春になるから、屹度僕はオプローモフカへ行くよ……』

『君、オプローモフカが何んなになつたか知つてゐるかね？さうだ、君は知らない筈だ！』と、ストーリーリツは言つた。『君が返事を呉れないから君には知らせなかつたがね、橋は出来るし、家は夏の中に屋根を葺て了ふし、たゞもう君の仕事は内部の裝飾だけだ。其れは君の趣味によることだから、僕は手を附けなかつたんだ。監督人も新らしくした、其れは僕の知人だ。君は支出報告を見たかね？……』

オプローモフは黙つてゐた。

『見なかつたらう？』と、ストーリーリツはオプローモフを見ながら訊いた。『報告書は何處へやつたんだ？』

『待ち給へ、晝餐を終つてから搜して見る。ザハールに訊いて見なけりや……』

『何だ、イリヤ・イリイチ君！笑つていゝのか、泣いていゝのか分らないぢやないか。』

『晝餐を食つてから搜すよ。まア、飯を食はう！』

ストーリーリツは卓子に向つて腰掛けると顔を擧めた。彼はイリヤの記念日の事を想ひ出した。牡蠣や、



アナナスや、小鳥の丸焼などを想ひ出した。が、今は何うだ。厚い卓布の上に酢とバターとの縞がある、それも栓の代りに紙が詰めてある。皿の上には黒麵包の大きな碎片が横はつてゐる。肉刺は柄が折れてゐる。オプローモフには羹を持つて来て、シトリーツにだけ挽割麥の入つたソップと、雛鶏の煮たのちを持つて来た。それから氣味の悪い舌と、山羊の肉とを持つて来た。酒も赤酒であつた。シトリーツは洋盃に半分ばかり注いで、少し飲んで見たが、直ぐに卓子の上に置いて最う飲まなかつた。イリヤ・イリイチは洋盃に二盃もがぶくとスグリ製の火酒を煽つて餓たやうに山羊の肉を食つた。

『不味酒だね!』と、シトリーツは言つた。

『救して呉れ給へ、あまり急なので、河向うまで行けなかつたんだ。』と、オプローモフは言つた。『何うだスグリ火酒を飲んで見ないかね? アンドレイ君、試つて見給へ、非常に美味いよ!』

オプローモフは再た洋盃に注いで飲んだ。

シトリーツは吃驚してオプローモフを見てゐたが、何にも言はなかつた。

『アガフィヤ・マトウエーウナさんの手製なんだ。偉い女だよ!』と、オプローモフは幾分ほろ酔機嫌になつて言つた。『僕は彼の女が居なけりや、村に行つても暮して行けないと思ふんだ。あんな主婦はなかなか見附かるものぢやない。』

シトリーツは少し眉に皺を寄せて、オプローモフの言ふことを聞いてゐた。

『君は、斯う云ふ食物を誰が作つたと思ふね? アニシヤかね、さうぢやないよ!』

と、オプローモフは續けた。『アニシヤは雛鶏の世話をしたり、畑でキャベツを切つたり、床を洗つたりするだけだ。之は皆なアガフィヤ・マトウエーウナが作るんだよ。』

シトリーツは山羊の肉も、煮物も食べずに、肉刺を置いて、オプローモフが何んなに餓ゑて斯んな物を食ふかと見てゐた。

『僕は最う汚れた襦衣を着てゐないだらう。』と、オプローモフは、餓ゑたやうに骨を舐りながら續けた。

『アガフィヤさんが斷えず注意して呉れるので、繕はない靴下など一足もない——皆な彼の女が遣つて呉れる。珈琲の煮方なんか巧いものだ! 今、晝餐が済んだら君に御馳走するよ。』

シトリーツは心配らしい顔附をして黙つて聞いてゐた。

『今、彼の女の兄はゐない。結婚をすると云つて此處を出たから、世帯はもう以前のやうに大きくはない。が、以前の通り、彼女は自分で何から何まで切り廻してゐる。朝から晩まで駈けづり廻つてゐる。市場には行く、宿屋には行く……ねえ君、』と、オプローモフは舌纏れしながら言つた。『僕に二三千留も呉れると、斯んな舌や山羊の肉などで君を饗應しやしないのだがね。一尾の鮭魚と、上等のフォレトリ(魚)と牛肉とを御馳走するがね。が、アガフィヤ・マトウエーウナさんが、料理人も使はないで之れだけやるから不思議だよ——實際だよ!』

オプローモフは更に洋盃に一ばい火酒を煽つた。

『さア、アンドレイ君、飲み給へ、本當に飲んで呉れ給へ。素晴らしい火酒だよ! オリガ・セルゲーウ



ナさんは君に斯んな酒を作つて呉れやしない！」と、オプローモフは曖昧な語調で言つた。「オリガさんは(Chefa diva)を唄つても、火酒を斯んなに作れやしない！雛鶏や菌の入つた斯んな肉入麴も作れやしない！オプローモフカでも斯う云ふ風に焼いたものだが、此家でも矢張り同じだ！それに良い事は、斯う云ふ物は皆な料理人が作つたのでないことだよ。料理人なんか何んな手で肉入麴を作るか知れやしない。が、アガフィヤ・マトウエーウナさん——其者が清潔だからね！」

シトリッツは耳を欬て聞いてゐた。

『彼の女の手は白いしね。』酒で酔く調子の狂つたオプローモフは斯う續けた。『接吻しても悪くはないよ、今は寢れてゐるが、それは自分で何も彼も遣るからなんだ！自分で僕の襯衣さへ洗濯して呉れる！』と、オプローモフは酷く感激して、殆んど涙を流しさうに言つた。『實際だよ、僕は自分で見たんだ。妻君だつて夫をそれ程に見て呉れやしない——本當だよ！アガフィヤ・マトウエーウナさんは實に偉い婆さんだ！あゝ、アンドレイ君！オリガ・セルゲーウナさんと一緒に此處へ来て、此處に別荘を借り給へ、面白い生活が出来よ！森で茶も飲めるし、イリインスキイの金曜日にはポロホーウイエ・ザウオドイにも行ける。車に御馳走や沸湯器を積んで行くんだ。其處へ行つたら、草の上に絨氈を敷いて寝轉ぶさ！アガフィヤ・マトウエーウナさんは、オリガ・セルゲーウナさんに世帯のことを教へるだらう。確かに教へるよ。だが、今は何うも都合が悪いんだ。彼の女の兄が引越しをしたものだからね。けれども、若し「僕等」に三四千留あると、僕は君に素晴らしい七面鳥を御馳走するんだが……』

『君には五千留も送つたぢやないか！』と、シトリッツは突然に言つた。『君は其の金を何處へやつたんだ？』

『でも借金があるんだもの。』と、オプローモフは突然口走つた。

シトリッツは、衝と立つた。

『借金？』と、彼は繰り返した。『何の借金だ？』

シトリッツは怖ろしい教師のやうに、隠れやうとする子供を見た。

オプローモフは急に口を噤んだ。シトリッツはオプローモフの長椅子に座を換へた。

『誰に借金があるんだ？』と、シトリッツは訊いた。

オプローモフは幾らか正氣になつた。

『誰にも借金してはゐない。嘘だよ。』と、オプローモフは言つた。

『いや、今こそ君は嘘を言つてゐる。其んな下手な嘘を言つても直ぐに分る。何事が起つたんだ？君は何うしたのだ？イリヤ君、おい！此の山羊の肉と、酔い酒とは何だ！君には金が無いんだ！君は金を何處へ遣つたんだ？』

『確に借金してゐる……少しばかり主婦に、食費の方……』と、オプローモフは言つた。

『山羊の肉や、舌の爲めに！イリヤ君、君は何うしたんだ？何う云ふ事情があるんだ？主婦の兄が引越したら、世帯の都合が悪くなる……其處に何か譯があるのだらう。君は幾千借金してゐるんだ？』



『借用證によると一萬留ある……』と、オブローモフは囁いた。

シトリーツは衝と立つて、再た腰掛けた。

『一萬留？主婦に？食費として？』と、シトリーツは吃驚して繰り返した。

『種々な物を買ひ込んだり、餘り贅澤に暮したから……あの通り、アナナスや桃なんかをね……だから借金したんだよ……』と、オブローモフは呟いた。『だが、何うしたらいいだらうねえ？』

シトリーツは彼に答へなかつた。『主婦の兄が引越をしたので、世帯の都合が悪くなる——確かにさうらしい。何も彼も粗末で、汚ない！主婦と云ふのは何んな女だらう？オブローモフは彼女を讀めてゐる！彼女もオブローモフを面倒見てゐるらしい。オブローモフは、主婦の話になると躍起になるから……』と考へた。

俄かにシトリーツは正體を捉へて顔色を變へた。彼は全身が戦慄するのを感じた。

『イリヤ君！』と、シトリーツは訊いた。『其の女と云ふのは……彼の女は君と何んな關係があるんだね？……』

が、オブローモフは卓子に頭を載せて居睡つてゐた。

『彼女はオブローモフを掠奪してゐるのだな……有り勝の事情だ。今迄俺は氣が附かなかつた！』と、シトリーツは考へた。

シトリーツは立ち上つて、急いで主婦の室の扉を開けた。主婦は彼を見て、吃驚して珈琲を掻き廻し

てゐた匙を取り落した。

『私はあなたに御話したいことがあるのですがね。』と、シトリーツは慇懃に言つた。

『何うか客間の方へいらして下さいませ。私、直ぐに参りますから。』と、アガフィヤは慇懃と答へた。

彼女は頸に三角布を引つ掛けて、シトリーツの後から客間へ入り、長椅子の端に腰掛けた。彼女は最うシヨールを有つてゐなかつた。彼女は頻りに両手を三角布の下に隠さうとしてゐた。

『イリヤ・イリイチ君はあなたに借用證を上げましたか？』と、シトリーツは訊いた。

『いゝえ。』と、彼女は吃驚して眼を鈍よりさせながら答へた。『何の證書も頂きません。』

『何の證書も？』

『私は何の證書も見ませんですよ！』と、彼女は前のやうな鈍よりとした驚きを現はして言つた。

『借用證ですよ！』と、シトリーツは繰り返した。

彼女は暫く考へてゐた。

『あなた、何うか兄に御話し下さいませんか。』と、彼女は言つた。『私は何の證書も見ませんのですから。』  
『何と云ふ狡猾な女だらう？何と云ふ詐僞女だらう？』と、シトリーツは思つた。

『けれどもオブローモフはあなたに借金してゐますか？』と、シトリーツは訊いた。

彼女は鈍よりとシトリーツを見てゐたが、やがて其の顔は急に意味ありげな色を浮べて、驚愕さへ現はした。彼女は質に入れた眞珠や、銀の器や、外套のことなどを憶ひ出して、シトリーツが此の借金の



ことを仄かすのだと考へた。が、たゞ彼女は此の秘密をオブローモフには無論のこと、一錢でも金を出した時には報告をしておくアニシヤにさへ一言も漏さないのに、何うしてシトーリツが此の事を知ったかが何うしても分らなかつた。

『オブローモフは幾千あなたに借金があるのです?』と、シトーリツは不安らしく訊いた。

『借金なんかありませんわー一文だつて!』

〔此の貪慾な詐偽女奴、俺の前に隠すんだな。矢張り恥かしいのだらう!』と、シトーリツは思つた。〔が俺がすつかり暴露してやる。〕

『でも、一萬留借金してゐるさうぢやありませんか?』と、シトーリツは言つた。

『一萬留? 何うして?』と、彼女は吃驚して訊いた。

『イリヤ・イリイチ君は、借用證に囚ると一萬留あなたに借金してゐるさうですが——さうですか、何うなんです?』と、シトーリツは訊いた。

『あの方には一文も御貸しやしません。肉屋に十二留五十哥の借金がありました。其れは最う第三週間の中に拂つてお了ひになりましたし、牛乳屋の乳漿代も矢張りお拂ひになりました——で、あの方には少しも借金は無いんで御座います。』

『ぢや、あなたの許には、オブローモフの證書は無いのですか?』

彼女は鈍よりとシトーリツを見た。

『何卒兄と御話し下さいませんか。』と、彼女は答へた。『兄は此の街道の向うのザムイカロフの家に居ります。あれ、彼處です。家の中にはまだ酒店もあります。』

『いや、あなたと御話したいのです。』と、シトーリツはきつぱりと言つた。『イリヤ・イリイチ君はあなたの兄さんぢやなく、あなたに借金があるのだと言つてゐますから……』

『オブローモフさんは私に借金などしてはいらつしやいません。』と、彼女は答へた。『尤も私は銀の器や眞珠や、毛皮などを質に入れて居りますが、それは自分の爲めに質に入れましたので、マーシヤと自分の爲めに靴を買つたり、ワニューシヤに襯衣を買つてやつたり、青物屋に拂をしたりしましたので、が、イリヤ・イリイチさんには一文も御貸しません。』

シトーリツはアガフィヤを見ながら聞いてゐた。彼は彼女の言葉の意味を呑み込んだ。たゞ彼一人がアガフィヤ・マトウェーウナの秘密に對して近い推察を下すことが出来るやうになつたらしい。彼がアガフィヤと話をする時に彼女に向けてゐた輕蔑と猜疑との眼は、知らず識らずのうちに好奇心と同情との眼に變つた。

眞珠や銀の器などを質に入れたと云ふことを聞いて、其の中にシトーリツは幾分茫然と犠牲の秘密を讀んだ。が、たゞ彼女が純潔な心服から犠牲を捧げてゐるのか、それとも將來の幸福を希望してやる仕事かと云ふことを決めることだけは出来なかつた。

彼にはイリヤの爲めに悲しんでいゝのか、喜んでいゝのか分らなかつた。たゞ、オブローモフがアガ



「ファイヤから金を借りてゐないと云ふことと、此の借金は彼女の兄の詐偽であることだけは明かになつた。従つて其の外の種々な事情も分つて来た……が、銀の器と眞珠との入質は何を意味してゐるのだらう？」  
「ぢや、あなたはイリヤ・イリイチ君に對して何の権利も有つていらつしやらないのですね？」と、シトリツは訊いた。

「御面倒でも、何うか兄と御話し下さいませんか。」と、彼女は單調に答へた。「今、兄は家に居る筈で御座いますから。」

「イリヤ・イリイチ君は、あなたに借金は無いのですか？其れを御話し下さい。」

「確かに一文も御座いません！」と、彼女は聖像を見て十字を切りながら誓つた。

「あなたは證人の前で其の誓をなさいますか？」

「誰の前でも、痛悔機密を受ける時でも構ひません！そして「眞珠」と銀の器と質に入れましたのは私の責任になつて居ります……」

「分りました！」と、シトリツは彼女の言葉を遮つた。「明日、私は二人の知人を連れてあなたの許へ來ますが、あなたは其の二人の前で今おつしやつた通りに言つて下さるでせうね？」

「兄と御話しなすつた方が宜しう御座いますわ。」と、彼女は繰り返した。「私は餘り酷い服装をしてゐますから……何時も料理部屋にばかりゐるのですから。人様に見られるのは厭で御座います。何と思はれるか分りませんもの。」

「大丈夫です、大丈夫です。あなたのお兄さんには明日、あなたに證明書に署名して戴いてから御目にかゝります……」

「書くことなら、私はすつかり忘れて了ひましたから。」

「なに、一寸お書きになればいゝのです。皆なで二行ばかり。」

「いゝえ、何うか赦して下さいまし。ワニユーシヤの方が反つてよく書きます。彼なら綺麗に書きます……」

「いけません。貴女に是非書いて戴かなければならないんです。」と、シトリツは頑固に言つた。「若しあなたが證明書に署名なさらなければイリヤ・イリイチ君は貴女に一萬留の借金をしてゐるのです」「いゝえ、あの方の借金なんか少しもありません、一文もありません。」と、彼女は言つた。「本當ですよ」「そんなら、あなたは證明書に署名なさらなければなりません。失禮します。明日御目にかゝります。」「明日、兄の許へいらして下さい……」と、彼女はシトリツを見送りながら言つた。「此の街道を越すと、直ぐ彼方ですから。」

「いけません。で、あなたに御願して置きますが、私が來たことをお兄さんに御話しなさらなくて下さい。でないとイリヤ・イリイチ君が非常に迷惑しますから……」  
「そんなことを私は申しませんわ！」と、彼女は從順に言つた。



翌る日、アガファイヤ・マトウエーウナは、オプローモフに對して何等金錢上の權利を有つてゐないと云ふ證明をシトリツに與へた。シトリツは此の證明書を持つて突然に彼女の兄の前に現はれた。

之れは、イワン・マトウエーイチに取つて實に落雷のやうであつた。彼は證書を出し、右手の中指をぶる／＼と慄はせながら、爪を下に向けてオプローモフの署名と、公證人の證明とを指差した。

『此の通り正當なものです。』と、彼は言つた。『が、之は私の事ではありません、私はたゞ妹の利益を保護してゐるだけです。で、何んな譯でイリヤ・イリイチさんが金をお借りになつたかは、私に分りませんのです。』

『此の事は此のままにしては置けませんからね。』と、シトリツは歸りがけに彼を嚇した。

『正當な事なんです。が、私が關係したことぢやありません!』と、イワン・マトウエーイチは兩手を袖の中に隠しながら辯解した。

翌る日、イワンが役所に行つた時、丁度、給仕が來て、至急彼に來いと云ふ所長の命令を傳へた。

『所長の許へ!』と、役人達は皆な怖ろしきうに繰り返した。『何だ? 何事だ? 何か再た仕事をさせるのぢやないか? 本當に何だらう? 速く行き給へ、速く行き給へ! 事務の彌縫をするのだらうか、調査をするのだらうか、何んだらう?』

其の晩、イワン・マトウエーイチは蒼くなつて(事務室)へ行つた。タランチェフは最ら疾くから其處で彼を待つてゐた。

『君、何うしたんだ?』と、タランチェフはもどかしさうに訊いた。

『何だらう!』と、イワン・マトウエーイチは單調に言つた。『君は何だと思ふね?』

『何だい、嘘を吐いたんぢやないかね?』  
『嘘を吐いたつて!』と、イワン・マトウエーイチは罵るやうに言つた。『一層のこと、白狀した方がいよいよが、お前には心配はないさ!』と、彼は罵つた。『何うしてあんな獨逸人だと言つて呉れなかつたんだ?』

『僕は君に、彼奴は狡猾な男だと言つたぢやないか!』

『狡猾な男くらゐではしようがない。狡猾な男くらゐなら僕等も見抜いてゐたんだ。君は何故、奴が勢力家だと云ふことを言はなかつたんだ? 彼奴と將軍とは、僕と君とのやうに、お互に「君」と云つて話しをしてゐる。僕は其んな奴と知つたら、手出しをするんぢやなかつたんだ!』

『でも正當な事ぢやないか!』と、タランチェフは反對した。

『正當な事だよ!』と、ムホヤーロフは再た罵つた。『だが、彼處へ行つて言つて見給へ。舌が喉へ粘附いて了ふ。所長が僕に何と訊いたと思ふんだ?』

『何と訊いたね?』と、タランチェフは不思議さうな顔をして訊いた。



「(あなたは、或る悪人と一緒にオプローモフと云ふ地主に酒を飲ませ、あなたの妹の名宛にして彼に借  
用書を署名させたさうだが、本當ですか?)」

「(悪人と一緒に)と言つたのだね?」と、タランチェフは訊いた。

「さうだ、さう言つた……」

「其の悪漢と云ふのは誰だらう?」と、タランチェフは再た訊いた。

イソンはタランチェフを見た。

「そんなにびく／＼するなよ。知らない筈はないんだから。」と、イワンは憎々しきさうに言つた。「それは  
君ぢやないかね?」

「何うして僕を連累者にするのだ?」

「獨逸人、いや、君の同郷人に御禮を言つて置き給へ。野郎、すつかり嗅ぎつけて、訊き質して了つた  
んだ……」

「君、君は他の者を引き出して、僕は其處にゐなかつたと言つて呉れるといふんだ!」

「なに!君は口を拭つてゐようと言ふのだね!」と、イワンは言つた。

「君は、所長から(あなたは或る悪漢と一緒に……)と訊かれた時、何と答へたんだ? 其の答へ方によ  
つて切り抜ける事が出来るんだが。」

「切り抜ける? 勝手に切り抜けるがいゝさ! が、あんな着い眼で睨まれちや堪らないからね! (そんな

ことはありません、閣下、それは讒言で御座いませう。私はオプローモフなんて言ふ人を知らないの  
です。そんな事を爲したのはタランチェフで御座いませう!……)と、餘程言つてやらうと思つたが、何う  
しても舌から出ないんだ。で、とうと彼の脚下にひれ伏して了つたさ。」

「なに、奴等は何事か謀んでゐるのだつて?」と、タランチェフは微かに訊いた。「僕は關係しないの  
からね。皆な君だ……」

「關係しない! 君は關係しないと云ふのだね? そんな事があるものか。若し繩がかゝる時は君の方が先  
だよ。誰がオプローモフに飲ませたんだ? 誰が囁いたり、嚇したりしたんだ?……」

「君が教へたんだ。」と、タランチェフは言つた。

「が、君は未定年者かね? 僕は何にも知らないし、又、何にも言やしない。」

「其れは君、餘り良心の無い言ひ方だよ! 僕の手から何のくらゐ君に渡つたと思つてるのだ。僕は皆な  
で三百留しか取りやしないよ……」

「何を言ふんだ、君は一人で皆な取つて了ふと云ふのだね? 君は狡猾な男だ! いや、僕は何にも知らな  
い。」と、イワンは言つた。「たゞ、妹は女だから事情を知らないで、證書を公證人のところへ持つて行つて  
呉れと僕に言つたゞけだ——それだけだ。君とザチールツイとが證人なのだから、君達が責任を受け  
なければならぬ。」

「君は妹によく言ひ附けて置くから、妹が何うして君に逆へるものか?」と、タランチェフは言つた。



『妹は——馬鹿だもの、彼女を相手に何が出来ると思ふ?』

『妹は何うしたんだ?』

『何うした?泣いてゐるよ。そして頑固に(イリヤ・イリーチさんは借金なんかしてゐない!又、自分も彼の人に一文だつて金を貸しやしない。)と言つてゐるさ。』

『其の代り、君は妹から證書を取てゐるだらう。』と、タランチェフは言つた。『君はそれを落しやしないか……』

ムホヤーロフは衣匣から姉の借用證を出し、其れをずたくに引き裂いてタランチェフに渡した。

『さア之を君に遣らう。欲しくないか?』と、彼は附け足した。『彼女から何を取るんだ?家と菜園かね?千留にも賣れやしない。すつかり壊れて了つてゐる。あゝ、僕は何と云ふ無情な兄だらう?君は彼女を子供と一緒に粗食させるのかね?』

『何か方法はないかね?』と、タランチェフは怩々と訊いた。『さうすれば、君、幾らか安くて済むよ。君、最う助かつたやうなものだ。』

『何んな方法だね?方法なんかあるものか!所長は街から追ひ出すと言つて嚇すし、獨逸人は肩を入れてオブローモフを助けようとするしき。』

『君、何うしたんだ!肩の重荷が落ちたやうなものだ!飲まう!』と、タランチェフは言つた。

『飲まう?誰が拂ふのだ?君は拂つて呉れるかね?』

『君が拂つて呉れりやいゝぢやないか。今日君は一留銀貨を七枚も貰つて來たらう。』

『何を言んだ!収入の路は絶えたんだよ。所長が然う言つてゐた。僕は何とも言はなかつたがね。』

『何だつて?』と、タランチェフは急に怩々しながら訊いた。

『休職にすると言つたんだ。』

『君、本當か!』と、タランチェフはイワンに眼を露き出しながら言つた。『ぢや、よし。』と、彼は憎々しさに言つた。『今、僕はオブローモフを何かで屹度購して見せる。』

『反つて君の方が購されるんだ!』

『大丈夫だ。君のお望み通り購して見せる!』と、タランチェフは言つた。『が、それにしても十分に智慧を捧るよ。僕の考へ附いたのは斯うだ、聞き給へ!』

『何を考へたんだ?』と、イワン・マトウエイチは考へ込みながら繰り返した。

『巧い事が出来る。が、残念なのは、君が彼處を出たことだ……』

『何うするんだ?』

『斯うさ!』と、タランチェフはイワン・マトウエイチを見ながら言つた。『オブローモフと君の妹とが、彼處で何んな麴麴を焼いてゐるかと云ふことを監視するのさ……そして證據を捉へて了ふんさ!さうすりや獨逸人も何にも出来やしない。それに君は今、自由なコザックだ。狡猾なことをやつてもいゝ。正當なことだ!心配し給ふな。獨逸人の方が吃驚して、平和に片附けようと言ひ出すに違ひない。』



『其れなら確かに巧く行く！』と、ムホヤローフは考へ込みながら答へた。『君は中々巧いことを考へ出すよ。けれども実行者は君ではいけない。ザチョールツイでもいいけない。よし、待ち給へ、僕が見附る！』と、イワンは元氣附いて言つた。『さうだ、斯うしよう！僕は僕の許の女中を妹のこの料理部屋に遣るのだ。さうすると女中はアニシャと仲よくなるだらう。すつかり分つて了ふ。さうなれば……君、飲まう！』

『飲まう！』と、タランチェフは繰り返した。『いぐにオブローモフを瞞して見せる！』

シトリツはオブローモフを連れて行かうとしたが、オブローモフは一ヶ月だけ後に残して置いて呉れと願つた。で、シトリツも氣の毒になつて彼の願を容れた。オブローモフの言ふ所に依ると、此の一ヶ月で凡ての計算を終り、借間を返し、もう歸つて來る必要がないやうにペテルブルグの仕事を片附けなければならぬと云ふのであつた。其の外、村の家を裝飾するのに必要な品物を買ひ込んだり、アガフィヤ・マトウエーウナのやうな良い女中頭を捜したり、アガフィヤにも家を賣り拂つて、彼女に應はしい舞臺——忙しい大きな世帯を切り廻す爲めに村へ行くやうに言ひ含めたりしなければならなかつた。『主婦の話が出た序だから訊くがね、』と、シトリツはオブローモフの言葉を遮つた。『イリヤ君、君は主婦と何んな關係なんだね……』

オブローモフは急に顔を眞赤にした。

『君は何を訊くんだね？』と、オブローモフは狼狽して訊いた。

『君にはよく分つてゐるんぢやないか。』と、シトリツは言つた。『だから君は赤くなつたのだ。ねえ、君、僕は忠告めいたことを言ふが、其れは僕等の間の友誼によつて願ふのだからね、十分注意をして呉れ給へよ……』

『何を？其んな事があるものか！』と、オブローモフはどぎまぎしながら辯解した。

『君は主婦のことを言ふ段になると、馬鹿に熱するから、それで僕の考へは、君が彼女を……』

『愛してゐるんぢやないかと君は言ふんだらう。そんな事があるものか！』と、オブローモフは故意と笑顔を作りながら遮つた。

『若し其處に何等の精神的の火花がないのなら、猶更悪いぢやないか。若しそれがたゞ……』

『アンドレイ君！君は僕を非精神的の人間だと思つてゐるのかね？』

『ぢや、君は何故顔を赤くした？』

『君がさう思やしないかと思つたからさ。』

シトリツは疑はしきうに頭を振つた。

『イリヤ君、注意し給へ。穴に陥つちやいけないよ。彼女は單純な婆さんだ。汚ない人間だ、息苦しい愚鈍の仲間が、無智だ——チエ！』

オブローモフは黙つてゐた。

『ぢや、失敬するよ。』と、シトリツは言つた。『オリガにも、夏になつたら、僕等の許でなければ、オ



ブローモフカで君に會へると言つて置くよ。彼女は君を忘れてゐないことを記憶してゐ給へ！」

『憶えてゐる。屹度憶えてゐる。』と、オブローモフは明瞭答へた。『若しオリガさんさへ許して呉れれば、僕は一冬君等の許で過したいと言つて呉れ給へ。』

『それこそ、何んなに喜ぶか知れない！』

シトリーツは其の日の中に發つた。が、晩になるとオブローモフの許へタランチェフが遣つて來た。彼はイワン・マトウエイチの爲めにオブローモフを巧く瞞してやらうと氣を揉んでゐたが、たゞ一つ氣が附かなかつたことは、オブローモフがイリインスキ家に入出して以來タランチェフのやうな態度が厭になつてゐること、無智と無禮とに對して平氣で且つ親切でゐることが出來ず、寧ろ反感を抱いてゐることであつた。之は最う疾くに現はれてゐたのだが、其の幾分はオブローモフがまだ別荘にゐる時に現はれてゐたのだが、其の頃からタランチェフに會ふことが少なかつたのと、他の人達がゐたので彼等の間に衝突が起らなかつたのである。

『ヤ、君、健康だね！』と、タランチェフは手を出してもせずに憎々しく言つた。

『君も健康かね？』と、オブローモフは窓を見ながら冷淡に答へた。

『何うだ、君の恩人は歸つたかね？』

『歸つた。何うして？』

『いゝ恩人だからさ！』と、タランチェフは皮肉に續けた。

『君は嫌ひなのか？』

『さうさ、僕なら敲き殺して了ふよ！』と、タランチェフは憎々しきうに嗚れ聲を出した。

『何を言ふんだ！』

『君も序に！』

『何うして其んな事を言ふんだ？』

『事は綺麗に遣り給へ。若し借金があつたら拂つて了ふさ。愚圖々々しないでね。君は此度何をしたのだ？』

『それはね、君、ミヘイ・アンドレイチ君、僕はもう君の言葉を聞かないんだ。僕は暢氣に懶惰けてゐたので、長い間、君の言ふことを聞いてゐたし、また一滴くらゐの良心は君にもあるだらうと思つてゐたんだ。ところが、それが君には無かつた。君は騙取者と一緒に僕を瞞さうとしたんだ。尤も君等の中で何方が悪いのか——僕は知らないが、君等二人は僕に取つては唾棄すべき人間だ。シトリーツ君は此の無智な仕事から僕を助けて呉れたまでさ……』

『偉い友だ！』と、タランチェフは言つた。『僕が聞く所によると、奴は君の花嫁を偷んださうだ。恩人だから何にも言へないのだらう！オイ、君、君は馬鹿だよ……』

『何うか其んな御愛嬌は止めて呉れ給へ！』と、オブローモフはタランチェフを遮つた。

『いや、止めない！君には僕を知らうと云ふ心がないのだ。君は忘恩者だ！僕は君を此處へ連れて來て



寶物の女を見附けてやつたぢやないか。平和も、有ゆる便利も——皆な君に與へたんだ。何から何まで君にしてやつた。が、君は鼻先を向けかへて、獨逸人と云ふ恩人を見附け出した！奴は君の領地を借り受けた。が、そればかりか、君を馬鹿にして、更に益々活動をしようとしてゐる。近いうちに君は乞食しなけりやならない。僕の言葉を忘れ給ふな！君は馬鹿だ。いや、馬鹿どこぢやない、恩知らずの畜生だ！』

『タランチエフ！』と、オブローモフは嚇すやうに叫んだ。

『何を叫ぶんだ？僕の方から君が馬鹿で畜生だと云ふことを世界ぢうに怒鳴つてやらう！』と、タランチエフは叫んだ。『僕とイワン・マトウエイチとは君のことを心配して、城のやうに君を守り、君の御用を務め、爪立て歩いて君の眼色ばかり伺つてゐたんだ。ところが何うだ、君はイワン・マトウエイチを所長の前に引き出したぞ。今、彼は職もなければ一片の麵麩さへ得られないでゐる！實に氣の毒な事ぢやないか！君は彼に今、財産の半を遣らなけりやならない。手形を彼の名前にし給へ。君は今酔つてゐない。十分に智慧の判断を持つてゐるだらう。財産の半を遣り給へ。でないと僕は此處を出ない……』

『ミヘイ・アンドレイチさん、あなたは何うして其んなにお怒鳴りなの？』と、主婦とアニシャとは扉の蔭から覗いて言つた。『戶外を通る人が二人も立停つて、何の叫び聲だらうと思つて立聞してゐますわ……』

『怒鳴る。』と、タランチエフは益々呻つた。『あの馬鹿野郎を辱かしてやるんだ！あの獨逸人の騙取奴

は君を騙してゐる、彼奴は今、巧く君の戀人と妥協してゐる……』

室の中には平手で敲く音が鳴り渡つた。タランチエフはオブローモフの爲めに頬を見舞はれると直ぐに黙つて、椅子に腰を下し、吃驚して周圍をキョト／＼と見廻した。

『酷いぢやないか？酷いぢやないか——オイ、何を爲るんだ！』と、眞蒼になつたタラン・チエフは頬を押へて、辛つと息を吐きながら言つた。『失敬ぢやないか？君は此の償をしなけりやならないぞ！直ぐに縣知事へ申告する。お前達も見てゐたね？』

『私達は何にも見ませんよ！』と、二人の女は一緒に言つた。

『あゝ、さうか！此處の者達は計略んでゐるのだ！盜賊の巢窟だ！悪漢の巢だ！奪つたり、殺したりするのだ……』

『無頼漢、彼方へ行け！』と、オブローモフは憎しみに慄へながら眞蒼になつて叫んだ。『今、直ぐに行け、貴様の足を見るのが厭だ。でないと、犬のやうに撲殺して了ふぞ！』

オブローモフは眼で棒を捜した。

『且那樣！強盜さん！そんなに惨めないで下さい！』と、タランチエフは叫んだ。

『ザハール！此の悪漢を彼方へ投げ出して！了へ。此奴の眼を見るのが厭で堪らない！』と、オブローモフは叫んだ。

『何うか出て行つて下せえ。其處に神様が御座るだ。其處か扉口でがす！』と、ザハールは聖像と扉口



とを指差しながら言つた。

『俺は貴様の許へ来たんぢやない、教母の許へ来たんだ。』と、タランチェフは嘯いた。

『厭ですよ！ミハイ・アンドレイチさん、私はあなたに用事はないのです。』と、アガフィヤ・マトウエーウナは言つた。『あなたが今迄此處へいらしたのは兄の許へでせう。私の許ぢやないでせう。私あなたは苦い大根より嫌ひですわ。飲んだくれて、食ひ廻して、おまけに吠えるんですもの。』

『ア、さうですか！教母さん、さうなんですか！よろしいです、あなたの兄があなたに何と言ふか憶えておいて下さい！が、君、君は僕に對して無禮の償をしなけりやならないぞ！僕の帽子を何處へやつた？此の馬鹿共！強盜共！無禮者！』と、タランチェフは扉口の方へ行きながら叫んだ。『君は僕に對して無禮の償をしなけりやならない！』

犬は鎖を引つ張りながら吠え聲を浴せた。

此の後、タランチェフはオプローモフに會はなかつた。

## 八

シトリーツは幾年かの間、ペテルブルグへ來なかつた。彼は或る時、オリガの領地とオプローモフカとを一寸見廻つた。其の時、イリヤ・イリイーチはシトリーツから手紙を受け取つた。其の手紙にはオプローモフ自から村へ來て、順序立つた領地を自分で管理するやうにとか、自分はオリガ・セルゲーウナと

一緒に二つの目的、即ち一つは、オデッサに於ける自分の事業の爲め、一つは産後の肥立の悪い妻の健康の爲めにクリミヤの南岸へ行くなど、書いてあつた。

シトリーツとオリガとは海岸の静かな處へ移つた。彼等の家は質素で、さう大きくもなかつた。家の内部の間取や裝飾なども、外部の建築のやうに、又凡ての裝飾が主人達の思想と人物とを印してゐるやうに、獨特の體裁を有つてゐた。彼等は種々な家財道具を持つて行つた。露西亞からも、外國からも小荷物や、鞆や、荷車などが、彼等に送られた。

趣味の愛好者は、多分、家具や、古畫や、手足の取れた立像や、粗末ではあるが、尊い記念を有つた銅版畫や、其他の細々した物などの外部の不調和を見ると、肩を窄めることだらう。また博識者の眼が之等の畫や、年功で黄色くなつた書物や、古代の燐や、石や、貨幣などを見ても、度々羨望の光を現はすやうなことはあるまい。

けれども之等の種々な時代に屬する家具や、繪畫などの中に、誰の爲めにも何の價値をも有つてゐないが、シトリーツとオリガとの二人の爲めに幸福な時と、記憶すべき瞬間とを刻み附けた些細な物の中に、大洋のやうな書物と帳面との間に、温かい生活と、智慧や、詩的感情などを刺戟する或る何物かが流れてゐた。そして到る處に斷え間なく目醒めてゐる思想があつた。周圍に永久の自然美が輝やいてゐるやうに、其處には人工美が輝やいてゐた。

此處には、アンドレイの父親が有つてゐたやうな脊の高い事務卓や、鞆皮の手袋などが場處取つてゐ



た。隅の礦物や、貝殻や、小鳥の剝製や、種々な粘土と商品との見本などが入つてゐる戸棚の傍には、糊の利いた上着が掛つてゐた。其の眞中の一段高い處には、水晶と金との附いた貝殻と、エラルの三角琴とが載つてゐた。

網のやうに繁つてゐる葡萄の樹と、ブリュシチと、ミルト樹との爲めに、家は上から下まで蔽はれてゐた。廊下からは海が見えてゐた。他の一方には、街へ行く道路が見えてゐた。

其處でオリガは仕事に出て行くアンドレイを見送つてゐた、彼が歸つて來るのを見ると、オリガは下に降り、綺麗な花壇や、踏み坦された長い並木道などを駆け抜けて、夫の胸に抱き着くのであつた。其の時はオリガは何時も喜びに上氣し、頬を赤くし、眼を光らせてゐた。そして結婚して幾年も経つてゐるに拘らず、彼女は何時も隠しきれない幸福に燃えてゐた。

愛と結婚とに對するシトリツの見解は、よほど獨創的誇張的であつたらしいが、然し如何なる場合にも獨立的であつた。此の點に於て彼は自由な路を歩いてゐた。しかも之が彼には單純な路だと思はれてゐた。が、此の(單純な路)に踏み出すことを學ぶ迄、彼は何んな六ヶ敷い觀察と、忍耐と、勞苦との學校を通つたことだらう!

シトリツは自分の父親から人生の凡てを、殊に細々しい出來事までも眞面目に見る性質を受けてゐた。同時に嚴肅な村夫子の態度をも受けてゐたらしい、獨逸人は一體に人生を觀察する場合にも、生活に一步を踏み出す場合にも決して此の態度を失はない。で、夫婦關係に對しても矢張り此の態を取るの

である。

石板に刻んだ圖書目錄のやうに、シトリツ老人の生活は皆なの前に公然に描かれてゐたが、彼の生活には其れ以上認むべきものは何にも無かつた。が、始終歌を唄ひ、優しく囁やく母親と、特長のある公爵家と、大學と、書物と、社會と——之等は皆なアンドレイを父親が描いて行つた眞直な軌道から引き出した。露西亞の生活は知らず識らずのうちに模様を描き、無色の石板から鮮やかな大きな一幅の繪を作つた。

アンドレイは感情に對して村夫子的な眼を注がなかつた。いや、寧ろ感情には一定の自由を許した。が、(足を地盤から)放さないやうにし、同時に空想に耽らないやうにした。彼は獨逸人としての天性により及び他の何物かによつて空想に陥らなかつたが、然し或る信念を失ふことも出來なければ、或る人生觀を棄てることも出來なかつた。

シトリツは健康な身體を有つてゐた。と云ふのは、彼は健全な智慧を有つてゐたからである。彼は子供の時分から機敏で、且つ惡戯であつたが、惡戯をしない時には、父親の監督の下に仕事をしてゐた。彼には空想に耽る暇がなかつた。が、彼の想像は羨びなかつた、情緒も破壊されなかつた。彼の純な想像と、潔白な情緒とを母親が鋭く見守つてゐたからであつた。

青年時代になると、彼は自分の清新な力を本能的に保護した。そして此の清新な力は健康と快活とを生んだ。此の清新な力は勇氣を形造ることを早くから知つてゐた。彼は此の勇氣で精神が鍛練されると、



どんな生活に衝突つても着くならないし、生活を十字架のやうな重い軛と見ずに、義務と見ることが出来るやうになるし、喜んで生活と闘つて行くことが出来ること云ふことを知つてゐた。

ストーリーリツが思索に耽るのは多くの場合、自分の情緒と、賢明な法則との爲めであつた。彼は美しい空想と、感情が受けた印象の變化と、感情の微候と、火花と、出口とを意識的、若くは無意識的に觀察し、自分の周囲を見廻しながら生活に向つて猛進する場合に、一つの信念を有つてゐた。其の信念と云ふのは、アーチメードの梃のやうな力を有つた愛が世界を動かしてゐると云ふこと、其の愛を理解しない場合、又、悪用する場合に其處に虚偽と醜態とが多いだけ、それだけ其の愛の裡に普遍的で、且つ堅固な眞理と幸福とが横はつてゐると云ふことであつた。が、何處に幸福があるだらう？ 何處に罪惡があるだらう？ 幸福と罪惡との差違は何處にあるだらう？

虚偽は何處にあるか、と云ふ問が起つた時、ストーリーリツの想像の中には、現在と、過去との假面が斑らに擴げられた。彼は莞爾としたり、顔を赤くしたり、擧めたりしながら愛の主人公や女主人公などの無限の行列を眺めた。竟り、彼は鋼鐵の手袋を嵌めた大勢のドン・キホーテや、五十年間も別れてゐてお互に信じ合つてゐるドン・キホーテの思想を有つた婦人達や、血色のいゝ顔を、凸出た溫柔さうな眼を有つた牧者達や、羊と一緒にゐる牧者のフロイなどを眺めたのである。

其の他、ストーリーリツの前には、レースを着、眼に智慧を閃かし、歡樂の微笑を漏してゐる縮毛の侯爵が現はれた。次には、射殺されたり、絞め殺されたり、壓迫されたりした大勢のウエルテルも現はれ

た。それから更に修道院に入つて断えず愛の涙を灑いでゐる寢れた處女や、近頃まで主人公であつた口髭のある人物や、眼々暴々しく輝かし、無邪氣な、そして明瞭した意識を有つてゐる大勢のドン・ジャンや、愛の疑ひに慄へ、竊かに自分の倉庫掛の女を尊敬してゐる惻口者など……種々な人物が現はれた！眞實は何處にあるだらう、と云ふ問が起つた時、彼は遠くや、近くや、想像の中などに、單純で、潔白で、そして深くつて引き放すことの出来ない程女に接近してゐる者の例を搜したが、それは見附からなかつた。たとへ見附かつたやうに思つても、其れはたゞさう思はれたゞけで、やがて彼は幻滅に會ひ、憂鬱な考へに沈み、其の上落騰するのであつた。

《斯うした幸福は完全に與へられるものではない。》と、ストーリーリツは考へた。《又、斯うした愛の光に照された心は、羞恥深い。其の心は悸々と隠れてゐて、惻巧な人達を興奮させようとはしない。其の心は惻巧な人達を憫れに思ひ、自分を幸福にすると云ふ名目の下に、惻巧な人達が小花を泥の中に踏み込んだ罪を赦す。それは小花が深く根を下して、其の影で全生涯を蔽ふやうな大木になる爲めに必要な地盤を有たないからだらうと思ふ。》

ストーリーリツは結婚や夫などを見た。彼は妻に對する夫の態度の中に何時も、謎に満ちたスフィンクスを見た。又、何だか分らない、何とも言ひやうのない或るものを見た。が、さうした夫達は、賢明な問題を考へもせず、平凡に意識的に結婚の路を歩き、別段解決すべき事も、搜すべき事も無いかのやうである。



「あれが本當ぢやないだらうか？他に何にも必要なものは無いのかも知れない。」と、ストーリーリツは考へた。彼れ或者が夫婦關係に入るイロハか、慰勸の形式かのやうに、又、役所に行つた時、一寸お辭儀をして、急いで事務を執らうとするやうに、急いで愛を踏み越えるのを見ながら自分に不満を感じた。彼等は急いで人生の春を肩から振り落して了ふ。多くの者は、嘗ては自分の妻を無智に愛してゐたことを悲しむやうに、一生涯自分の妻に不満を抱く。

何らかすると、或者は年齢を取るまで長い間愛に見棄てられないことがあるが、同時に決して諷刺の微笑にも見棄てられない……

又、多くの者は、領地を守り、其の領地から上る利益を喜ぶ爲めに結婚する。竟り、妻は一家に良き秩序を入れるものである——妻は主婦で、母で、子供の教育者であると云ふ點から多くの者は結婚するのである。斯うした人達は、實際的の主人が領地の位置を見、直ぐに其れに慣れて、程よく其れを忘れて了ふやうに愛を見てゐるのだ。

『之は何事だ、自然の法則に對する先天的無理解だらうか、』と、ストーリーリツは言つた。『それとも修養や教育などの缺陷だらうか？……決して自然の美を失はず、遊戯的虚飾を着ず、斷えず變化して、しかも消滅しない同感は何處にあるだらう？到る處に溢れ、萬物を充してゐる此の幸福、即ち生活の此の液汁の自然な色彩は何んな色だらう？』

ストーリーリツは預言者のやうな態度で遠い將來を眺めた。其處には感情と、感情の花を着、感情の色彩

に輝やいてゐる女との姿が霧に包まれたやうに見えた。其の姿は平凡であつたが、然し輝やかしく、そして純潔であつた。

『空想だ！空想だ！』と、彼は楽しい思想の興奮から醒めて、微笑しながら言つた。

けれども自分の意志に反した空想の輪郭は彼の記憶の中に生きてゐた。

最初、ストーリーリツは此の姿の中に、廣く女の將來を夢みてゐた。次に彼が成熟したオリガの中に、華やかに咲き誇つてゐる美ばかりか、生活しようとする力——生活に對する理解と戦とを渴望してゐる力と、彼の空想の有ゆる對照とを見た時に、彼の中にも殆んど忘れてゐた以前の愛の姿が現はれ、此の姿の中にオリガが夢みられ、彼とオリガとの同感の中に、彼は遊戯的な虚飾や悪意などを脱した眞實があり得ることを微かに感ずるやうになつた。

斯うしてストーリーリツは愛と結婚との問題を眞面目に考へた。彼は決して此の問題の中に打算的な金銭問題や、關係、地位の問題などを加へなかつた。彼は今迄疲勞を知らなかつた自分の外部的活動と内部的家庭生活とを何う調和したものかとか、放浪者であり、旅商人である自分は何うしたならば家庭に凝つと坐つて居られるかなど、云ふやうな事をも考へた。若し彼が此の外部的活動を休むならば、家庭に於ける彼の生活は何によつて満されるであらう？勿論、子供の教育や、其の生活の指導などは、容易な、そして空虚な問題ではない。が、其の問題はまだ遠くにある。彼は其の時まで何を爲るであらうか？此の問題は疾くから彼を驚ろかしてゐた。で、彼は寧ろ獨身生活を喜んでゐた。彼は美の接近を



感じて、自分に結婚と云ふ鎖を被せようなどと思つて、自分の心を鼓動させたことはなかつた。だから彼は處女としてのオリガを輕蔑するくらゐであつた。彼はたゞ彼女を大きな希望を與へる愛らしい子供として愛してゐた。だから冗談半分にオリガの食ほるやうな感受性の強い智慧に、新らしい力強い思想や、適切な人生觀などを投げ込みながら、何にも考へず、又何にも察せず、彼女の精神の中に、現象に對する生々した理解と、確實な見解とを相變らず注入してゐたが、然し何時の間にかオリガをも、自分の亂暴な日課をも忘れて了つた。

が、次第に時が経つに従つて、ストーリーリツはオリガの中に閃くものが、平凡な智的作用や智的見解でないことや、彼女が虚偽を有つてゐないことや、一般の敬意を求めてゐないことや、彼女の感情が單純に、そして自由に去來してゐることや、彼女には他人のものが一つもなくつて、皆な彼女のものだと云ふことや、其の彼女のものが非常に勇敢で、清新で、且つ堅固であることなど知つた。ストーリーリツは彼女が何處から斯んなものを持つて來たかと云ふことを不思議に思つて、飛び去る自分の日課や説明などに注意しなかつた。

其の時、ストーリーリツが彼女に注意を拂へば、彼は極端に走らないやうにと叔母から表面だけの監督を受けてゐる彼女が、殆んど單獨で自分の路を歩いてゐることや、多勢の乳母や、祖母や、叔母や、一家の傳統や、姓や、階級や、古い氣風や、習慣や、格言などの權威が、オリガに對し、なほ多くの後見に對して何の力も有つてゐないことや、誰でも彼女に一度踏み外した路を強ひて歩かせることの出來ない

ことや、彼女が新らしい小徑を歩いてゐることや、彼女が其の小徑に、自分の智慧と、見解と、感じとで自分の軌道を刻んでゐることなどに氣が附いたであらう。

けれども自然は斯う云ふ行き方をしてゐるオリガを少しも侮辱しなかつた。叔母は彼女の意志と智慧とを壓制的に支配しなかつた。オリガも凡ての事を自ら察し、自ら理解して、用心深く人生を見たり、聞いたりした……殊に自分の友の言葉や勸告を聞き入れた……

ストーリーリツは此の事には少しも氣が附かずに、たゞ彼女の將來に、それもずつと遠い將來に期待を繋ぎ、決して彼女を自分の妻として想像しなかつた。

が、彼女は自尊的な羞恥心のお蔭で、長い間、自分を見抜かせなかつた。で、ストーリーリツは外國での辛苦困難が終つてから、此の謎のやうな、而かも忘れてゐた子供が單純と、力と、自然との或る姿に生長して行くのを、驚異の眼を以て見てゐた。と、次第にストーリーリツの前には彼女の深淵のやうに深い精神が展かれた。彼は其の深淵を何うかして充たさうとしたが、何うしても充たすことが出來なかつた。

最初、長い間ストーリーリツはオリガの天性と勇ましく戦ひ、青春の興奮を斷ち、彼女の情熱を一定の軌道に入れ、彼女の生活を平らかに流すことが出來た。が、それはほんの一時で彼が辛つと安心して眼を閉ぢると、直ぐに再た驚愕が起り、生活が泉のやうに溢れ出た。不安な智慧と、昂奮した心との新らしい問題も聞えた。此の場合、彼は掻き亂された想像を鎮めたり、自尊心を制へたり、或は醒したりしなければならなかつた。オリガは現象を考へ始めた——彼は急いで現象の鍵を彼女に渡した。



偶然に對する信仰と、霧のやうな錯覺とは、生活から消えた。彼女の前には遠い光景が輝やかしく、そして自由に展開された。彼女は透明な水の中に入つてゐるやうに、其の遠い光景の中に小石や、溝や、綺麗な底までも一つ残らず見透ほした。

『私、幸福だわ!』と、オリガは感謝の眼で自分の過去の生活を振り返りながら囁いた。そして未來を試しながら自分の處女らしい幸福の夢を想ひ出した。其の夢は彼女が嘗てスウィツルで、あの沈んだ蒼い夜に見たのであつた。彼女は此の夢が、丁度影のやうに自分の生活を蔽うてゐることを感じた。

『何うして私は斯んな幸福な境遇になつたのだらう?』と、オリガは謙遜して言つた。

オリガは考へに沈んだ。何うかすると、此の幸福が絶えやしないかと其れを怖れることさへあつた。幾年も過ぎた。が、彼等は生活に疲れなかつた。静寂が來て、情熱が鎮まつた。人生の波瀾は理解されて、勇敢に忍ばれた。が、彼等の生活は矢張り沈黙しなかつた。

オリガは次第に教育されて、生活を嚴密に理解し得るやうになつた。オリガとアンドレイとの二つの存在は一つの河床に流れ合つた。暴々しい情熱は横行することが出来なかつた。二人の有つてゐる凡ては調和と静寂とであつた。

之は此の適當な平和の中に眠ることでもなければ、また静寂の中に生活してゐる者達が、一日に三度も落合つて、平凡な話に欠伸をしたり、鈍よりと居眠つたり、朝から晩まで頹然としながら、凡ての考へと、話と、事業とが變つたことや、最う之れ以上饒舌る事も爲る事も無いことや、(此の世の生活は大

概斯んなものだ』と云ふことなどを喜ぶやうに喜ぶことでもない。

外から見ると彼等の爲る事も、矢張り他の人達の爲る事と同じやうであつた。二人は東天が白むと直ぐに起ると云ふ譯ではないが、然し早起をした。何時までも腰掛けてゐて茶を飲んでゐるのも好きであつた。何うかすると、二人ながら氣惰さうに黙り込んでゐて、やがて自分達の室の中を歩いたり、一緒に働いたり、晝餐を食べたり、樂器を持つて野原に行つたりすることもあつた……之は誰でもすること、オプローモフも矢張り斯んなことを空想してゐた。

が、彼等は居眠つたり、沈んだりするやうなことはなかつた。二人は倦怠な感動の無い日を送るやうなことはなかつた。彼等には萎えた眼附と、萎えた言葉とが無かつた。彼等の對話は際限なく續いた。時には其の對話が熱することも度々あつた。

二人の甲高い聲は室ぢうに響いて、更に庭までも聞えることがあつた。が、又、二人はお互の空想や、言葉に現はせない微細な感動や、一度生じた思想の消滅や、辛つと聞えるくらゐの精神の囁などを描き合つてゐるやうに靜かに話をしてゐることもあつた。

彼等は時によると、沈黙してゐることもあつたが、其れは沈思の幸福であつた。其れをオプローモフも空想したことがあつた。もう一つは、お互ひに提供し合ふ、無限の材料に對する、單獨の思索であつた……

彼等は永久に新しく輝やかしい自然美の前で不斷の驚異に沈むことが度々あつた。二人の鋭敏な精神



は、此の美に慣れることが出来なかつた。地と、空と、海と——凡ては二人の感情を刺戟した。二人は黙つたまゝ、並んで腰掛けてゐた。彼等は同じ眼と同じ精神として此の創造的光彩を見て、無言の中にお互に理解し合つてゐた。

彼等は朝さへ平氣で迎へることが出来なかつた。彼等は星が煌々としてゐる温かい南國の夜の薄闇に恍乎と沈んで行くことが出来なかつた。そして永劫に動いて止まない思想と、永劫に刺戟されてゐる心と、二人で考へたり、感じたり、語り合つたりしたいと云ふ要求とが彼等二人を覺醒させた。

が、此の熱烈な議論と、静かな對話と、讀書と、野外散歩との對象は何であつたらう？

無論、凡ての物は其の對象であつた。シトリーツはまだ外國にゐる時分から、一人で讀んだり、働いたりすることを忘れてゐた。此處へ來てからも彼はオリガと二人顔を見合せて考へた。彼はオリガの急がしく進む思想と意志との後を骨を折つて追うてゐた。

家庭で何を爲したものかと云ふ彼の問題は、既に自から解決された。彼は自分の仕事をオリガに教へようと思へた。と云ふのは、オリガに取つて、生きてゐる間に活動しないことは、空氣が無いやうに苦痛であつたからである。

何か建築をするのも、自分の領地や、オプロローモフの領地の仕事も、會社の事業も——皆な彼女の知らない事、若しくは關係しない事はなかつた。一本の手紙でも、彼女に讀まれないうちは出されなかつた。何んな思想でも、又、一寸した實行でも、彼女の傍を通り抜けやしなかつた。彼女は何事でも知つ

てゐた。何事でも彼女の手を経ないものはなかつた。何故かと言へば、何事でもシトリーツの手を経たからである。

最初彼が何事でもオリガに知らせてするやうにしたのは、何事でもオリガに隠すことが出来なかつたからである。で、手紙を書くにも、委任者や、支配人など、話をするにも、彼はオリガの眼の前でした。次に、彼は之を習慣で續けたが、終には斯うせずにはゐられなくなつた。

オリガの注意や、忠告や、許可や、不許可はシトリーツに取つて見通すことの出来ない尺度となつた。彼はオリガが自分と同じく理解し、彼以上に考へたり、判断したりしてゐることを知つてゐた……ザハールも此の點に於て自分の妻に一日譲つてゐたし、多くの人も之をやつてゐる——が、シトリーツは幸福であつた！

が、讀書と修養とは——思想を永久に養ひ、思想を無限に發達させるものである！オリガは書物や、雑誌の論文などを見せられなかつた時には、機嫌を悪くした。シトリーツが自分の考へて、あまり眞面目で、面倒で、分り悪いと思ひ、何かをオリガに見せないやうな事があると、彼女は眞面目に怒つたり、機嫌を悪くしたりして之を銜學主義だとか、墮落だとか、退歩だなどと言ひ、彼を《舊弊な理髮師》と言つて罵つた。之が原因になつて二人の間に大騒ぎが演ぜられることもあつた。

オリガが腹を立てると、シトリーツは笑つた。と、彼女は益々怒つて、シトリーツが冗談を止めて、彼女に自分の考へや、智識や、讀んだ事などを聞かせるまで和らがなかつた。彼女はシトリーツが知つ



たり、讀んだりしなければならぬ物、それからまた知つたり、讀んだりしたい物は、オリガに取つて同じだと言つた。

シトリーツはオリガに學術上の術語を教へなかつた。それは、オリガが傲慢の爲めに無智なことを言つたり、自分を《學識ある妻》として誇つたりしない爲めであつた。で、若しオリガと話をしてゐる中に生意氣な言葉が一言でも閃くと、彼は智識の範圍では平凡なことでも、まだ當時の女の教育程度には理解出来ないやうな問題の解釋に間誤つて、オリガからそれを知らないのだなと云ふやうな鈍よりした眼附で見られた時より顔を赤くすることだらう。シトリーツがたゞ知つてゐたいと思つた事でも、オリガは二倍の智識慾を以て、それを知つたゞけでなく、更によく理解したいと思つた。

シトリーツはオリガに表や數字などを示さなかつたが、凡ての事を彼女に話した。彼は或る經濟論や、社會問題や、哲學問題なども術學者風に駈け抜けずに、詳しく讀んだ。彼は話をする時も熱心に、そして面白さうに話した。シトリーツはオリガに無限に長い生きた智識の繪を描いて見せるやうなものであつた。後でオリガの記憶から詳しい事は消え失せても、決して吸収力の激しい智慧から描かれた繪は消えなかつた。色彩も失せなかつた。火も消えなかつた。彼は此の父でオリガの爲めに造つた宇宙を照してゐたのである。

シトリーツは誇と幸福との爲めに慄へることがあつた。それはやがて此の火の火花がオリガの眼に輝やいたり、オリガに言つた思想の一片が彼女の言葉の中に響いたり、此の思想がオリガの意識や理解の

中に入つたり、彼女の智慧の中で造り變へられたり、彼女の言葉の中に閃いたり、話した事や、讀んだ事や、描いた事の中から流れ出る無味でなく、粗雑でなく、或る生命のある滴が、眞珠のやうにオリガの生活の澄んだ底に落ちたりした時であつた。

シトリーツは思想家として、また藝術家としてオリガの爲めに理性的實在を織り出した。彼は生れて以來斯んなに深く没頭したことがなかつた、それは學生時代にもなければ、生活と闘つたり、生活の墮落から遁れ出たり、今のやうな大膽な實驗で自分を鍊へたり、自分の妻の精神に於ける不斷の噴火作用を調節して自分を強めたりした苦闘の時代にもなかつた！

『俺は何と云ふ幸福な人間だらう！』と、シトリーツは獨語つたり、獨りで空想したりして、蜜のやうに甘い結婚當時の幾年が閃いてゐる其の未來へ走つた。

彼の前途には再た新しい姿が微笑んだ。其れは利己的なオリガの姿でもなければ、非常に愛して呉れる妻の姿でもなければ、色彩のない、誰にも必要のない生活の中に萎んで行く母なる乳母の姿でもなくして、他の高尚な、殆んど在り得べからざる何物かであつた……

彼は多くの幸福な子孫の道徳的生活と、社會的生活との創造者で、且つ關係者なる母としてオリガを夢見た。

シトリーツは此の母が十分に意志と力とを有つてゐるだらうかと怦々と考へた……そして一日も速くオリガが生活を征服して、生活と闘ふ勇氣を貯へるやうにと手傳つた——それも彼等二人が若くして強



い今、生活が彼等に寛大で、生活の打撃を苦痛としない今、悲哀が愛の中に溺れてゐる今、オリガを助けなければならぬのだ。

彼等にも憂鬱な目が來ることもあつた。が、それは長くなかつた。事業の不成功や、大金の消費——之等は彼等を驚かすものではなかつた。之等は彼等にとつ餘分の心配と配慮で、程なく忘れられて了ふものであつた。

叔母の死は、オリガの眞實な苦い涙を呼んだ。そして彼女の生活に半年間ばかり暗い蔭を落してゐた。彼等が一番危険を感じ、一番心配をしたのは、子供達の病氣であつた。が、此の危険も直ぐに過ぎ去つて、再た幸福が歸つて來た。

シトリーツが一番驚いたのは、オリガの健康であつた。彼女は何時も産後の肥立が悪かつた。彼女が以前の健康に歸つてもシトリーツは彼女の健康にびく／＼してゐた。彼は之れ以上怖ろしい悲哀を知らなかつた。

『私、本當に幸福ですわ！』と、オリガは自分の生活に見惚れながら靜かに言つた。彼女は此の幸福を意識してゐる時にも、何うかすると考へに沈むことがあつた……殊に結婚して三四年も経つた後にさう云ふ事がよくあつた……。

人間は不思議な者である！オリガの幸福が益々充實するだけ、それだけ彼女は考へ深くなり……それだけ更に臆病になつた。オリガは熱心に自分を觀察して、自分を苦めるものが、生活靜寂と幸福の瞬間に

於ける生活の停止とであることを知つたので、オリガは強ひて自分の精神から此の沈鬱を拂ひ落したり、生活の歩調を速め、喧騒と、活動と、仕事とを熱心に搜したり、夫と一緒に街へ行つたり、世間や人間などを眺めたりした。が、其れも永續はしなかつた。

オリガは僅かに醒醒した世間を知つた。彼女は精神から、或る重苦しい、見慣れない印象を振り落さうとした。更に彼女は家庭生活の細々しい事に心を止めて、始終子供の事ばかり考へながら母たる乳母の義務を遂行したり、アンドレイと讀書に耽つたり、(眞面目でしんみりとした問題に就いて)語り合つたり、詩を讀んだり、イタリヤへ行く相談をしたりした。

オリガはオブローモフ流の無感覺に陥ることを怖れてゐた。が、彼女は幾ら此の一時の鎖のやうな瞬間と、精神の眠とを精神から拂ひ落さうとしても、何時の間にか、幸福の夢が彼女の中に忍び込んだ。彼女は蒼い夜に圍まれ、睡魔に襲はれた。と、やがて再た生活の停止のやうな沈黙の停滯が來た。次に……煩悶と、恐怖と、疲勞と、一種の微かな悲哀とが來た。不安な頭の中には霧のやうに茫然とした或る問題が聞えた。

オリガは耳敏く聞き惚れたり、自分を試して見たりしたが、何物をも見附け出しもしなければ、又、彼女は斷えず求め搜してゐる物に衝突りもしなかつた。彼女はたゞ求めたり搜したりしてゐるだけであつた。言ふも怖ろしい事だが彼女は悲しんでゐた。彼女にとつて幸福な生活は少なかつた。彼女は生活に疲れて、今迄になかつた新しい現象を要求してゐた、彼女は更に前途に望を置いてゐた。



「何うしたんだらう？」と、オリガは怖しきうに考へた。「まだ何か欲しいものがあるのかしら？まだ何か望んでもいいのかしら？何處へ行つたものだらう？もう行く處はない！此の先には路が無いわ……でも、本當に無いのかしら、本當に私は生活し盡したのかしら？其の生活の中には何も彼も……何も彼も満たされてゐたかしら？」と、オリガの精神は言つたが、まだ言ひ終らないうちに、……オリガは吃驚して、誰か此の精神の囁き聞き付けはしなかつたかと周囲を見廻した……オリガは眼で空と、海と、林とに訊いた……何處からも答はなかつた。そして其處には無限と、深淵と、暗黒とが見えるだけであつた。自然は何時も同じ事ばかり語つてゐた。オリガは自然の中に、始まなければ終もなく、不斷に、そして單調に流れてゐる生活を見るだけであつた。

オリガは此の驚愕のことを誰に訊くべきかを知つた。彼女は答をも見附けたに相違ない。が、其れは何んな答であらう？若し此の答が、何の役にも立たない智慧の不平であつたら何うだらう、或はなほ不幸にも、同情の爲めに造られない非女性的心の渴望であつたら何うだらう。あゝ！彼女は心を有たない、そして何物にも満足しない呪ふべき智慧を有つた女である！斯んな女から何が出よう？青い靴下くらのものだ！が、シトリーツの前に此の新らしい、珍らしい、然し無論彼の知らない苦痛が開かれたなら彼女は何んなに驚くだらう！

オリガは自分の眼が自分の意志に反いて天鵝絨のやうな柔かさを失なつたり、冷淡な、そして又熱烈な見方をしたり、自分の顔に重苦しい雲が漂つたりした時など、シトリーツから隠れたり、或は假病を

使つたりした。彼女は種々な事に苦しんでゐるにも拘らず、自から強ひて笑つたり、話をしたりすることが出来なかつた。彼女は政治界の熱烈な新らしい出来事や、科學界の進歩した珍らしい新説や、藝術上の新作などを冷靜に聞いた。

殊にオリガは泣きたくなかつた。神経が興奮したり、彼女の處女のやうな力が覺醒したりした時できへ、彼女は突然に身慄ひを感じるやうなことはなかつた。實際、そんな事はなかつた！

「何うしたのかしら？」オリガは美しい沈んだ晩や、搖籃の傍で夫の微笑を見たり、夫の話を聞いたたりしてゐる時など、俄かに怠屈になり、凡てに對して冷靜になつて、絶望的に斯う訊くことがあつた。

オリガは俄かに化石でもしたやうに黙つて了ふ。それから自分の異様な不快を隠す爲めに故意と生々して寢臺に上り、そして寢に就く。

けれどもオリガに取つて、シトリーツの鋭い眼を遁れることは六ヶ敷かつた。オリガはそれを知つてゐた。で、彼女はシトリーツから話しかけられた時には、内心忪々しながら話をしようとした。それは丁度過去を告白しようとした時と同じであつた。話が始まつた。

彼等は或晩、並木路を散歩した。オリガは殆んどシトリーツの肩に凭れるやうにして歩きながら黙つてゐた。オリガは自分の何だか分らない一種の病的發作に苦しんでゐた、そしてシトリーツが何を話しかけても簡單に答へるだけであつた。

「オレーニカは夜になると咳をすると乳母が言つてゐたが、明日、醫者を呼ばなくともいいかしら？」



と、シトリツは訊いた。

『私、彼女には温かい物を飲ませましたし、それに明日は遊びに出すまいと思つてゐますから、もう少し容態を見てゐませう！』と、オリガは單調に答へた。

二人は黙つたまゝ並木路の端まで行つた。

『お前は何故友達のスーニチカに返事を出さなかつたんだい？』と、シトリツは訊いた。『俺は何時までも待つてゐたので、もう少し郵便に遅れるとこだつたよ。スーニチカは返事も出さないのに、之れで最う三度も手紙をよこしたのだよ。』

『でも、私、あの方を速く忘れたいのですもの……』と、オリガは言つて黙り込んだ。

『俺はビチューリンによく言つて呉れとお前に頼んだんだからねえ。』と、アンドレイは再た言ひ始めた。『あの男はお前を戀してゐるんじゃないか。彼の大麥が時節に熟さなかつた悲しみを幾らか慰めるよふものだ。』

オリガは冷淡に莞爾とした。

『さうよ、あなたさうおつしやつたわ。』と、オリガは冷靜に答へた。

『お前は睡くないのかね？』と、シトリツは訊いた。

オリガの心臓は動悸々々とした。實際に近い事を訊かれると何時もオリガは斯うなるのである。

『いゝえ、まだよ。』と、オリガは強ひて元氣を装ひながら言つた。『何故？』

『加減が悪いのぢやないか？』と、シトリツは再た訊いた。

『いゝえ、あなたにはさう見えて？』

『あまり怠屈さうにしてゐるからさ！』

オリガは両手で強くシトリツの肩を握り締めた。

『いゝえ、いゝえ！』と、オリガは故意と乾燥いだやうな聲で答へた。が、其の聲には實際、怠屈が響いてゐた。

シトリツはオリガを並木路から連れ出して、自分の顔を月の光へ向けた。

『僕を見て御覽！』と、シトリツは言つて、凝つとオリガの眼を見た。

『お前は……不幸を感じてゐるやうに思へるね！今日のお前の眼は本當に妙だよ。が、今日だけぢやない……オリガさん、お前は何うしたんだね？』

シトリツはオリガの腰を抱いて再た並木路へ連れ込んだ。

『ねえ、私……お腹が空つたわ！』と、オリガは強ひて笑ひながら言つた。

『嘘を言つては不可ない、嘘を言つては！僕は嘘が嫌ひだから！』と、シトリツは故意と嚴然とした風をして附け加へた。

『私は不幸者ですわ！』と、オリガはシトリツを並木路の中で止めながら詰るやうに繰り返した。『それも非常に幸福であればあるだけ、……益々不幸なんですもの！』と、オリガは優しく柔らかい語調で



言つた。で、ストーリーリツは彼女に接吻した。

オリガは益々元氣附いた。彼女は自分が不幸であるかのやうに軽い意味で冗談を言ふと、急に何も彼も打ち開けたくなつた。

『私、怠屈ではなくつてよ、又、怠屈な筈もないのですもの。之はあなた御自身にも御分りませうし、無論、御自分のおつしやつた言葉も信じていらつしやらないのでせう。又、私は病氣でもありませんの。けれど……私、悲しいわ……何うかすると……それにあなたは——私があなたから隠れることが出来な  
い時なんか、苦痛を與へるお方ですわ！さうよ、何んだか悲しいのよ。けれど、其れが何う云ふ譯かと言ふことは、自分にも分らないのよ！』

オリガは頭をストーリーリツの肩へ載せた。

『さうかい！何故だえ？』と、ストーリーリツは彼女の方へ屈んで靜かに訊いた。

『知りませんわ！』と、オリガは繰り返した。

『けれども、原因がある筈だよ。其の原因が僕の中にもなく、又、お前の周圍にもなければ、お前自身の中にあるのだ。さうした悲しみは、時によると、病氣の前兆のことがあるよ……お前の身體に變りはないかね？』

『さうですね。ひよつとしたら、』と、オリガは眞面目に言つた。『何か其んな事があるかも知れませんが。私は何にも感じませんけれど。あなたも御覽の通り、私は食も進みますし、散歩もしますし、十分

に睡りもしますし、仕事もしてるのでありますもの。私は俄かに何だか不快なものに出會したやうな氣持がしますわ……人生は私にさう思へてよ……之れだけが生活の凡てぢやないやうに……いゝえ、さうぢやないわ、これは皆な詰らないことよ……』

『言つて御覽、言つて御覽！』と、ストーリーリツは生々した語調で言つた。『之れだけが生活の凡てぢやないなら、まだ何んな生活があるんだい？』

『何うかすると、私は怖いことがあるのよ、』と、オリガは續けた。『之が變りやしないかとか、終りになりやしないかなどと思つて……其譯は自分にも分らないのよ！それから又今後何うなるだらうなんて下らない事を考へて心配してゐますの……此幸福が……生活の全體なんでせうか？……』と、オリガは斯の問を恥づるやうに次第に聲を低めながら言つた。『此の喜びと、悲しみと……自然とは……』と、オリガは囁いた。『何時も私を何處かへ引き附けるのですもの。私、まだ何ものにも満足しませんわ……あゝ！私、此の無知が恥かしいのよ……之は空想なんですもの……でも心配なさらくともいゝわ……』と、オリガはストーリーリツの方に愛嬌のいゝ顔を向けながら願ふやうな聲で附け足した。『此の悲しみは程なく過ぎ去つて、私は再々晴やかに、快活になりますわ、丁度今のやうにね！』

オリガは實際に自分の《無智》を恥ぢて、其の赦しを願つてゐるやうに怦々と愛嬌よくストーリーリツに寄り添つた。

ストーリーリツは種々な事をオリガに訊いた。オリガも、病人が醫者に言ふやうに、悲しみの徴候を話し



種々な微かな疑問を述べて、シトリツの前に精神の亂れを描き、それから——此の蜃氣樓が消えたやうに——彼女が思ひ出したり、氣が附いたりした凡てを描いた。

シトリツは頭を胸に垂れたまゝ、再た黙つて並木路を歩いた。彼は驚愕と不審とを感じながら、妻の曖昧な言葉を考へ耽つた。

オリガはシトリツの眼を覗き込んだが、何にも見えなかつた。二人が三度目に並木路の端まで来た時に、オリガはシトリツの方へ顔を向けずに、彼を月の光の射してゐる處に連れ出して、不思議さうに彼の眼を見た。

『あなた、何うなすつて?』と、オリガは恥かしさうに訊いた。『私の無智を笑つていらつしやるのでせう、さうでせう? その方が餘程無智で、その方が悲しい事よ。さうぢやなくつて?』

シトリツは黙つてゐた。

『何うしてあなたは黙つていらつしやるの?』と、オリガは焦々しながら訊いた。

『お前も、僕が疾くにお前を見抜いてゐることを知つてゐるのに、長い間黙つてゐた。だから僕も今、少し黙つて考へさせて貰ひたいんだ。お前の問題はさう易々と解決されないからねえ。』

『でも、あなたが今、考へていらつしやると、一人で考へていらつしやると、それが私には心配になるのよ。詰らないことを言ひましたわね!』と、オリガは附け足した。『何かあなたの方から言つて下さいましよ……』

『俺が何をお前に言ふんだい?』と、シトリツは沈んで言つた。『お前の神経が錯亂してゐるのだよ。』

お前が何うしたのかと云ふことは、僕には分らない、醫者でなくちゃ。明日醫者を呼ばう……でない……』と、シトリツは言ひかけて、再た考へ込んだ。

『(でない)と何うなの?』と、オリガはもどかしさう訊いた。

シトリツは矢張り考へ込んだまゝ歩いた。

『さア、おつしやいな。』と、オリガはシトリツの手を揺りながら言つた。

『それは想像が過ぎるんだらう。お前は非常に元氣がい……が、多分お前の成熟し方が最うそれ程に……』と、シトリツは殆んど獨語のやうに、小聲で言つた。

『おつしやいよ、何卒、アンドレイさん、聞えるやうに! あなたは獨語をおつしやるんですもの、我慢が出来ませんわ!』と、オリガは訴へるやうに言つた。『私、あなたに無智なことを言ひました。あなたは首垂れて何か獨語を言つていらつしやる! 私、あなたと一緒に此の暗がりにあるのが怖い様ですわ……』

『何う言つていゝか……僕には分らない……(悲哀が見附け、或る問題が身慄ひさせる。)お前は此の言葉は何う解釋するね? 二人で再た此の話をしよう。再た海水浴をしなけりやならないらしい……』

『あなたは(若しもとか……多分とか……成熟した)など、獨語をおつしやるけれど、一體何を考へていらつしやるのです?』と、オリガは訊いた。

『僕は斯う思つたんだ……』と、シトリツは徐かに言つた。が、其の言ひ方が沈んでゐて、自分で自



分の考へを信じないやうでもあれば、又、自分の言葉を恥づるやうでもあつた。『いゝかね……斯う云ふ瞬間があるものだ……』竟り、僕が言はうと思ふことは、若し之が一種の錯亂の兆候しるしでなければ、若しお前が本當に健康なならば、多分、お前は成熟して、生活の生長が止まつて、謎が無くなつて……生活が全部開發して了ふ時期に達したと云ふことなどのだ……』

『ぢや、あなたは、私が年老いたとおつしやるのですか？』と、オリガは元氣よく遮つた。『何をあなたはおつしやるのです！』と、彼女はストーリーリツを嚇した。『私はまだ若いのです、強いのです……』と、彼女は附け足たしてぐいと身體を反らした。

ストーリーリツは笑ひ出した。

『何にも怖がることはないよ。』と、ストーリーリツは言つた。『お前は決して老いるものぢやないと思つてるらしいね！そんなことはないよ……老いれば力も無くなるし、生活と戦ふ氣力もなくなる。いや、お前の憂悶と、疲勞とは——それが若し僕の考へてゐる通りであれば——寧ろ力の前兆だと言つていゝ……生々いきした、そして興奮した智慧の要求は、何うかすると、人生の限界を飛び越える。が、無論答を見附けることは出来ない。そして憂悶と……生活に對する一時的の不滿とが現はれる……之は生活の祕密を實現しようとする精神の憂悶だ……多分、お前のも其れなんだ……若しさうとすれば——何にも無智ぢやない。』

オリガは溜息ためいきを吐ついた。が、それは彼女の危險が終つたと云ふ喜びからであつたらしい。オリガは夫

に敗けずに、反つて其の反對に……

『でも、私は幸福ですわ。私の智慧も落着いてゐます。私は空想なんかしてゐません。私の生活は複雑です。——之れ以外に何が要いるでせう？斯んな疑問は何になるでせう？』と、オリガは言つた。『之は病氣です、腐敗です！』

『さうだ、防腐されてゐない暗黒な弱々しい智慧の爲めの腐敗なんだ。此の憂悶と疑問とが多くの人を發狂させたものらしい。他の人達の眼には斯んなものは醜い幻影、若しくは智慧の夢と見えるだらう。』

『幸福の流れが端から端に溢れるやうな生活をしたんです……が、其處に突然或る悲哀の關涉が起るんですもの……』

『さうだ！其れはプロメテイの火に對する價なんだ！それは辛抱しなければならぬばかりか、尙ほ此の憂悶を愛し、疑惑と疑問とを尊敬しなければならぬ。疑惑と疑問とは——生活の充實で、同時に飾なんだ。愚かな希望さへ無ければ、何時いつも幸福の絶頂に現はれてゐるものだ。疑惑と疑問とは日常生活の中に生うまれるものではない。日常生活の中では悲哀や要求を感じるものではない。人の群は歩いてゐる。そして此の疑惑の霧と、疑問の悲しみを知らないのだ……が、一生の中にそれと出會であつた者に取つて其れは打撃ではなくつて、愛らしい客だ。』

『けれど疑惑や、疑問など何うしようもないわ。然ら云ふものは、悲哀と冷淡とを齎あらすもので……それも誰にでも……』と、オリガは曖昧に附け加へた。



『が、それは長い間ぢやない！やがて生活に光明を與へるのだ。』と、シトリツは言つた。『疑惑と疑問とは、何物も出ることの出来ない深淵の中へ引摺り込む、そして更に一層大きい愛を以て再た生活を見させる……疑惑と疑問とは、既に鍊へられた力を眠らせないやうにするものゝやうに、自分の戰場へ呼び出す……』

『霧と幻影とに苦められるのですねえ！』と、オリガは訴へるやうに言つた。『周囲が晴々してゐるのに、突然生活の上に氣味悪い影が横はるのですね！他に方法は無いでせうか？』

『そりやあるとも！生活には支柱があるからね！それが無ければ、疑問の無い生活をするのが厭になるよ！』

『何うすればいゝでせう？捉はれるのですか、それとも批判するのですか？』

『そんな事ぢやない。』と、シトリツは言つた。『堅固な意志で、倦まず憊まず自分の路を行くのみ。僕は達はテイタンぢやないからね。』と、シトリツはオリガを抱き緊めながら續けた。『僕はマンフレードやファウストなどゝ一緒に旋風のやうな問題と猛戦したり、彼等の招集に應じたりしてはならない。頭を垂れて、謙遜に苦しい瞬間を経験するんだ。さうすれば、やがて再た生活と幸福とが微笑む……』

『でも、若しマンフレードやファウストなどが何うしても私達から離れなければ？憂悶が益々私達を苦しめたら？……』と、オリガは訊いた。

『そんなことがあるものか。それに僕は憂悶を生活の新しい元素と思はなければならぬ……いや、

そんなことは無い、そんなことが僕達にあらう筈はない！それは獨りお前の憂悶ではない。全人類共通の病患なんだ。お前にはたゞ其の一滴が飛びかゝつたに過ぎない……人が生活から引き離された時……支柱を失つた時、それは實に怖ろしいことだ。が、僕達には……いや、此のお前の憂悶は、僕が考へた通りのものだ。病氣の前兆ぢやない……病氣の前兆なら心配だし、それこそ悲しむべきことで、僕は其の悲しみの前に防禦力を有たないのだ……けれど、霧や、憂悶や、一種の疑惑や、疑問などは僕達の幸福を奪ひ、僕達の……』

シトリツがまだ言ひ終らないうちに、オリガは狂人のやうに彼に抱き着いて、彼の頭に両手を絡んだまゝ、ワクハンカのやうに暫く情熱の中に我を忘れてゐた。

『霧も、憂悶も、病氣も……死さへも』と、オリガは元氣よく囁いた。彼女は再た幸福で、安心した、そして快活な女になつた。今迄此の時程熱烈にシトリツを愛したことは無かつたやうにオリガには思はれた。

『お前は自分の不平を運命に聞き附けられたり、』と、シトリツは妄信的に言つたが、其の中には優しい警戒が響いてゐた。『運命から感謝を知らない者と思はれないやうにしなければいけませんよ！運命は其の賜物の價値を認めない者を愛さないんだ。今迄、お前はまだ生活を知つたゞけだが、それから生活を試みるやうになるのだ……も少して、生活が活躍して來ると、悲哀と苦痛とが來る……が、其の悲哀と苦痛とが來ると——其の時……斯うした問題は……力を養なつて置かなければならぬ！』と、シト



トリツは靜かに獨語のやうに附け足して、オリガの情熱的發作に答へた。彼の言葉には憂悶が響いてゐて、彼は最う遠くに《悲哀と苦痛》とを見たやうであつた。

オリガはシトリツの沈鬱な聲に暫く驚かされて黙つてゐた。彼女は絶対にシトリツを信じた、彼の聲をも信じた。彼女はシトリツの沈鬱に感染して、頻りに種々な事を思ひ耽つた。

オリガは頑固に思ひ沈んだまゝ、シトリツに凭りかゝつて、機械的にそして徐かに並木路を歩いてゐた。彼女は夫の頃から怗々と遠い生活を眺めた。其處では、シトリツの言葉によると《試み》の時が待つてゐた、其處では《悲哀と苦痛》とが待つてゐた。

オリガは他の夢を見始めた。それは着い夜ではなかつた。それは生活の他の境地が展開されたのであつた。其處は透明ではないが、楽しい靜かな處であつた。彼女は其處で無限の豊富の中に「彼」と二人きりでゐた。いや、其處に彼女は涙で洗はれる消耗と、損失と、避け難い犠牲と、齋の生活と、歡樂の中に生れる慾望から知らず識らず離れて行く生活と、今、二人に氣附かれないでゐる新しい感じから生ずる號泣と呻きとを見た。彼女は再た病氣や、事業の破綻や、夫の死などさへ夢見た……

オリガはぶる／＼と身慄して、力を失なつたが、大膽にも好奇心に驅られて此の新しい生活の姿を見たり、怗々と其の姿を照らしたり、自分の力を量つたりした……が、此の夢の中でも、たゞ彼女の愛だけは變らなかつた。彼女は新しい生活の忠實な番人として立つてゐた。が、彼女の姿は變つてゐた！オリガの燃えるやうな呼吸もなければ、輝やかな光も、蒼い夜もなかつた。幾年か經つと、凡ては、

深い、そして怖ろしい生活が自分の手に入れようとしてゐる遠い將來の愛から見て幼年時代の戯れのやうに思はれた。其處には接吻も、聲も、花束や、花や、自然と生活の歡喜などの中で怗々と交はされる沈んだ話聲も聞えなかつた……凡ては《測んで過ぎ去つたのだ》

其の洞みもしなければ、亡びもしない愛は、生活の力として、彼等二人の顔に——親しい悲哀の一年間に力強く横はり、徐かに且つ無言の裡に變つて行く綜合的苦痛の限附の中に輝き、なほ生活の拷問に對するお互の無限の忍従と、制へられた涙と、聲を發てない號泣との中に聞えてゐた……

オリガを訪づれた霧のやうな憂悶と疑問との中に、遠くはあるが、瞭然した怖ろしい他の夢が靜かに忍び込んだ……

オリガは、安心させるやうな判然した夫の言葉によつて作られた夫に對する無限の信頼の中に憩ひ、自分の謎の様な、そして誰も知らない憂悶と、氣味の悪い未來の怖しい夢とを捨て、大膽に前進した。

《霧》の後には、輝やかな朝が來た。母と主婦との仕事も來た。其處では花壇と野原と、夫の書齋とが手招いてゐた。が、オリガは何の心配もない自己享樂で生活したばかりか、秘められた元氣のいゝ考へで生活したり、準備をしたり、待つてゐたりした……

オリガは益々生育した……アンドレイは自分の女と妻に就いての最初の理想が達せられないことを見抜いた。が、彼は兼て豫期しなかつたことではあるが、自分の姿がオリガに蒼蒼と反映してゐるのを幸福に思つた。



殊にシトリーツの前には、長い間、殆んど一生涯、自尊心の強い傲慢なオリガの眼に映じてゐる男の價値を絶頂に保つてゐようと云ふ大きな心配が立つてゐた。其れは醜い嫉妬の爲めではなく、此の結晶したやうな生活が暗まない爲めであつた。が、之は、彼に對するオリガの信仰が少しでも搖ぎさへすればあり得る事であつた。

多くの女には其んな事は少しも必要がない。女達は、一度嫁に行くと、夫の良い性質でも悪い性質でも従順に受け自分達の爲めに備へられてゐる境遇や、零圍氣など、絶対に和睦する。或は矢張り柔順に最初の偶然な魅力に従ひ、此の魅力に反抗することは出来ないものと認め、若くは反抗する必要のないものと思つてゐるのである。(「運命は情熱で、女は弱い物である」と思つてゐる。

若し夫が智慧を以て——男に於ける此の蠱惑的の力を以て多くの人に秀でゝゐると、然う云ふ夫を持つてゐる女達は、夫の此の優越を或る尊い頸飾として自慢する。此の智慧が女の憫れな頭に分らない場合でも矢張りさうである。が、若し夫が女達の狡猾な下らない、何うかすると醜い生活の小さい喜劇を見抜くやうな場合には、女達に取つて此の夫の智慧は重苦しく窮屈なものである。

オリガは盲目的な運命に従順であると云ふ此の論理を知らなかつた。彼女は女の情熱や衝動を知らなかつた。彼女は自分が選んだ人の中に一度價値と、自分に對する権利とを認めると、其の人を信じ、同時に其の人を愛した。が、信じなくなると、愛もしなくなる。之はオプローモフに對して偽るところによつても分る。

けれども其處ではオリガの足はまだ躊躇してゐた。彼女の意志も動搖してゐた。彼女はたゞ生活を見たり、生活を考へたりしたゞけであつた。たゞ自分の智慧と性格との元素を意識したゞけであつた。ただ材料を集めただけであつた。意識がまだ始まらないうちは、生活の路も察せられるものではない。

が、今、彼女はアンドレイを盲目的でなく、意識的に信じてゐた。アンドレイには彼女の抱いた夫の完全な理想が化身してゐた。オリガのアンドレイに對する信仰が益々強く、そして益々意識的になるだけ、それだけアンドレイは或る頂點に止まつてオリガの智慧や心ばかりか、想像の支配者となつてゐることが六ヶ敷かつた。が、彼女は深く彼を信じて、彼と自分との間に神以外に他の中間者や、他の方法を認めなかつた。

だからオリガは自分の認めた價値に對して露ほども輕蔑を抱かなかつたものらしい。彼の性格、若くは智慧の中にある凡ての虚偽な樂譜は、亂雑な雜音を出すことであらう。破壊された幸福の建物は、彼女を廢墟の下に葬るであらう。若し彼女の力が恢復したら、彼女は捜すであらう……

いや、然うした女は二度と間違をしでかすものではない……さうした信仰と、さうした愛の凋落した後には、恢復は出来るものでない。

シトリーツは自分の充實し、そして波立つた生活によつて深く幸福であつた。其の生活の中には測れない春が咲いてゐた。シトリーツは情熱的に、元氣よく、鋭い眼で見ながら春を培養したり、守つたり、愛撫したりした。シトリーツは、オリガが危機一髪の立場にゐることや、これは豫定の路筋である



こと——一つに融け合つてゐる二人は離れて行くことが出来ることなどを想ひ出した時にだけ、精神の底から恐怖がこみ上げて来るのを感じた。生活の行路を知らないと云ふことは、滅亡的誤謬に陥ることや、オプローモフが……

シトリーツはぶる／＼と身慄した。何うしてだらう！オリガはオプローモフが彼女の爲めに作つた其の生活をしてゐる！オリガは毎日俯つてゐる。彼女は田舎流の奥様であり、自分の子供達の乳母であり、主婦である——たゞそれだけである！

有ゆる疑問と疑惑と、生活の有ゆる情熱とは世帯の心配と、お祭や、お客や、家族の集會などを待つことと、故郷と、洗禮祭と、夫の無感覺と、夫の眠りとに費やされることであらう！

結婚はたゞ形式で、内容でも、方法でも、目的でもなく、訪問と、お客の招待と、午餐會と晚餐會と、詰らないお饒舌りとの廣い不變の輪廓となるのではなからうか？……

オリガは何うして斯んな生活を忍べるだらう？ 最初、彼女は生活の祕密を搜したり、察したりしながら心を動悸々々させてゐる。彼女は泣いたり、苦しんだり、それから其れに慣れたり、肥えたり、食つたり、眠つたり、鈍よりしたりする……

いや、彼女にそんな事はあるまい。彼女は泣いて、煩悶して、病氣をして、愛する人のいゝ無力な夫に抱かれて死んで了ふ……憐れなオリガである！

が、若し火が消えず、生活も終らなければ、若し力が溢れて自由を渴望すれば、若し自由が一瞬間弱

弱しい手で鋭い眼を有つた強い牝鷲のやうに其の翼を振つて、自分よりもつと鋭い眼を有つた強い鷲のゐる高い岩の上に飛び上つたら何うだらう？……憐れなイリヤである！

『憐れなイリヤ君だ！』と、或時アンドレイは過去を想ひ出して言つた。

オリガは此の名前を聞くと、急に縫物を持つた兩手をだらりと膝の上に落し、頭を後に投げかけて、深い物思ひに沈んだ。感歎は記憶を呼び起した。

『イリヤさんは何うかなすつて？』と、やがてオリガは訊いた。『私、知つてはいけなくつて？』  
アンドレイは肩を窄めた。

『でもお前、』と、シトリーツは言つた。『僕達は郵便も無ければ、人々が他處へ行くと、お互に最う死んだ者と思ひ、又實際行方不明になつて了ふやうな時代に生活してゐるのだよ。』

『あなたはお友達の中の何方かに再た手紙を出して御覽になればいゝぢやありませんか。幾らか分りますわ……』

『イリヤ君は例の室の中で健康に生きてゐることを僕達が知つてゐる以外に何にも分りやしまい。之は友達から聞かなくとも分つてゐることなんだ。が、イリヤ君が何うしてゐるか、先生、自分の生活を忍んでゐるか、又、精神的に死んでゐるか、更に生活の火花が腐りつゝあるかと云ふやうなことは、第三者には分らない……』

『ア、アンドレイさん、そんな事をおつしやらないで下さい。私、怖くつて、聞くのも苦痛ですわ！』



私、知りたいのですが、知るのも怖いやうで……」

オリガは泣き出しさうになつた。

『春になつたらペテルブルグに行かう——さうすれば自でに分る。』

『たゞ知つたゞけぢや駄目よ。何から何まで爲てあげなけりや……』

『だつて僕は今迄爲てやつたぢやないか！随分彼には言つて聞かせたり、彼、爲めに心配もしたり、彼の仕事を整理してやつたりしたんだ——が、先生、之には何の反應も現はさないんだからね！僕が傍にゐる時は、種々な事を計畫してゐるが、一寸僕が彼の眼から離れると、直ぐに再た眠つて了ふんだ。宛然醉漢の世話をしてゐるやうなものだ！』

『何故あの方の眼からお離れなすつたんです？』と、オリガは躍起になつて反對した。『あの方には断然たる處置を執らなけりや駄目ですわ。あの方と一緒に馬車に乗せて連れて行かなけりや駄目よ。私達は近いうちに村へ移るのですから、あの方を私達の傍へ呼びませう……あの方と一緒に連れて行きますせう。』

『すると、又、僕達の世話が增えるよ！』と、アンドレイは室の中を彼方へ行つたり此方へ來たりしながら言つた。『そして其の世話には限がないのだ！』

『ぢや、あなたは世話をなさるのが御面倒なの？』と、オリガは言つた。『珍らしいことねえ！私、始めてあなたの世話に對する不平を聞きますわ。』

『僕は不平を言ふんぢやない。』と、アンドレイは答へた。『道理を言ふんだよ。』

『でも、何處から其んな道理が出て來まして？あなたは其んな世話を焼くのが怠屈で五月蠅いとても思ひなすつたのでせう——さうでせう？』

オリガはシトリツを熱心に見た。シトリツは頭を振つた。

『いや、五月蠅いんぢやないが、無駄なんだ。僕は何うかするとさう思ふことがあるね。』

『そんな事はありませんわ、そんな事はありませんわ！』と、オリガはシトリツを遮つた。『私は今週ぢう毎日其の事ばかり考へて心配してゐたのよ。たとへオプローモフさんに對するあなたの友情が消えたとしても、人間に對する愛からあなたはあの方を世話なさらなけりやならないわ。若しあなたが疲れていらつしやれば、私一人で行つて、屹度あの方を連れて來ます。あの方は私の願ひに動かされるに違ひありません。私はあの方が殺されてゐたり、それとも死んでゝもゐたら、泣き悲しむだらうと云ふ氣がしますわ！涙は屹度……』

『彼を廻らせるとお前は思つてるのだらう？』と、アンドレイは遮つた。

『いゝえ、活動に廻らせることは出來ないまでも、少なくとも、あの方に自分の周圍を見廻させたり、あの方の生活を何か良い方へ變へさせたりすることは出來ますわ。オプローモフさんは泥の中にいらつしやるのではなく、私達と一緒に、御自分と程度の同じやうな人の傍にいらつしやるのよ。ですから、私が行きさへすれば、あの方は直ぐに氣が附いて、恥かしいと感ずるやうにおなりですわ……』

『お前は以前の通り、オプローモフ君を愛してゐるのぢやないかね？』と、アンドレイは冗談半分に訊



いた。

『いゝえ！』と、オリガは過去を見返つていゝもゐるやうに眞面目に沈んで言つた。『私は前の通りにあの方を愛してゐやしません。けれどあの方には何んだか私の好きな點があるのよ。私は其れに忠實なのよ。他の人達のやうに變心しませんわ……』

『誰だね、他の人達と云ふのは？言つて御覽、毒蛇さん、噛みついて、毒を注入して御覽、僕かね、何うだね？お前は心得違ひをしてゐるんだ。實際は、僕がお前にオプローモフ君を愛することを教へたんだ。そして、彼の長所は殆んど僕が教へたんだ。僕がゐなかつたら、お前は彼を知らずに彼の傍を通り過ぎたに違ひない。僕が、彼には他の者に劣らない智慧のあることや、其の智慧が種々な不潔物で埋められ、壓へ着けられ、無爲の中に眠つてゐることなどをお前に教へたんだ。お前が望むなら、何故彼がお前に取つて尊く、何故お前が彼を愛してゐるか云ふことを話して聞かせようか？』

オリガは承諾の印に首肯した。

『オプローモフ君には有ゆる智慧より尊いもの、竟り、純潔な、そして誠實な心があるからだ！之は彼の天性の黄金なのだ。彼は此の黄金を今迄少しも瑕瑾つけないやうに持つて來た。彼は衝き落されて冷たくなり、終には殺された者、幻滅を感じた者となり、生活力を失なつて眠つたのだ。が、彼は潔白と誠實とを失はなかつた。彼の心は嘗て虚偽の樂譜を奏でたこともなければ、彼に泥物を近づけたこともない。何んなに飾つた虚偽でも彼を蠱惑することは出来ない。又、何んな物でも彼を虚偽の路に誘ひ出す

ことも出来ない。よし世界中が毒されて、誤りの路を行つても、オプローモフは虚偽の偶像には伏拜しない。彼の精神の中は常に純潔で晴々してゐる……之が結晶したやうな透明な精神なんだ。さう云ふ人間は滅多にあるものぢやない。それは群衆の中の寶石だ！何んなものを持つて行つても、彼の心を買ふことは出来ない。で、何時、如何なる場合でも彼を信用することが出来る。従つて、お前が彼を信じてゐるのも、彼のことを心配するのも、僕には少しも苦痛と思はれない。氣高い氣品を持つた人なら僕も澤山知つてゐるが、彼の心より純潔で、晴やかで、單純な心を僕は見たことがない。僕は種々な人を愛した。が、オプローモフ君くらゐ堅い熱烈な愛を持つた者はなかつた。一度彼を知ると、彼に別れることは出来ない。さうだらう？分つたかい？』

オリガは仕事に眼を落したまゝ黙つてゐた。アンドレイは考へ込んだ。

『其れだけぢやない！まだ何かある！あゝ、さうだ！……』と、シトリーツはやがて我に歸つて快活に附け足した。『鳩のやうな優しさ』をすっかり忘れてゐた……』

オリガは莞爾々々として、急いで縫物を置き、アンドレイの傍に走り寄つて、彼の頸に両手を絡んで暫く彼の眼を輝やかしい眼附で眞正面に見たが、やがて夫の肩に頭を凭せて考へ込んだ。オリガの記憶にオプローモフの溫柔しい沈んだ顔附と、彼の優しい眼附と、控へ目な態度と、別れる時に彼がオリガの譴責に答へた憐れ氣な、そして恥かしさうな微笑とが甦つたのだ……オリガは苦痛を感じ、彼を可哀想に思つた……



『あなた、オプローモフさんを見棄てはなさらないでせうね?』と、オリガは夫の頸から手を除けずに言った。

『決して棄てやしない!不意に僕等の間に深淵か何か開けても、壁が立ち塞がっても……』オリガは夫に接吻した。

『ベテルブルグに行つたら、私をオプローモフさんの許へ連れて行つて下さいまして?』シトリーツは決めかねたやうに黙つてゐた。

『連れて行つて下さるでせうね?さうでせう?』と、オリガは執拗く答へを促した。

『だがねえ、オリガさん。』と、シトリーツはオリガの指先から頸を除けようとしながら言った。『それより先に……』

『いやです、約束して下さいまし。私、譲りませんわ!』

『それはいゝがね。』と、シトリーツは答へた。『たゞ最初はいけないのだ、二度目の時に連れて行くよ。僕はお前の身が案ぜられるのだ、若しオプローモフ君が……』

『そんな事はありません、そんな事はありませんわ!……』と、オリガは遮つた。『私を連れて行つて下さいましね、私達二人で何も片付けませう。あなたお一人では出来ないでせうし、又御厭でせう!』『さうしてもいゝが、お前が病氣にでもなりやしないかと思つてさ、長い間ね。』と、シトリーツはオリガの爲めに承諾を餘儀なくされたのに少なからず不満を感じるものゝやうに言った。

『でもあなたは、』と、オリガは自分の場處に坐りながら言った。『オプローモフさんとあなたとの間に深淵が開けるか、或は壁が立ち塞がるまでは世話を辭さない』とおつしやつたでせう。私、そのお言葉をお忘れせんわ。』

九

平和と静寂とはウイボルグスカヤ・ストロナと、其の石を敷かれない街道と、板を敷いた人道と、淋しい庭と、蕁麻が生え繁つた溝との上に漂つてゐた。溝の傍の塀の下には、頸の綱を切つた一疋の山羊が熱心に草を食つたり、鈍よりと居睡つたりしてゐた。日中は人道を通る書記のハイカラな高い踵の靴の音がしたり、窓に懸つてゐる棉紗製の窓掛が揺れたりした。エラニ草の向から役人の妻君が顔を出したり、或は庭の塀の上から、娘の晴やかな顔がチラリと出ると、直ぐに隠れて、其の顔の後から矢張り晴やかな別な顔が出たりした。それも矢張り姿を消してふと、やがて最初の顔が再た出ると、次の顔に變つた。ブランコに乗つてゐる娘達のキャツ／＼と云ふ聲や笑聲なども聞えた。

プシエニーツイナの家は矢張り森然としてゐた。その屋敷へ入つた人は、生々した歌曲に打たれるだらう。雄鶏と雌鶏とが吃驚した、ら隅々へ逃げ隠れるだらう。犬は吠えながら鎖を引つ張るだらう。アクーリナは牡牛の乳を搾るのを止め、屋敷番も薪割の手を休めて、二人は不思議さうに來訪者を見るだらう。



「誰に御用で御座りやす？」と、屋敷番は訊くだらう。イリヤ・イリイーチの名前を聞いたリ、主婦は在宅かと聞かれたりすると、彼は黙つたまゝ、玄關を指差して再た薪を割り始めるだらう。訪問者は綺麗な砂を撒いた小徑を通つて玄關の方へ行くだらう。玄關の上り段には粗末な清楚した絨氈が敷かれてゐる。呼鈴の燦々と磨かれた銅製の柄を引くと、アニシヤか子供達か、扉を開けるだらう。何うかすると主婦が自から開けることもあれば、ザハールが開けることもある。が、ザハールが開けるのは他に誰もゐない時に限る。

アシエニーツイナの家にある凡ての物は、世帯の豊かな事を示してゐる。斯んなことは、以前、アガフィヤ・マトウエーウナが兄と一緒に暮してゐた時分に見ることが出来なかつた。

料理部屋や、貯蔵室や、食事室などには——食器や、大きな鉢や、小さい鉢や、圓い鉢や、楕圓形の鉢や、汁注器や、茶碗や、積み重ねた皿や、鐵の壺や、銅の壺や、素焼の壺などが裝飾屋の手で並べられてゐた。

戸棚の中には、疾くに質受して、もう今では決して質屋に持つて行かれることのない主婦の銀の器や、オプロームの銀の器などが並べられてゐた。

幾並かの大きな下服れになつた繪の附いた急須や、平凡な陶器製茶碗などがあつた。陶器茶碗には繪が描いてあつたり、鍍金してあつたり、徽章や、燃えるやうな心臓や、支那人などが描いてあつたりした。珈琲や、肉柱や、華などの入つた玻璃壺も、水晶の茶器も、バター酢などの入つた薬味臺もあつた。

それから、何の棚にも薬袋と、壘と、家庭薬や、薬草や、ガーゼや、膏藥や、魔睡劑や、カンフルや、散薬や、香料などの入つた小箱とがごた／＼と積み重ねてあつた。其處には石鹼もあれば、レースを洗濯したり、汚點を抜いたりする道具や、其他種々な物があつた——そして其れが皆な吾々の見慣れた田舎の家の世帯かぶれた主婦の許に見るやうな物であつた。

アガフィヤ・マトウエーウナは斯んな附屬品の一ぱいに入つてゐる戸棚の扉を突然に開けると、種々な薬品の匂ひがぶんとするので、最初は暫らく顔を側へ向けるのであつた。

物置の天井には、鼠を豫防する、バター砂糖や、燻腿や、乾した魚や、チューホン人から買つた栗實を入れた袋などが懸け廻されてゐた。

床にはバタの樽や、大きな蓋のある酸乳皮の入つた壺や、卵の入つてゐる籠などが置いてあつた——其他種々様々な物があつた！家庭生活をしてゐる此の小さい櫃の有ゆる隅々や、有ゆる棚の上にある物を残らず確實に算へ上げるには、新しいホームーの筆がなくてはならない。

料理部屋は、偉い主婦と、彼女の大切な助手なるアニシヤとの活動にきちんと立派に整頓してゐた。何でも家にあつた。何でも手近に、其れ／＼の場處にあつた。何でも順序だつてゐて、清楚してゐた。で、若し此の家ちうで一ヶ處でも光線も、新鮮な空氣の流も、主婦の眼も、素敏つく、そしてよく働らくアニシヤの手も入らない處があつたとすれば、それはザハールの室、若くは彼の集であつた。

ザハールの室には窓が無かつた。で、永久の暗闇が人間の住家を薄暗い獸の穴のやうにしてゐた。主



婦が時たま片附けたり、掃除をしたりするつもりでザハールの室へ入ると、ザハールは、刷毛や、靴擦れや、靴などが何處どこに何うどなつてゐなけりやならないと言つて片附けることは女の仕事でないとか、彼の衣服が床の上にうづ高く積まれてあらうが、蒲團が燂爐の蔭の片隅に埃だらけになつてゐようが、そんな事は誰にも關係した事ぢやないとか、此の衣服を着、此の蒲團の上に寝る者は「彼」で、彼女ではないなど、頑固なことを言ふのであつた。又、ザハールが自分の室の中に大事にして置く箒や、板や、二つの煉瓦や、樽の底や、二つの薪片などに就いて、彼は斯んな物が無ければ世帯は立つて行くものでないと言ふだけで、其れが何う云ふ理由わけだと云ふことに就いては言はなかつた。其ればかりか、埃や、蜘蛛の巣さへ彼には何の妨げにもならなかつた。竟り、一言で言へば、彼は料理部屋にゐる彼等の所には鼻を出さないから、自分にも構はないで貰ひ度いと言ふのであつた。

彼はアニシャならば時々自分の室に入れたが、それでは矢張り毛嫌はげらひして、例の通り、眞面目まじめに眩くらんで彼女の胸を突くやうにした。で、アニシャは彼を見るを怖がつてゐた。イリヤ・イリーチは自分の監督の下に、家事一切が段々都合よく行くやうになるに従つて益々嚴重に見廻つたり、指圖したりしたが、その爲めに室ぢうむろを歩いてゐる時など、ザハールの室の扉口から頭だけ突き込んで、其處そこにある物をチラリと見ると、直すぐに唾つばを吐はいて一言も言はなかつた。

『誰を連れて来るんだ！』ザハールはイリヤ・イリーチと一緒に、自分の始末が少しでも變つてゐるといふがと思ひながら遣やつて來たアイカフヤ・マトウエーウナと、アニシャとは斯う囁くのであつた。やが

て彼は顔全體で彼獨特の笑ひ方をした。其れが爲めに眉と頬鬚とは側の方に押し遣られた。

他の室は何處もピカ／＼光つてゐて、清潔で、晴々してゐた。古い色の褪せた窓掛も無かつた。が、客間と書齋との窓と扉とは、青緑の幕と、赤い邊飾へりかざりのある棉紗製の窓掛とで蔽はれてゐた——皆なアガファイヤ・マトウエーウナの手の仕事であつた。

枕も雪のやうに眞白で、天井に達とどく程ふうわりと持上つてゐた。蒲團も絹で、ふわ／＼と柔らかいものであつた。

主婦の室には、幾週間も開牌臺が離れ離れに置いてあつたり、くつ／＼け合はされたりしてゐた。其の卓子の上にはイリヤ・イリーチの蒲團や夜着などを擡たげられてゐた。

アガファイヤ・マトウエーウナは自分で手づから綿を擡たげたり、入れたり、蒲團や、衣服を解といたりした。其んな時には、彼女は自分の頑丈な胸を仕事に打ち込み、仕事に熱中して、口で糸を噛み切りながら、疲れも忘れて仕事をした。そして此の夜着や、蒲團は偉いイリヤ・イリーチに着られ、彼を温め、愛撫し、休ませるのだと云ふ謙遜な考へで自分自分を慰さめてゐた。

オブローモフは毎日自分の長椅子の上に横はつて、主婦の素肌な腕が、針と糸との後について、前後に動くのに見惚れてゐた。又、彼は糸の通とほる音や、アツ／＼と噛み切られる糸の音などを聞きながら、オブローモフカにでもゐるやうに假睡ふとろむことも度々あつた。

『最もう仕事を止めてもいゝでせう、疲れたでせう！』と、オブローモフは主婦に注意をした。



『神様は働くことが好きなんですもの！』と、彼女は仕事から眼と手を離さずに答へた。

オブローモフの許へ持つて来る珈琲は、最初、竟り何年か前、彼が此の室へ轉つた時のやうに、念入で、綺麗で、そして甘かつた。臓腑の入つたソップも、乾酪の入つた麩も、燻腿も、肉羹も、例の雞も——皆な嚴格に順序を守つて交る交る出された。之等は小さい家の單調な日に楽しい變化を與へるものであつた。

兩側に菜園があるお蔭で、何物にも遮られない太陽の光線は、午前と午後には方面を換へて、朝から晩まで喜ばしきうに窓に射してゐた。

カナリヤは快活に轉つてゐた。エラーニ草と、時々子供達が伯爵の庭から貰つて来る風信草とは小さい室の中に、清楚したガワンの草卷や、肉桂や主婦が根氣よく眩を動かしながら搗いた華などの匂と混つて、心地の良い芳烈な匂を漂はしてゐた。

イリヤ・イリーチは丁度、金縁を嵌められたやうな生活をしてゐた。で、晝と、夜と、四季との平凡な姿は、視眼鏡を見てゐる時のやうに變つた。が、他の變化、殊に多く苦痛を與へる混濁した沈澱物を全部生活の底から掻き上げるやうな大きな偶発的な出来事は無かつた。

シトリツが主婦の兄から横領的な借用證を取り返し、兄とタランチェフとが全くイリヤから遠ざかつて了つた時から、彼等と一緒に有ゆる憎むべき者は、イリヤ・イリーチの生活から遠ざかつて、今、彼を取り圍んでゐる者は、平凡で、善良で、愛らしい人達ばかりであつた。彼等は皆な自分の生活

でオブローモフの生活を守り、彼を援けて、彼に生活を意識させないばかりか、其れを感じさせもしたかつた。

アガフィヤ・マトウエーウナは自分の生活の頂點にあつた。彼女は活々として、以前には感じたことのない生活の充實を感じてゐた。が、以前のやうに其れを口に出して言ふことは何うしても出来なかつた。否、寧ろそんな感じは、彼女の頭に浮ばなかつたと言つた方が當を得てゐるかも知れない。彼女はたい、イリヤ・イリーチの生命の長からんこと、イリヤを有ゆる《悲哀と憤怒と窮乏》とから免れしむることを神に祈るだけで、自分と、自分の子供達と、家全體とを神の御旨に全然委ねてゐた。だから彼女の顔は何時も變ることのない幸福を、即ち充實し、満足し、そして希望のない、従つて珍らしい、他の人にはあり得ない幸福を現はしてゐた。

オリガは肥えた。胸も肩も例の満足と充實とに輝やいてゐた。眼にはたゞ淑さと、世帯の世話とが光つてゐるだけであつた。氣品や落着も彼女に歸つた。彼女は以前、従順なアニシヤや、アクーリナや、屋敷番などの中で一家を切り廻してゐる時分、此の氣品と落着とを有つてゐたのであつた。彼女は以前の通り、戸外に出かけるやうなことなく、戸棚から料理部屋へ、料理部屋から物置へと泳ぐやうに往復してゐた。そして自分の爲てゐることに十分の意識を持つて、適度に落着いて用事を言ひ附けてゐた。アニシヤも以前よりは一層元氣よくなつた。と云ふのは、仕事が増えたからである。彼女は絶えず身體を動かしたり、あたふたしたり、駈け廻つたり、働らいたりしてゐた。そして其れが皆な主婦の指圖



に従つてゐるのであつた。彼女の眼も益々輝やかしくなつた。彼女の鼻も、例のお饒舌な鼻も、例の通り、彼女自身より反つて人目を惹き、仕事や、考へや、計畫などの爲めに赤くなつた。舌は黙つてゐても例の通りお饒舌をしてゐた。

二人の女は其れも其の位置と務との性質に相應した衣服を着てゐた。主婦には大きな戸棚があつて、其の中には絹の洋服や、マントや、外套などが澤山に入つてゐた。頭巾も河向うのリテナヤ街道の近くに注文したのだし、靴もアフラクシンから買はずに、ゴステイノイ商店から仕入れたのであつた。帽子など——モルスカヤ街道から買つて来たとは驚くではないか！ アニシヤも少し洒落た時には、殊に日曜日などには、毛織の衣服を着てゐた。

たゞアクリリナだけは相變らず裾を帯の間に挟んで歩いてゐた。屋敷番なども、暑中できへ短かい毛皮の外套を離すことが出来なかつた。

ザハールに就いては何にも別段言ふことはない。彼は鼠色のフロックコートから自分の短かい上衣を作つてゐた。が、彼の穿いてゐるズボンは何んな色をしてゐるかとか、彼のカラは何んな品であるか云ふことは、決めることが出来なかつた。彼は靴を磨くと、眠るか、門の傍に腰掛けて、時々通る人達を鈍よりと眺めてゐるか、又は、近所の小店へ行つて坐り込むか、兎に角、彼が以前、最初はオブローモフカで次にはゴロホーワヤ街道で爲たと同じことを爲てゐた。

○ちや、オブローモフ自身は何うしたらう？ オブローモフ自身は、此の平和と、満足と、波瀾のない静

寂との完全な、そして自然な反映であり、表現であつた。彼は自分の境遇を見たり、考へたりして、益深く其の境遇の中に蒸溺してゐた。が、遂々、自分には最う何處へも行く處はない、求めるものもない、自分の生活の理想は、故郷の村の百姓や召使達の間には於ける貴族的な廣い悠然とした生活の流れを嘗て想像した時の其の詩や色彩を帯びてゐないにしても、兎に角實現されたのだと決めてゐた。

オブローモフは、場處と一つは時とを異にするだけで、矢張り例のオブローモフの生活の繼續として自分の現在の状態を見てゐた。此處でも、オブローモフカに居る時分のやうに、彼は安價に生活を見限り、其の生活の中に、波瀾のない平和を得ようとしてゐた。

オブローモフは生活の退屈なそして苦痛な要求と威嚇と、大きな喜が電光のやうに閃めき、大きな悲哀が落雷のやうに突然に鳴り響くやうな場處と、虚偽な希望や、幸福に對する壯麗な幻影などが戯れ、人間が自分の考へに呑み込まれたり、悲しませられたりし、情慾が人間を殺し、智慧の興廢があり、人間が戰場にゐるやうに斷えず戦ひ、全身傷だらけになる程戦つても、矢張り飽滿することのない場處とから遁れ得たことを内心喜んでゐた。彼は戦に於て得られる快樂を味はひもせず、故意と快樂を避けて、活動と、生活と、争闘とのない古い境地にだけ精神の平靜を感じてゐた。

けれども、彼の心に想像が沸き上り、古い追憶と、實現されなかつた空想とが頭を擡げ、それ以外の生活をしなかつたことに對する良心の呵責の囁きを聞くと——彼は穩やかに眠つてゐられなかつた。眼を醒すと直ぐに蒲團から飛び起きた。何うかすると、彼は世の人達が大事な人が死んだ時に、其の人が



まだ生きてゐる時分、十分なことをしなかつたと云ふ苦しい意識を感じて泣くやうに、永久に消え去つた輝やかな生活の理想に絶望した冷たい涙に泣くことさへあつた。

やがて彼は自分の周囲にあるものを見廻したり、一時的の幸福を味つたり、火事のやうな夕映の中に夕日が静かに、そして平和に隠れて行くのを沈思の中に眺めながら心を落ち着けたりして、遂々自分の生活は斯く平凡に、無意味に組み立てられてゐるばかりか、斯う作られ、運命づけられてゐるのだとさへ決心し、なほ之が、人生には理想的な平静があり得ると云ふことを現はすものだと思つた。

他の人達は人生に戦慄する方面を作つて、創造力と破壊とで人生を動かす役目を持つてゐるのだ、皆な其れ／＼自分の使命を持つてゐる！ と、斯うオブローモフは考へた。

オブローモフカのプラトールが作り上げ、種々な問題や、義務と使命との厳格な要求などの中に彼が自分の慰藉にしてゐた哲學は之であつた！ 彼は此の世に生れて以來、闘戯場の闘士として教育されずに、闘戯の平和な観客として教育されたのであつた。彼の臆病な、そしてだらけた精神に取つて、幸福の慄へと、生活の打撃とを忍ぶことは出来なかつた——それで彼は生活の或る一面を作つて、其の中に何物かを獲たり、交換したりすることをしなかつたし、又、何事も悔ゆるやうなこともなかつた。

年齢をとるに従つて、彼の胸騒ぎと悔恨とは益々少なくなつた。彼は、生活を厭うて曠野に去つた老人が自分の爲めに墓を掘るやうに、自分の手で作つた平凡な、そして大きな棺の中に、静かに、徐々と自分の餘生を入れてゐた。

彼は最う村を整理しようとか、一家を擧げて村へ行かうとか云ふことを空想しなくなつた。シトリーツが定めて呉れた監督人は降誕祭毎に几帳面に、よく収入を整理して送金して呉れた。百姓達も、穀物や生活費などを持つて来て呉れた。で、彼の家は益々豊かになり、益々楽しくなつた。

イリヤ・イリイチは一對の馬さへ準備した。が、彼獨特の用心から、其れも三度くらの鞭を當てなければ玄關から動き出さないやうな馬であつた。最初の二た鞭で一頭の方の馬が足踏をして側の方へ動き、それから他の一頭が足踏をして側の方へ動き、最後に頸と、脊と、尾とをぐいと伸して一度に二頭が動き出し、頭を振りながら走り出す。此の一對の馬が馬車を曳くのはワニーヤがネワ河の對岸にある中學校へ行く時と、主婦が種々な買物に出かける時とであつた。

乾酪週間や光明週間などには主婦の家族ばかりか、イリヤ・イリイチ自身さへ散歩や見世物小屋に出かけた。たまには席を取つて置いて、一家擧つて劇場に行くことさへあつた。

夏になつて、イリインスキイの金曜日には、郊外のポロホーウイエ、ザウオードイに皆なで行つた。生活は悲惨な變化を齎らさずに普通の現象によつて流れて行つた。若し生活の打撃が小さい平和な境地に少しも入つて来なければさう言ふことが出来る。が、不幸にして落雷が山の土臺を揺かし、廣い空間を震動させると同時に、鼠の穴にも響き渡ることがある。其の響は弱くて微かなものではあるが、然し鼠の穴に取つては酷く影響する。

イリヤ・イリイチはオブローモフカに居る時のやうに甘さうに大食をした。そして矢張りオブロー



モフカにゐる時のやうに氣情さうに僅か歩き、僅か働いてゐた。彼は盛りの年配であるにも拘らず、暢氣に酒や、スグリ製の火酒を飲み、更に暢氣に、更に長い間、午睡をしてゐた。

ところが、突然に之がすつかり變つた。

或る時、オプローモフは何時もの通り、休んで、午睡をして、長椅子の上に立たうとすると立てなかつた。何か言はうとしたが——舌が利かなかつた。彼は吃驚して、たゞ手を振りながら誰か助けに来て呉れと呼ぶだけであつた。

之が若しザハールと一緒に暮してゐるだけならば、朝になるまで手で合圖をして、終には死んで了ひ、翌る日になつて皆な其の出来事を知るのであるが、主婦の眼は神の眼のやうに彼を見てゐたので、彼女の心は、オプローモフに訊かないでも彼が何うかしてゐることを察した。

彼女が之を察すると直ぐに、アニシヤは最久醫者を呼びに車で駆け出した。が、主婦はオプローモフの頭に氷を載せ、同時に祕密の戸棚から酒精や、ガーゼなどを取り出した。遣り慣れた事と、聞き覺えた事とは残らず應用された。ザハールでさへ此の時、片方の靴を穿かせ、更に一方の靴を穿かせようとして主人の傍で醫者や、主婦や、アニシヤと一緒に心配した。

イリヤ・イリイチは正氣に歸つた。醫者は血を調べて見て、中風症だから、彼の生活状態を變へなければいけないと言つた。

火酒や、麥酒や、酒や、珈琲や、其他或る三四の物と、脂濃い物と、肉類と、藥味などは一切彼に禁

じられた。そして其の代りに毎日運動することを、夜分の適度な睡眠とを命ぜられた。

アガファイヤ・マトウエーウナが見てゐなければ此の命令も實行されないのだが、彼女は家ぢうの者が皆た彼女の言ふことを聞いた爲めに醫者の命令を實行することが出来た。彼女は狡猾なことをしたり、愛嬌よくしたりしてオプローモフに酒を飲みたいと云ふ誘惑的な希望を棄てさせると同時に午睡や、脂濃い煙腿を食べさせなかつた。

オプローモフが居眠を始めると、彼女は室の中で故意と自分で椅子を倒したり、隣の室で不用の古い食器をチャリと壊す音を發てたりした。でなければ子供達が騒々しくした——向へ走つて行つて貰ひ度い程騒々しくした！若し之で駄目な時は、主婦の優しい聲が響き渡つた。彼女はオプローモフを呼んで、何事かを訊いた。

庭の小徑は菜園に通じてゐた。イリヤ・イリイチは朝晩此の小徑を二時間宛散歩した。彼と一緒に主婦も散歩をした。が、主婦に用事があつて出来ない時は、マーシヤか、ワーニヤか、或は古くからの知合で、返事の少ない、そして誰にでも従順な、又、何事にでも同意するアレクセーエフかと一緒に歩いた。

丁度今、イリヤ・イリイチは、ワーニヤの肩に凭りかゝりながら小徑を徐かに歩いてゐた。ワーニヤは最久殆んど青年で、中學校の正服を着、イリヤ・イリイチの歩き方に倣つて、自分の活潑な急しない歩き方を慎しんでゐた。オプローモフは片足で不自由らしく歩いてゐた……中風症の結果である。



『さア、ワニユーシヤ、室へ行かう!』と、オプローモフは言つた。

二人は扉口の方へ行かうとした。と、びつたりアガファイヤ・マトウエーウナに出會した。

『斯んなに早く何處へいらつしやるの?』と、彼女は徑を遮りながら訊いた。

『早くはありませんよ! 僕等は最う二十回も往復したんです。此處から塀まで五十サーヂェンあるとすると、二露里も歩いたことになるぢやありませんか。』

『幾度往復したの?』と、彼女はワニユーシヤに訊いた。

ワニユーシヤは口吃つた。

『嘘でせう、よく私を見てお言ひなさい!』と、彼女はワニユーシヤの眼を見ながら嚇した。『私は最う分つてゐる。日曜日にお客に遣らないから、さう思ひなさいよ。』

『いゝえ、お母さん、本當はね、私達……十二回往復したんです。』

『何を言ふんだ、ワニユーシヤ、再た嘘を吐いてゐる!』と、オプローモフは言つた。『君はアカシヤの枝ばかり引千切つてゐたんだ。が、僕は一々算へてゐたよ……』

『いゝわ、も一度歩いていらつしやい! 私の方ではまだ羹も出来上らないのですから!』と、主婦は決めて、彼等の前の扉をボタンと閉めた。

オプローモフは仕方なしに、更に八回算へて室へ入つた。

室の中の大きな丸形の卓子の上には羹が煙つてゐた。オプローモフは自分の場處になつてゐる長椅子

の上に一人腰掛けた。彼の傍の右側の椅子にはアガファイヤ・マトウエーウナが腰掛け、左にある小さい動くやうになつた子供の椅子には三歳になる何處かの乳呑兒が坐つてゐた。此の兒の傍には最う十三歳にもなる娘のマーシヤが腰掛けてゐた。其の傍にワニーヤ、それから丁度此の日に來合せたアレクセーエフがオプローモフの眞向うに何れも腰掛けてゐた。

『まア、お待ちなさいな、私、まだあなたにエルシ(魚)を上げるのよ。脂濃い良いのが手に入りましたから!』と、アガファイヤ・マトウエーウナはエルシの皿をオプローモフの前に置きながら言つた。

『之に肉入麵麩があつたらいでせうね!』と、オプローモフは言つた。

『私、忘れてゐましたわ、すつかり忘れてゐましたわ! 實は晩方からそのつもりでゐたのですが、近頃私は物憶えがすつかり駄目になりましたね!』と、アガファイヤ・マトウエーウナは取り繕つた。『それにイワン・アレクセーイチさん、あなたのカツレットにキヤベツを添へるのを忘れて、』と、彼女はアレクセーエフの方へ向いて付け加へた。『悪く思はないで下さいましね。』

再た彼女は取り繕つた。

『何に、私は食物には一向頓着しませんから。』と、アレクセーエフは言つた。

『何うしてアレクセーエフ君に豌豆の入つた豚腿かピフテキでも作つてやらなかつたのです?』と、オプローモフは訊いた。『アレクセーエフ君は之れが大好きなんだ……』

『イリヤ・イリイチさん、私、自分で行つて見ましたが、上等の牛肉が無かつたのですもの! ですか



らあなたには櫻の舍利別から糖菓を作らせたのよ。あなたのお口の上品なことは私存じて居ります。」と、主婦はアレクセーエフの方に向ひながら附け加へた。

糖菓はイリヤ・イリイチにも毒になるものでなかつた。だから何事にも同意するアレクセーエフも糖菓を喜んで食ふなければならなかつた。

晝餐が済むと、オプローモフは誰の言ふことも聞かずに轉りと横になつた。彼は何時も其處の長椅子の上に仰向に寝轉んでゐたが、それは僅かに一時間ばかりであつた。主婦は彼を眠らせない爲めに長椅子の上で珈琲を注いだり、絨氈の上で子供達を遊ばせたりするので、イリヤ・イリイチも仕方なく其の仲間に入らなければならなかつた。

「最うアンドリユーシヤを構ふのは止すがいい。アンドリユーシヤは今泣き出すよ！」オプローモフはソニーニチカがアンドリユーシヤに構つてゐた時ソニーニチカに言つた。

「お母さん、そら、アンドリユーシヤが椅子に衝突する！」と、オプローモフはアンドリユーシヤが椅子の下に匂い込んだ時に、心配さうに警戒した。

マーシヤは(弟)を抱き起しに走つて行つた。マーシヤはアンドリユーシヤを(弟)と言つてゐた。暫く周囲は森然とし。主婦は珈琲が出来たか何うかを見る爲めに料理部屋へ行つた。子供達は溫柔しくなつた。と、室の中に軋聲が聞えた。其の軋聲は最初は制音柱の下にゐるやうに静かであつたが、段々それが強くなつて、アガフィヤ・マトウェーウナは湯氣の立つてゐる珈琲茶碗を持つて來た時に、ヤ

マの百姓屋の中で聞くやうな軋を聞いて吃驚した。

彼女は詰責るやうに頭を振つてアレクセーエフを見た。

「私は起したんですが、オプローモフ君は聞かないんです。」と、アレクセーエフは自分の辯解をするやうに言つた。

彼女は急いで珈琲茶碗を卓子の上に載せ、床からアンドリユーシヤを抱き上げて、靜かに彼をイリヤ・イリイチの長椅子の上に下した。乳呑兒はイリヤ・イリイチの傍をごそくと匂ひ、顔の傍まで行つて彼の鼻を掴んだ。

「あゝ！何だ？誰だ之は？」と、イリヤ・イリイチは目を醒して不安さうに言つた。

「あなたが眠つていらつしやるから、アンドリユーシヤは匂ひ上つて、あなたを起したのよ。」と、主婦は愛嬌よく言つた。

「何時私は眠りました？」と、オプローモフはアンドリユーシヤを抱きながら辯解した。

「アンドリユーシヤが手で私に匂ひ上つたのを私が知らなかつたと言ふのですか？私はすっかり知つてゐましたよ！あゝ、此の惡戯つ兒、鼻を掴んだな！さア、此度はお前のを！そら、立つて御覽、立つて御覽！」と、オプローモフは乳呑兒に愛想しながら、彼を床の上に下してホツと溜息を吐いた。「イワン・アレクセーエフ君、何か話をし給へ！」と、彼は言つた。

「イリヤ・イリイチ君、すっかり話して了つたんだ。何を話さうか。」と、アレクセーエフは答へた。



『でも、何にも無いはずはないだらう？ 君は人仲ひとなかに出るぢやないか、何か珍らしい事はないかね？ 僕は君が本を讀んでゐると思ふがね！』

『たまには讀むさ。だが、大概、他の人が讀んだり、饒舌しゃべつたりしてゐるのを僕は聞いてゐるのだ。昨日もアレクセイ・スピリドマイチの許この息子の大學生が朗讀したつけ……』

『何を讀んだね？』

『イギリス人のことをさ。イギリス人は小銃と火薬とを何處かに輸送してゐるさうだ。アレクセイ・スピリドマイチは戦争が始まるのだつて言つてゐたがね。』

『イギリス人は何處へ輸送してゐるんだね？』

『なんでも伊太利か印度だよ——よく憶おぼえないが、兎に角、公使が非常に不平を言つてゐるさうだよ。』

『何國の公使がさ？』と、オプローモフは訊きいた。

『それは忘れて了つた！』と、アレクセーエフは鼻を天井の方へ向け、頻りに記憶を辿りながら言つた。

『何國と戦争をするんだらう？』

『土耳其のパーシャとやるらしいね。』

『それから政治上には最もう珍らしい事はないかね？』と、イリヤ・イリイチは暫く黙つてゐた後で訊いた。

『さうだ、地球が段々冷却して行くから、何時かはすっかり凍つて了ふことがあると書いてあつたね。』

『何だ！其れが政治の事かね？』と、オプローモフは言つた。

アレクセーエフはどぎまぎした。

『ドミトリイ・アレクセーイチ君は最初政治のことを讀んでゐたが。』と、アレクセーエフは辯解した。

『段々何事かを讀み上げて、夫が終つた時には別な事になつてゐた。が、夫は文學のことであつたんだ』

『なに、先生が文學のことを讀んだ？』とオプローモフは訊きいた。

『さうだ。一番いゝ作家はドミトリエフや、カラムジンや、バチューシコフや、ジュコーフスキイなどだなんて讀んでゐた……』

『ぢや、プーシキンは？』

『プーシキンのことは讀まなかつたね。私も矢張り何うしてプーシキンの名前が出て來ないのだらうと思つたね！プーシキンは偉おでえな天才だからね。』と、アレクセーエフは偉大おどろのおどろを、えと發音しながら言つた。

沈黙が來た。主婦は仕事を持つて來て、時々イリヤ・イリイチや、アレクセーエフを見たり、何處かで亂暴に騒いでゐないかとか、料理部屋でザハールとアニシヤとが喧嘩をしてゐないかとか、アクーリナが食器を洗つてゐるだらうかとか、戸外モトの木戸が軋ゆりはしないかとか、竟り、屋敷番が『事務室』に忍んで行きはしないかと、鋭く聞耳を立てながら針を動かし始めた。

オプローモフは靜かに黙つて考へ耽つてゐた。此の沈思の状態は、夢現ゆめうつの状態であつた。彼は意志を



何物にも集中せずに、暢氣に、思ふまゝに考へたり、心臓の正調な鼓動を靜かに聞いたり、時々、何物をも見てゐない人のやうに悠やかに瞬きしたりしてゐた。彼は茫然として謎のやうな状態、竟り、錯覺の状態に陥つてゐた。

人は何うかすると時々、短かい沈思の瞬間に陥ることがある。それは、自分が何時か、又は何處かで經驗した瞬間を今再た經驗してゐると思つた時である。何うかすると人は、今自分の前に生じてゐる現象は夢で見たのであつたらうか、それとも以前よく憶えてゐて今忘れた事ではなからうかと考へることがあるが、あの時見た人物が今、自分の傍に腰掛けてゐることや、一度聞いたことのある言葉であることなどは分つてゐる。想像は人を再た以前の處に連れて行くものではない、記憶は過去を甦らせるものではなく、寧ろ沈思に陥れるものである。

今のオブローモフが其れであつた、彼の上には何處かで會つたことのある靜寂の影が宿つてゐた。見覺えのある時計の振子が推してゐた。ブツリ／＼と糸を噛み切る音も聞えてゐた。何度も聞いたことのある言葉や囁き聲も繰り返されてゐた。

『あら、何うしても糸を針の目に通すことが出来ない。さア、マーシヤ、お前の眼の方がいゝ！』

オブローモフは氣惰るさうに機械的に、恍惚と主婦の顔を見た。彼の追憶の奥底からは何處かで見覺えのある光景が湧き出た。彼は何時、何處で斯んな事を聞いたらうと思つて頻りに考へた……

と、彼の眼には、父の家の蠟燭で照された大きな薄暗い客間が映つた。其處の卓子の周圍には死んだ

母と、母のお客達とが腰掛けてゐた。母もお客達も皆な黙つて縫物をしてゐた。父も黙つて歩いてゐた。現在と過去とが出會してこんぐらがつた。

彼は更に約束の土地へ行き着いた夢を見た。其處には蜜と乳との河が流れてゐた。人々は皆な働らかずに麵飽を食べてゐた。そして金銀の飾を付けて歩いてゐた。

彼は夢の物語や、前兆や、風の音や、ナイフの音などを聞いてゐた。又、乳母に抱きついて乳母の老い耄れた慄へ聲にも聞き惚れてゐた。

『ミリトリリーサ・キルビチエーウナさんです！』と、乳母はオブローモフに一人の女を指差し乍ら言つた。

オブローモフには、あの時のやうに蒼空に雲が漂ひ、あの風が窓を吹いて彼の頭髪を弄つてゐるやうに思はれた。窓の下にはオブローモフカの七而鳥の雄鶏が一羽歩き乍ら、鳴いてゐる様にも思はれた。

と、突然に犬が吠え出した。お客が來たらしい。アンドレイが父親と一緒にウエルフリョーウオ村から來たのぢやないだらうか？若しアンドレイが來たのならオブローモフに取つて何んなに楽しいか知れない。實際、彼らしい。足音が段々近くなつて扉が開いた……（アンドレイ君だ！）と、オブローモフは言つた。實際、彼の前にはアンドレイが立つてゐた。が、それは子供ではなくつて、成年期に達した男であつた。

オブローモフはふと我歸つた。と、錯覺から醒めて、正氣になつた彼の前には本當のシトリツツが立つてゐた。



主婦は急いで乳呑兒を抱へ、机の上の自分の仕事も片付けて、子供を連れて向うへ行つた。アレクセーエフもゐなくなつた。シトリツとオプローモフとは、たつた二人きりになつて、黙つたまゝ凝つとお互に見合つてゐた。シトリツは直ぐにオプローモフの状態を見抜いた。

『君、君はアンドレイ君かね？』と、オプローモフは昂奮の爲めに辛つと聞えるくらゐの聲で訊いた。戀をしてゐる人は自分の妻に長い間別れてゐた後で會つた時に斯んな訊き方をする。

『さうだ。』と、アンドレイは靜かに言つた。『君は變りなく健康かね？』

オプローモフはシトリツに抱き附いて、しつかり彼を抱きしめた。

『あゝ、』と、オプローモフは長い間心の中に蟠まつてゐた悲しみと喜びとの凡ての力を此の『あゝ』とぶふ嘆息の中に籠めて、後長く答へた。其の悲しみと喜びとは、別れて以來、一度も誰にも何物にも言ひ現はしことのなかつたものらしかつた。

二人は腰掛けて、再た凝つとお互に見合つた。

『君は健康かね？』と、アンドレイは訊いた。

『あゝ、今はお蔭で。』

『ぢや、病氣でもしたのかね？』

『さうだ、アレクセイ君、僕は中風に罹つたんだ……』

『本當かね？あゝ！』と、アンドレイは吃驚して、同情するやうに言つた。『が、後は何ともないかね？』

『たゞ左の足が自由に利かないだけだ……』と、オプローモフは答へた。

『あゝ、イリヤ・イリイチ君！君は何うしたんだ？君は全然意氣地が無くなつて了つたぢやないか！今迄君は何を爲てゐたんだ？冗談ぢやない、僕等は別れてから最う五年も経つたのだよ！』

オプローモフは溜息を吐いた。

『何うして君はオプローモフカへ行かなかつたんだ？何うして手紙をよこさなかつたんだ？』

『アンドレイ君、君には何と言つていゝか分らない！君は僕を知つてゐるぢやないか、最う訊かないで呉れ給へ！』と、オプローモフは悲しさうに言つた。

『ぢや、今迄此の室にゐたと言ふのだね？』と、シトリツは室の中を見廻しながら言つた。『何處へも旅行しなかつたのだね？』

『さうだ、今迄此處にゐたんだ……最う僕は何處へも行かない！』

『何うだ、屹度行かないかね？』

『アンドレイ君……屹度行かない。』

シトリツは凝つと彼を見て考へ込んでゐたが、室の中を歩き出した。

『だが、オリガ・セルゲーウナさんは何うしてゐるね？壯健かね？今、何處にゐるだらう？憶えてるだらうか……』

オプローモフは言ひ切ることが出来なかつた。



『壯健だ、そして昨日別れたやうに君のことを憶えてゐる。彼女が何處にゐるかと思ふことは、今直ぐ言ふよ。』

『子供達は？』

『子供達も壯健だ……が、ねえ君、イリヤ君、君が此處に何時までもゐると云ふのは冗談だらう？僕は君を僕等の村へ連れて行く爲めに來たんだが……』

『厭だ、厭だ！』と、オブローモフは聲を低めて扉口の方へ振り返りながら言つた。明らかにどぎまぎしてゐることが分つた。『厭だよ、何うか其んな事を言はないで呉れ給へ……』

『何うして？一體君は何うしたんだ？』と、シトリーツは言ひ始めた。『君は僕の心を知つてゐるだらう。僕は疾くから之を問題にして、今迄忘れなかつたのだ。今迄は種々な用事に取り紛れてゐたのだが、最う今では暇になつた。是非君は僕等と一緒に、僕等の近くで暮す必要がある。僕とオリガとは然う決めたのだから、屹度さうする。君に會つて見りや、君は斯の有様だが、幸ひ大した事もないやうだ。實際意外であつた……が、兎に角行かう！……僕は力づくでも君を連れて行く！生活状態を變へなければ不可ない。君には分つてゐるだらう……』

オブローモフはもどかしさうに此の長談議を聞いてゐた。

『そんな大層を出さないで呉れ給へ。何うかも少し静かに！』と、オブローモフは嘆願した。『彼處に……』  
『彼處に何だね？』

『皆なが聞いてゐる……主婦は僕が本當に行きたがつてゐるかと思ふよ……』

『で、それが何だ？勝手に何でも思ふがいぢやないか！』

『あゝ、君、そんな事が出来るものか！』と、オブローモフは遮つた。『ねえ、アンドレイ君！』と、オブローモフは今迄聞いたこともないやうなきつぱりした調子で付け足した。『そんな事を考へても駄目だよ。僕には何にも言はないで呉れ給へ。僕は此處にゐるから。』

シトリーツは驚きの眼で自分の友を見た。オブローモフは落着いた決心のある態度でシトリーツを見た。

『イリヤ君、君は滅びたのだよ！』と、シトリーツは言つた。『此の家と、此の女と……此の有ゆる生活状態とは……いや、そんな事はあるまい、行かう、行かう！』

シトリーツはオブローモフの袖を掴んで、扉口の方へ引つ張つた。

『何故、僕をそんなに連れて行きたいのだ？何處へ？』と、オブローモフは反對しながら言つた。

『此の穴と沼との中から、光のある廣々とした世界に連れて行くんだ！其處には健康な常規的な生活がある！』と、シトリーツは嚴然として命令するやうに言つた。『君は何處にゐると思つてゐるんだ？君は何うなつたと思つてゐるんだ？考へて見給へ！鼯鼠が穴の中にあるやうに、君は眠る爲めに斯んな生活状態を作つたのぢやないか？君、よく考へて見給へ……』

『思ひ出させないで呉れ給へ、過去には手を觸れないで呉れ給へ、取り返しつかないことだから！』



と、オブローモフは判断力と意志とを十分に意識しながら、物思はしさうな顔附をして言つた。「君は僕を何うしようと云ふのだね？僕は君が僕を連れて行かうとする其の世界とは永久に離れて了つたんだ。引き放された兩半分を粘着けて以前の通りにすることは、君に出来るものぢやない。僕の患部は此の穴に生え附いて了つてゐる。若し之を引き離せば——死ぬだけだ。」

「でも君、よく周圍を見廻して見給へ。君は何處にゐると思つてゐるのだ？誰と一緒にゐると思つてゐるのだ？」

「それは分つてゐるよ。感じてゐるよ……あゝ、アンドレイ君、僕はすっかり感じてゐる、すっかり分つてゐる。僕は最う疾くから世間に生活するのが厭であつた！が、たとへ生活したくても君と一緒に君の路を行くことは僕に出来ない。……尤も一時は出来るやうなこともあつたかも知れないが、今は……（彼は眼を伏せて、暫らく口を噤んだ。）今は、最う遅い……君は君で行き給へ、僕の前に立停らずにね。僕は君の友情に感謝してゐる。——之は確かだ。が、君のお世話には感謝しない。」

「イリヤ君、君は何を言つてゐるんだ。其んなことは言はなくつてもいい。兎に角、僕は君を連れて行くよ。君を連れて行くのは、心配でならないからだ……ねえ、よく聞き分け給へ。」と、シトリーツは言つた。「何か羽織り給へ、僕の許へ行かう。僕の許で晚餐を食り給へ。僕は種々な事を君に聞かせてやる。君は、今僕等の間に問題になつてゐる事を知らないだらう。君は聞かなかつたかね？……」

オブローモフは不審さうにシトリーツを見た。

「さうだ、君は誰にも會はないのだね、僕はそれを忘れてゐたんだ。さア、行かう、すっかり君に話す……其處の門の傍の馬車の中に誰が僕を待つてゐるか知つてゐるかね……此處へ呼ばう！」

「オリガさんだな！」と、突然にオブローモフは吃驚して口走つた。と、彼の顔色はさつと變つた。「何うか此處へ入れないで呉れ給へ、何うか歸つて呉れ給へ。何うか之れで歸つて呉れ給へ！」

オブローモフはシトリーツを衝き遣るやうにした。が、シトリーツは身動きもしなかつた。

「僕は君を連れずにオリガの許へ行くことが出来ないんだ。ねえ、イリヤ君、僕は約束してゐるんだ。今日でなければ明日でもいい、兎に角、時期を決めて呉れ給へ、でないと僕は此處を動かない……明日でも明後日でもいい、何れにしても會はなけりやならないんだ！」

オブローモフは首垂れたまゝ、シトリーツを見得ずに黙つてゐた。

「何時にして呉れるのだね？オリガが僕に訊くからさ。」

「あゝ、アンドレイ君。」と、オブローモフはシトリーツに抱き着いて、自分の頭を彼の肩に載せながら優しい哀願するやうな聲で言つた。「僕を放棄して置いて呉れ給へ……忘れて呉れ給へ……」

「何うして？永久に？」シトリーツは吃驚して斯う訊くと、オブローモフの手から離れて彼の顔を見た。

「さうだよ！」と、オブローモフは囁いた。

シトリーツは彼から一足後へ退つた、

「イリヤ君、君は何うしたんだ？」と、トシリーツは詰るやうに言つた。「彼女の爲めに、彼の女の爲めに



君は僕を衝き退けるのだな！……あゝ！」と、シトリツは突然に痛みでも感じたやうに叫んだ。「彼の赤兒は、今、僕は見た……イリヤ君、イリヤ君！此處から逃げ出し給へ、速く行かう、速く！君は最う陥つてゐるんだ！彼の女は……彼の女は君と何んな關係なんだ……」

『妻だよ！』と、オプローモフは落着いて言つた。

シトリツは化石したやうになつた。

『が、彼の赤兒は——僕の息子だ！君を記念してアンドレイと云ふ名だ！』と、オプローモフは一息に言つて了つた。そして自分から祕密の重荷を下したやうに靜かに心を落着けた。

と、シトリツの顔色は見る／＼變つた。彼は吃驚した、そして殆んど意味のない眼附で周圍をきよと／＼と見廻した。彼の前には突然に《深淵が開かれ》て、《石の壁》がそ／＼り立つた。シトリツはオプローモフを奪はれたやうに、オプローモフが自分の眼の前で消えて了つたやうに落膽して、燃えるやうな悲哀を感じた。人々友達と別れた後、胸を波立たせて其の友達に會はうとする時に、其の友達が疾く／＼にゐなくなつたことや、死んで了つたことなどを知つた時にそんな悲哀を感じるものである。

『滅びて了つたんだ！』と、シトリツは機械的に囁いた。「オリガに何と言つたらいゝだらう？」

オプローモフはシトリツの最後の言葉を聞くと、何事か言ひたかつたが、言へなかつた。彼はアンドレイに兩手を伸し、戦場で、死ぬ前に抱き合ふやうに二人は黙つたまゝしつかり抱き合つた。此の抱擁は二人の言葉と、涙と、感じとを壓迫して了つた……

『どうか僕のアンドレイを忘れないで呉れ給へ！』と、オプローモフは最後に段々消えて行くやうな聲で言つた。

アンドレイは黙つたまゝ徐かに室を出ながら思ひ沈んだまゝ、徐かに屋敷を通り抜けて馬車に乗つたが、オプローモフは長椅子に腰掛け、兩腕を卓子に突き、兩手で顔を蔽うた。

《大丈夫だ、僕は君のアンドレイを忘れやしない。》と、シトリツは屋敷を通る時に悲しさうに考へた。「イリヤ君、君は最う滅びたんだ。君に、君のオプローモフカは最う藪ではない、順序が出来て、其處に太陽の光線が射してゐると言つたところで何にもなりやしない！四年の後にはオプローモフカは宿場になり、君の百姓共は稼に出かけ、やがて、君の穀物は鐵の壺で船着場に運ばれるやうになることを君に話すまい……が、其處には……學校や、教育所や、其の他種々なものが出来る……さうだ、君は新しい幸福に吃驚するくらゐだ。其んなものを見慣れない眼には眩しい程だ。が、僕は君のアンドレイを君が行き得なかつた處に連れて行かう……彼に君の青年時代の空想を實行させてやる。『古いオプローモフか、ぢや之れで別れよう！』と、シトリツは最後に小さい家の窓を振り返りながら言つた。『君は最う自分の一生を生活し盡したんだ！』

『何うでしたの？』と、オリガは酷く胸を動悸々々させながら訊いた。

『何でもなかつた！』と、アンドレイは引き千切つたやうに淡白りと答へた。

『オプローモフさんはお變りなくつて？ 壯健でしたの？』



『あゝ。』と、アンドレイはあやふやに答へた。

『でもあなたは餘あまりお速はやかつたわね？ 何うして私を彼方あつちに呼ぶか、あの方を連れて來こるかなさらなかつたの？ 私を連れて行つて下さい！』

『いけない！』

『ぢや何か變りでもあつたんですか？』と、オリガは吃驚して訊いた。『深淵ふちが開けた』のぢやなくつて？ 私に聞かせて下さらないのですか？』

シトーリツは黙つてゐた。

『ねえ、あなた、オプロモフさんの家には何か起つたのですか？』

『オプロモフ主義さ！』と、アンドレイは憂鬱に答へた。そしてオリガの其後の質問には悲し氣な沈黙の答へが家に歸り着くまで保存されてゐた。

十

五年過ぎた。ウイボルグスカヤ・ストロナには種々な變化があつた。プシエニーツイナの家に通ずる淋しい街道には澤山な別荘が建つた。別荘の間には高く、そして長い石造の建物が衝つつ立つた。之は政府の建物で、之が爲めに今迄懶惰と平靜との平和な安息所の窓硝子に楽しく射さしてゐた太陽の光線が遮さぎられてゐた。

家其物も非常に古びて了つて、丁度髯も剃らず、顔も洗はない人のやうに、粗末に、且つ不潔に見えてゐた。ペンキも剥げ、雨樋も處々壞こぼれてゐた。それが爲めに屋敷の中には溝どろが出来てゐた。溝どろには以前のやうに一枚の狭い板が渡してあつた。誰か木戸の中に入つて來ると、老耄おおいれた黒い牝犬が元氣よく鎖を引かずに氣憤きぶんい暖れ聲で吠えてゐたが、犬小舎から出なかつた。

家の中も何と云ふ變化だらう！ 此の家を取締つてゐる者は、他の女で、以前の子供達の騒ぎ聲も聞えない。此の家には再また時々タランチェフの赤いどろんとした顔が見えた。が優しい暢氣のんきなアレクセーエフは其後最う見えなかつた。ザハールもアニシヤもゐなかつた。新らしいてつぷりした女中がアガフィヤ・マトウエーウナの靜かな言ひ附を愚圖々々と實行しながら料理部屋で働いてゐた。例のアクーリナは例の通り裾を帯の間に押し込んで、槽たねや大壺などを洗つてゐた。例の睡つたやうな額附をした屋敷番は、矢張り例の外套を着て、馬小舎の中で楽しさうに自分の一生を送つてゐた。格子扉の側では朝早く一定の時間に、脇の下に大きな紙挾を抱へ、夏も冬も護謨靴を穿いた（兄）の姿がチラつき出した。

ぢや、オプロモフは何うしたのだらう？ 彼は何處へ行つたのだらう？ 何處にゐるのだらう？ 彼の身體は程近い墓地の、灌木の間の靜かな處に、粗末な瓶かの中で平和に横はつてゐた。懐かしい手で植ゑられた連翹の枝は、墓の上に假睡まごんでゐた。蓬も靜かに其の匂を放つてゐた。丁度、靜寂の天使がオプロモフの夢を守つてゐるかのやうであつた。

彼の妻の愛らしい眼が、彼の生活の各瞬間を如何に眼敏く見守つてゐても、永久の平和と、永久の靜



寂と、毎日の退屈なことは、靜かに生命の機械を停めたのである。イリヤ・イリイチは、何の苦痛も苦悶もないらしく、丁度螺を巻き忘れた時計が停るやうに此の世の生活を終つたのであつた。

誰一人としてオプローモフの最後の瞬間を見た者もなければ、又、彼の臨終の呻きを聞いた者もなかつた。オプローモフはあの後一年経つてまた中風に襲はれたが、其の時も幸に生命を取り止めた。その代り彼は酷く蒼くなつて、身體も弱り、食も減じ、庭の散歩も減多になつた。そして何時黙つても考へ込んでばかりゐた。何うかすると泣いてゐることさへあつた。彼は死の近づいたことを知つて其れを怖れてゐたのであつた。

其後彼は度々危篤に陥つたが、何うか斯うか恢復した。或る朝、アガフィヤ・マトウエーウナは、例の通り彼に珈琲を持つて行つた——と、彼は眠の床にゐるやうに死の床の上に優しい安らかな顔をして横はつてゐた。たゞ頭だけが少し枕からずれてゐるのと、片手が痙攣の爲めに心臓の上を壓へてゐただけであつた。其の心臓に血が集まつて停滞したものと見える。

アガフィヤ・マトウエーウナは三年間、獨りで暮してゐた。此の間に凡ては以前の有様に變つて了つた。兄は相場に手を出して、失敗し、種々な狡猾手段や、阿諛などを弄して辛つとのこととで以前の位置なる省の秘書官にありつけた。(其處では百姓に就いての事務を取扱つてゐるのであつた。)そして再たててく歩いて役所へ行つた。二十五哥の銀貨や、五十哥の銀貨や、二十哥の銀貨などを暫く隠れてゐた財布に入れて持つて來た。世帯向の方は粗末で單純ではあつたが、オプローモフが來る以前のやうに脂

濃い贅澤な物を食べてゐた。

一家の中で一番いゝ役目は兄の妻のイリーナ・パンテレーヴナであつた。此の女は遅く起き、一日の中に三度珈琲を飲んで、三度衣服を着換へ、たつた一度世帯の方を見廻るのであつた。それも自分の下袴スカートが出来ただけ固く糊してあるか何うかを見る爲めであつた。其れ以外、此の女は何事にも手を出さなかつた。アガフィヤ・マトウエーウナは、以前の通り、一家の生きた振子であつた。彼女は料理部屋と食卓とを監督して、家ぢうの者にお茶と、珈琲とを飲ませたり、皆なの衣服を縫つたり、衣服と、子供達と、アクーリナと、屋敷番とを監督したりしてゐた。

が、何うして彼女はそんな事を爲るのだらう？ 彼女は地主オプローモフの細君ではないか。彼女は誰の干渉をも受けずに別に暮して行くことが出来たのだ。彼女には誰の助も要らなければ、別に不自由なものもなかつた。何うして彼女は他人の面倒な世帯に手を附けたり、他人の仕事や、種々な詰らない事それは女が愛の力により、家庭の心配に對する神聖な義務觀により、或は毎日の食物に對する趣味によつて一身に引受けて行くもの、そんな事を心配したりするのだらう？ ザハールや、アニシヤや、彼女の召使達は何處へ行つたのだらう？ 彼女の爲めに其の夫が残した生きた形見なる小さいアンドリュシヤは何處へ行つたのだらう？ 以前の夫から残された彼女の子供達は何處へ行つたのだらう？

彼女の子供達は一人前になつた。竟り、ワーニユシヤは學校を卒業して務に就き、マーシエンカは或る官廳の取締の許へ嫁に行き、アンドリュシヤはシトリツと其の妻との望みて、彼等の手下で教



育されることになつて、後等の家族の一人になつてゐた。アガフィヤ・マトウエーウナはアンドリユーシヤの運命と、自分の最初の子供達の運命とを混同して見るやうなことを決してしなかつた。尤も心の中では無意識に皆なを同じく愛してゐたが、然し彼女はアンドリユーシヤの教育や、生活状態や、將來の生活などをワニユーシヤや、マーシエンカの生活から深淵ふちで分つてゐた。

『あれ達は私のやうな不器量者なものです。』と、アガフィヤ・マトウエーウナは無頓着に言つた。『あれ達は生れた時から黒かつたのです。けれど此の子は、』と、彼女は殆んどアンドリユーシヤを尊敬するやうに、悸々しないまでも幾らか用心深く、アンドリユーシヤを撫なしながら附け足した。『此の子は——且那の子なのです！だから此の子は白くつて、すき透るやうな色をしてゐるのよ。手や足なども小さいし、頭髮は絹のやうです。亡なくなつた且那にそっくりだわ！』

で、彼女は少しも躊躇せず、しかも幾分喜びさへ感じたながら、彼を教育してやらうと云ふストーリーツの由し出を承諾した。彼女はアンドリユーシヤがストーリーツの手許に居つてこそ應おこはしいので、斯んな處で、『斯んな薄暗い處で』自分の甥に當る兄の汚いな子供達と遊んでゐるのはよくないことだと思つてゐた。

エプローモフが死んだ後、半年の間ばかり彼女は悲しみの中にアニシヤや、ザハールと一緒に家で暮してゐた。彼女は夫の墓へ小徑ゆきまを往復し、何時も眼を泣き腫らし、殆んど何にも食べもしなければ、飲みもせずに、たゞ僅かに茶を飲むだけであつた。夜なども大抵眠らなかつたので、彼女は酷ひどく寢れた。

彼女は誰にも自分の悲しみを漏さず、死に別れた時から日が経つて従つて、益々自分の中に、自分の悲しみの中に沈んで行きながら皆なから遠ざかつた。アニシヤからさへ遠ざかつた。で誰一人として彼女の心の有様を知つてゐる者はなかつた。

『お前さんとこの奥様は、且那樣のことを思つて始終泣いてばかりいらつしやるね。』と、食糧品の市場で番頭が女中に言つた。

『始終且那のことを思つて悲しんでゐるんだよ。』と、墓地の會堂で、執事が聖麵麴を焼く女に彼女を指差しながら言つた。慰めのない寡婦のアガフィヤ・マトウエーウナは毎週其の會堂に祈禱に行つて泣くのであつた。

『あれぢや、奥様の身體からだが心配だ。』と、兄の家の者は皆な言つた。

或日のこと、彼女の許へ兄の家族が突然に、ぞろ／＼と子供達を引き連れてやつて來た。タランチェフさへやつて來て、皆なで同情の意を表した。下らない慰安や、注意が彼女に浴あびせられた。『自分の身體を壊してはいけない。子供達の爲めにもよく身體を大事にしなけりや。』——斯んな言葉は彼女が十五年前に先夫の死んだ時に聞いたことであつた。尤も其の時はさうした言葉は彼女の希望に充ちた活動力を動かしたが、今は何故か彼女の中に悲哀と嫌惡の情とを起すものであつた。

話が他の事になつて、彼等が彼女と一緒に再またた暮したいとか、『自分の親戚の者達と一緒に居れば悲しみも幾らか減る』だらうとか、誰でも彼女程一家の整理に巧みな者はないから、彼等も彼女と一緒にゐ



たいのだなどと言つた時、彼女は非常に悲しみが減つたやうに思つた。  
彼女は暫く考へさせて貰ひ度ひと願ひ、其後二ヶ月ばかり経つて、遂々一緒に暮すことを承諾した。  
此の時、ストーリーリツは、自分の手許にアンドリユーシヤを引き取つたので、其の時から彼女は一人ぼつちになつた。

それから彼女は喪服を着、黒い毛織の手巾を頸に捲き、室から料理部屋に影のやうに歩き、以前の通り、戸棚を開けたり、閉てたり、裁縫をしたり、レースに火熨をかけたしたりした。が、静かな、力のない低い聲で口を利いた。そして以前とは違つて、周囲をきよろく見廻しながら茫然と其れから其れへと眼を走せてゐた。其の眼には何かを思ひ詰めたやうな表情と、内心に溢れてゐる考へとが現はれてゐた。此の考へは、彼女が意識的に、長い間凝つと夫の死んだ顔を見守つた其の瞬間に、何時の間にか彼女の顔に宿つたもので、それ以来彼女は其の考へを棄てる事が出来なかつたのである。

彼女は家ぢうに身體を動かして、爲なければならぬ事を残らず爲したが、彼女の考へは其處になかつた。彼女は夫を失ふと同時に、急に夫の死骸の上に自分の生活があることを悟り、其の生活の意義を考へたらしい。此の考へは、何時も彼女の顔に影のやうに宿つてゐた。やがて彼女は活々とした悲しみを感じて泣き出し、夫を失なつたと云ふ意識に思を集めた。小さいアンドリユーシヤ以外の物は、皆な彼女の前から姿を消して了つた。たゞアンドリユーシヤを見た時だけ、彼女の中に生活の印と、夫の顔附とが生々と浮んだ。彼女の眼は喜びの光に満たされ、やがて追憶の涙に灑がれた。

アガファイヤ・マトウエーウナは自分の周囲の者には無頓着であつた。兄が無駄に金を費つたとか、買ひ方が下手だとか、ピフテキが焼け過ぎてゐるとか、魚が古いなど言つて怒つても、又、彼の妻が、下袴の糊のつけかたが足りないとか、茶が薄いと、冷たいなど言つても、肥えた女中が失敬なことを言つても、アガファイヤ・マトウエーウナは自分のことを言はれてゐるのではないやうに氣にも留めなかつた。奥様とか、女地主とか云ふ當擦つけた囁も聞えないやうであつた。

彼女は何事にも眞面目な自分の悲哀と、溫柔しい沈黙とで答へてゐた。

かと思へば、祭日や、記念日や、乾酪週間などの楽しい晩に、家ぢうの者が皆な騒いだり、歌つたり、食つたり、飲んだりしてゐる時には、彼女は皆な楽しんでゐる中に、一人熱い涙を流して、自分の室へ隠れて了ふのであつた。

やがて彼女は再々種々なことを思ひ詰めた。何うかすると兄や、兄の妻などを、誇と憫みを感じながら見ることもあつた。

彼女は自分の生活が一時生々として光明に充たされたことや、神が自分の生活に靈を入れて再々扱取つたことなどを悟つた。一時、自分の心が輝やいたが、再々永久に暗くなつたことをも悟つた……さうだ、永久にだ。其の代り彼女の生活は永久に意義のあるものになつた。今になつて彼女は、何の爲めに自分が生活したのかと云ふことも、又、生き甲斐のある生活であつたことも知つた。

彼女はオブローモフを愛してゐた。戀人として、夫として、旦那として非常に愛してゐた。が、たゞ



決して此の事を以前から誰にも言ひ得なかつた。また彼女の周囲にゐる者達も誰一人として彼女の心を理解し得なかつたのだらう。それに何處から彼女は自分の心を言ふ言葉を見附けられよう？ 兄や、タラシチエフや、兄の妻などの愛想には其んな言葉はなかつた。と云ふのは、彼等には其んな理解がなかつたからである。たゞイリヤ・イリイチだけは彼女の心を理解し得たのだが、彼女は彼に決してそれを話さなかつた。何故かと言へば、彼女自身、其の時分はまだ自分の心が分つてゐなかつたし、又、それを言ひ得なかつたのだ。

彼女は年を取るに従つて、自分の過去を益々判然と理解した。彼女は益々深く考へ、益々沈み勝になり、益々思ひ詰めるやうになつた。彼女の全生活に静かな光が注がれるやうになつたのは、七年間が一瞬間のやうに飛び過ぎてからであつた。彼女は其れ以上何にも望みもしなければ、何處へも行かうとしなかつた。

たゞ冬になつてシトリツが村から来た時だけ、彼女は彼の家に駆けつけて、アンドリユーシヤをまじまじと見ながら、優しく、悸々と彼を撫し、アンドレイ・イワノウィチに何事かを言ひ、彼に御禮を述べ、終ひに自分が思ひ詰めてゐることや、自分の心の中に閉ぢ籠つてゐることなどを皆言つて了はうと思つた。アンドレイは彼女の心を理解して呉れると思つたからである。が、それさへ言へなかつた。で、オリガの傍に駆け寄つて、彼女の手に唇を押し着けたまゝ、熱い涙を瀧のやうに流した。オリガは知らず識らずアガフィヤ・マトウエーウナと一緒に泣き出した。アンドレイは酷く感動して、急いで其の

室から出て了つた。

彼等の間の連鎖になつてゐるものは、死んだオブローモフの心が水晶のやうに清かつたことに對する同情と記憶とであつた。彼等はアガフィヤ・マトウエーウナに、自分達と一緒に村へ行つて、アンドリユーシヤの傍で暮さないかと勧めた。が、彼女はたゞ『生れた處で一生を送つて、其處で死にます。』と言つた。

シトリツが村の管理の報告を彼女にしても聞かないし、彼女の取るべき収入を送つても受け取らずに、皆な返してアンドリユーシヤの爲めに保管して置いて呉れと頼んだ。

『之は彼ので、私ではありませんから、』と、彼女は頑固に言つた。『彼に要ることがあります。彼は旦那ですもの、私は斯うして暮して行きます。』

十一

或る日、丁度正午頃、ウイボルグスカヤ・ストロナの板敷の人道を、二人の紳士が歩いてゐた。彼等の後に隨いて馬車が静かに行つた。彼等の中の一人はシトリツで、一人は彼の友人の文士であつた。此の文士はてつぷりとし、冷淡な顔附をし、眠つたやうな沈んだ眼附をしてゐた。二人が會堂の前まで來ると、丁度聖餐式が済んだ時なので、大勢の人が街道へどや／＼と出て來た。一番先に乞食が出て來た。皆な多少づゝの金を乞食に遣つた。



『不思議だね、何處から乞食共は出て來たのだらう?』と、文士は乞食を見ながら言った。

『何處から來たかつて? 彼方此方の隙間や隅から匂ひ出して來たんだよ……』

『いや、僕が訊くのは、そんなことぢやない。』と、文士は反對した。『僕が不思議に思ふのは、何うして斯んな乞食が出來たのだらうと云ふのさ、意り、何うして斯んな境遇に陥つたのだらうと云ふのさ。彼等は突然に出來たのだらうか、それとも次第に出來たのだらうか? 之は社會の真相だらうか、それとも一時的な状態だらうか?』

『何の爲めにそんな事を君は訊くんだね? Mysteres de Pétersbourg にでも書くのかね?』

『或は書くかも知れない……』と、文士は氣惰さうに欠伸をしながら言った。

『それには好い機會だ。好きなのに一留銀貨でも呉れて訊いて見給へ、奴、すっかり自分の歴史を君に賣るよ。君はそれを書きつけて、高價く賣りつけるさ、其の老人が一番いゝ乞食の型だ、一々典型的のやうだ。おい、老人! 此處へ來い!』

老人は呼び聲のする方へ振り向き、帽子を脱いで二人に近づいた。

『お惠深い旦那様方!』と、老人は嘎れ聲を出した。『三十年の永い闘ひで老い耄れやした此の憫れた軍人をお助け下せえまし……』

『ザハール!』と、シトリーツは吃驚して言った。『お前はザハールぢやないか?』

ザハールは急に口を噤み、やがて片手を眼の上に翳して、凝つとシトリーツを見た。

『旦那様、お前様、何方様でがすべえ……すっかり眼が見えなくなりやして!』

『お前の旦那の友達なるシトリーツを忘れたのか。』と、シトリーツは責めるやうに言った。

『あゝ、あゝ、旦那様、アンドレイ・イワヌイチ様! あゝ、眼が見えねえ! 旦那様、旦那様!』

ザハールは頻りに何事か言ひながらシトリーツの手を捉へようとしたが、捉へることが出來なかつたので、彼の衣服の裾に接吻した。

『此の呪はれた犬のやうな俺が、斯ねえな嬉しい事に出會したなア、全く神様の御蔭でがす……』と、ザハールは泣くでもなければ、笑ふでもないやうな聲で言った。彼の顔は、額から額まで一面に紫色の燒判でも捺したやうになつてゐた。鼻は更に一層ひどく青味が、つたものに蔽はれてゐた。頭もすっかり禿げてゐた。頬髯は以前の通り房々してゐたが、糸のやうにごくごくに紛れて、兩方とも處々に雪のやうに眞白い手が生えてゐた。彼が着てゐた外套も、古い色の褪せたもので、而かも半分は千切れてゐた。彼は素足で散々穿き古した靴を穿いてゐた。兩手には、もうすっかり毛の摺り切れた毛皮の帽子を持つてゐた。

『あゝ、惠み深い旦那様! 今日のお祭は俺に取つて、何てえ有難えお祭で御座りやすべえ……』

『お前の此の姿は何だ? 何うしたんだ? お前は恥かしくないのか?』と、シトリーツは嚴しく訊いた。

『あゝ、旦那様、アンドレイ・イワヌイチ様! 何うしやすべえ?』と、ザハールは重苦しさに溜息を吐きながら言ひ始めた。『何を食べて生命を續ぎやすべえ? アニシヤがまだ生き居る時分には、俺も斯ね



えに徘徊かねえて、食ひ残しの麵麩などにありつけやしたが、彼女が虎列刺で死んでからは——何うか天國に行つて呉れるようにと願つて居りやすが——あの兄の且那は俺を置くのが厭だと言つて、食客奴と俺のことを言ふんですが。ミヘイ・アンドレイイチ・タランチェフは、俺の傍を通る毎に足で蹴らうとするだ、とても生きてはゐられねえだ。何のくれる悪口を言はれたか知れやしねえ。本當に且那様、一片の麵麩さへ喉に通らなかつたんですが。あの奥様が御座らつしやらなけりや、あ、何うか壯健で御座ればいゝが！」と、ザハールは十字を切りながら附け足した。「私は疾くの背に寒さに死んで居りやすところを、奥様は冬には衣服を下さるし、麵麩も食べたいだけ食べさせて下さるし、煖爐には炭を入れて下さるし——何から何まで面倒見て下さいやした。俺の爲めに奥様が呵られたこともありやした。で、俺は眼の向いた方に出やしただ。もう之で二年の間、悲しい思をして居りやす……」

『何うして仕事を見附けないんだ？』と、シトリーツは訊いた。

『且那様、アンドレイ・イワヌイチ様、今、何處に仕事か御座りやすべえ？ 二ヶ處に仕事も御座りやすが、使つて呉れやしねえだ。今時は何でも以前とは違つて悪くなりやしたよ。従僕でさへ字の見える者でなけりや駄目でがす。どねえな有名な人の許でも、客間に従僕達がうよくしてゐるやうなことは御座んしねえ。大概一人の従僕を使つてゐて、二人使つてゐる處は珍らしいでがす。靴でも自分で脱ぎやすからね。偉い機械が出来たものでがす！』と、ザハールは悲しさうに續けた。「恥かしい事ですが、且那と云ふものは段々無くなつて行きやすだ！』

ザハールも溜息を吐いた。

『でも、俺は、獨逸人の商人に雇はれて、應接間掛になりやした。大層都合がよかつたでがすが、貯蓄室掛にされたのでねえ、之は俺に似合はねえ仕事なんで、或る日、ボゲーマか何かの食器を持つて歩いて居りやすと、床が滑らからで、つる／＼滑るんで——どしんと轉んで了ひやした！ 俄かに俺の足が滑つて、食器は盆と一緒にガチャント床に衝突りやした。それで俺は追ひ出されたんでがす！とところが幸ひ、一人の年老つた伯爵夫人に俺の姿が氣に入られ、「見たところ氣品のある男」だと言つて、俺を門番にして呉れやした。年寄にはいゝ仕事で、たゞ勿體ぶつて椅子に腰掛け、足を組み合はせて、びく／＼動かしてさへ居ればいゝのでがす。誰か來ても、直ぐに返事もせず、最初は怒鳴りつけて置いて、辛つとこのことで通すくらゐなものでがす。人によつては突き返すこともありやす。ですが、いゝお客には斯う云ふ具合に杖を振るんでがす！』と言つてザハールは手を振つて見せた。「言ふことが何でも媚るやうな人です！ けれど奥様は人好のしねえ方で、お氣の毒な方でがす。或時、俺の部屋を覗いて、南京蟲を見附けると、足踏して、俺でも考へ出したかのやうに怒鳴るんでがす！何處の世帯にでも南京蟲は居りやすよ！ 其の次に俺の傍を通る時に、俺の酒臭いのを嗅ぎつけたんでがす、……本當に拙かつたんでがすよ！ それで謝絶られて了ひやしただ。』

『實際、そんな姿をしてゐると、臭いぢやないか！』と、シトリーツは言つた。

『且那様、アンドレイ・イワヌイチ様、悲しい事で御座りやす。が、悲しみながらも、』と、ザハールは



苦々しきうに顔を擧めながら嘆れ聲で言った。「馭者にならうとして、或る主人に雇はれやしたが、足を挫きそれに力は無くなるし、年は取るしね！ 悪い馬には出會すと云ふ始末で、或る日、馬車の下に轆かれて俺はもう少しで轆き潰されるところでしたよ。一度などは婆さんを馬車から落して……」

『よし、もう澤山だ。もう飛び廻つたり、酔つ拂つたりせずに、俺の許へ来い。お前の住む處を作つてやる。村に行かう——何うだ？』

『はい、旦那様、アンドレイ・イワヌイチ様、でも……』

ザハールは溜息を吐いた。

『此處から、お墓から離れるのは厭ですが！ 俺共の恩人、イリヤ・イリイチ様。』と、彼は咽びながら言った。「今日もまたあの方の爲めにお祈りをしやした。あの方が天國に行かつしやるやうにお祈りをしやした！ 神様はあねえな旦那様を取り上げてお了ひなされたがす！ あのだんな様は人達を喜ばせて暮して御座つた。百年も生きて御座ればいゝに……」と、ザハールは擧めながら、嘆れ聲で言ひ足した。「今日もあの方のお墓に参りやした。俺は此處へ来るやうに彼處へも行きやす、そして其處に坐ると、涙が流れやすだ……種々な事を時々考へると、四邊が静かになつて、『ザハール！ ザハール！』と云ふ叫び聲が聞えるやうですが。何うかすると、春中が、ぞく／＼することもありやす！ あんな旦那様は又とありやしねえだ！ お前様をどねえに愛して御座つたか——あゝ、神様、旦那様の靈を天國にお入れ下せえ！」

『まア、いゝからアンドリユー・シヤを見に来い。俺が言ひ付けて、お前に食はせもするし、着せもする。』

お前は其處で勝手な事をして居れるんだ！」と、ストーリーツは言つて、彼に金を遣つた。

『参りやす、何うしてアンドレイ・イリイチ様を見に行かずにみられやすべえ？ 多分、大きくならつしやつたことですがすべえに！ あゝ！ 神様は嬉しいことに引き合せて下された！ 参りやすよ、旦那様、何ぞ御壯健に、御幸福に……』と、ザハールは動き出した馬車の後から叫んだ。

『何うだ、君、此の乞食の歴史を聞いたかね？』と、ストーリーツは自分の友人に言つた。

『だが、あの乞食が言つてゐたイリヤ・イリイチと云ふのは誰のことだね？』と、文士は訊いた。

『オプローモフさ、僕は君に彼のことを度々話したぢやないか。』

『さうだ、名前は記憶してゐる。君の友人なんだね、親友なんだね。で、其の人は何うしたんだ？』

『死んだのさ、萬事休すだ。』

ストーリーツは溜息を吐いて、考へに沈んだ。

『だが、彼は他の者より無智ではなかつた。彼の心は鏡のやうに清く晴々してゐたんだ。彼は氣品のあつた優しい男であつた——が、死んで了つた！』

『何うして？ 何う云ふ原因で？』

『原因……何んな原因と言つて、其れはオプローモフ主義さ！』と、ストーリーツは言つた。

『オプローモフ主義！』と、文士は不思議さうに繰り返した。「何だね、それは？」

『今、君に話をしよう、が、一寸考へと記憶とを纏めるから。君はそれを書き付けて呉れ給へ。誰かの』



役に立つかも知れない。』

此處に書かれてゐるのは、シトリツが文士に話した事である。

一八五七——一八五八年

——了——

大正六年五月十一日印刷  
大正六年五月五日發行

(定價金八拾五錢)

オプロモフ

翻譯者

山内封介

發行者

佐藤義亮

東京市牛込區矢來町三番地

發行所

新潮社

電話番町(八九〇九番)

印刷所

東京市神田區宮本町五  
電話下谷、三二八九番

新潮社印刷部

印刷者 高橋治一

—番二四七一(京東)替振—



# トルストイ叢書

■中版三百二十頁  
■定價七十錢  
■郵送料一冊八錢

—最近發行にかゝるもの左の如し—

編六第

## コサツク

廣津和郎氏譯

刊新

全作中最も重きをなすもの一也。風光のすぐれたると、女の美しくしきを以て世界に名高き高架索はトルストイの藝術の搖籃なりき。若き砲兵士官たる彼が、戎衣に秘めたる彩管を揮つて、高架索の自然と自然のまゝなる風物を描き、コサツク女に對する強き憧れを描ける此自傳小説は、世界文學に並び無き力強き詩たらずんばあらず。

編七第

## 青年

江馬修氏譯

刊新

トルストイがセバストポリの陣中に書けるものにして、「幼年少年」に次ぐ其の生ひ立ちの記也。彼の鋭才敏感の少年イルテネフは更に一生の危機たる青年期に入つて、いかに感じいかに行へるか。之を研醜共にかくさず、善惡共に露はなる大膽深刻の告白に就て看よ。全トルストイの面影は、此の一卷の自傳的描寫の中に凝縮せる也。

阿部次郎氏 江馬修氏共譯

—再版出来—

# 赤い部屋

ストリンドベルヒ

「代表的傑作」

大版細字五百十頁・總洋布箱入美本・定價一圓六十錢、送料十二錢

瑞典唯一の大文豪ストリンドベルヒの代表作にして、其の自傳を經とし、當時の世相を緯とし、天才に稀有なる絶對的の誠實を以て用捨なく**人間生活の虚偽**を剔出す。美しくしき女優あり、不遇の天才あり、厭世家あり、陶酔の人あり、壁も天井も、血潮の如き紅を以て彩れる「赤い部屋」に集れる若き藝術家の群れは、或は**革命の血潮**を湧かし、或は**悲戀の火**に燃ゆ。情景複雑にして刺戟頗る強烈なる小説。これを原稿紙にして實に八百枚を越ゆるの雄篇。兩氏が二ヶ年に亘れる苦心の名譯也。

ストリンドベルヒ著

# 地獄

江馬修譯

著者は瑞典の文豪。煩悶の極途に狂し、狂中に在りて自らその状態を描き、感想を叙せる稀有の作品。深刻凄愴を極めて卒讀に堪へざらしむるものあり。譯筆最も精嚴。

總洋布美本  
價七十五錢  
送料八錢